季刊

唯物論研究協会編集

思想と現代

1989

17号

特集●いま、大学とは　学問とは

〈座談会〉
いま、大学とは　学問とは
小原秀雄／浜林正夫／矢澤修次郎
現代日本社会と大学・学問論……矢澤修次郎
アカデミズムとジャーナリズム……碓井敏正
知の構築への出航……川口啓明
現代における教養とはなにか……松井正樹
学問と政治……北村　実
社会主義戦略と知識人の役割……石井　潔
〈シリーズ　現代科学からの人間像〉
自然科学の人間像……水原洋城

発売元
白石書店

現代日本の支配構造分析

渡辺　治

質的変化をもたらしている高度成長後の社会関係と支配の構造を分析。　二五〇〇円

ジャパメリカの時代に

加藤　哲郎

日本の現段階をどう見るか。現状認識は、どのような発想の転換が必要か。　二三〇〇円

狂気の近代

藤田幸一郎

歴史認識はどのような転換をせまられているか。ユニークな西欧近代史試論。　一八〇〇円

女のアメリカ

荒　このみ

女たちの新しい生き方。興味ある最新情報。革命から展開へ。　一八〇〇円

聖母と娼婦を超えて

谷川　道子

共生した女たちに視点をおいた新たなプレヒト像へのアプローチ。　三五〇〇円

〒101 東京都千代田区西神田2-7-6川合ビル　花伝社　電話 03-263-3813　振替東京4-59661
発売元 共栄書房

対話とコミュニケーションの現状を総展望する！

対話の哲学

議論・レトリック・弁証法

島崎　隆著

A5判上製304頁
定価3000円

本書の主な内容

I 対話・レトリックをめぐる現状〔なぜ、いま対話とレトリックなのか〕II 民主主義の基礎としての対話〔対話の本質と歴史〕III 対話・レトリック哲学からの批判〔知の流動化へ向けて〕IV 真理反映説か真理合意説か〔対話の客観性をめぐって〕V 二つの弁証法の統合〔弁証法的方法の再構築へ向けて〕VI P・ローレンツェンの「対話論理学」〔西洋合理主義の極致〕VII ヤヌスとしてのレトリック〔新しい知の地平へ〕VIII 対話と「超対話」〔西洋と東洋の交差〕

みずち書房　東京都文京区本郷2-4-11近藤ビル　TEL03(813)7068

季刊 思想と現代 1989年3月 第17号

唯物論研究協会編集 発売元 白石書店

目 次

特集 いま，大学とは 学問とは

〈座談会〉

いま，大学とは 学問とは
……小原秀雄／浜林正夫／司会・矢澤修次郎 3

現代日本社会と大学・学問論……矢澤修次郎 23
——保守派の学問論をめぐって——

アカデミズムとジャーナリズム……碓井 敏正 39
——その本質と可能性——

知の構築への出航……川口 啓明 52

現代における教養とはなにか……松井 正樹 64

学問と政治……北村 実 78
——権力との関係を中心として——

社会主義戦略と知識人の役割……石井 潔 90
——ラクラウの民主主義論によせて——

〈シリーズ 現代科学からの人間像〉

自然科学の人間像……水原 洋城 105
——霊長類生態学の立場から——

〈文化時評〉

ドン・キホーテ症候群……太田 直道 112

〈もう一つの思想家像〉

寺田寅彦の科学思想……藤井陽一郎 123

◆ぶっく・えんど

いまどきのフェミニズム……細谷 真 135
——上野千鶴子の大冒険——

〈書 評〉

池谷・後藤他著『競争の教育から共同の教育へ』……山科 三郎 142

島崎隆著『対話の哲学』……横田 栄一 144

加茂利男著『都市の政治学』……古城 利明 146

佐藤・伊坂・竹内著『生命の倫理を問う』……島田 豊 148

〈前号批評〉

現代とフランス革命——視角の交錯——……石川 光一 150

「質問と対話のコーナー」設定のお知らせ…… 141

編集後記

装幀 フレッシュ・アップ・スタジオ・渋川泰彦

特集●いま、大学とは　学問とは

特集にあたって

今日、大学、学問は再び大きく問われつつある。知識化、情報化の方向を追求しつつあった日本産業社会が、高等教育にたいする無限の需要を喚起するとともに、研究・教育機関の効率的な再編、産学協同を押しつけようとしたことにたいして、当時の若者が総反乱を起こしたのは、今からほぼ二〇年前のことである。それ以来、大学、学問はどのように変化したのか。古今東西の歴史をひもとくまでもなく、大学、学問、青年が問題になるのは、きまって時代の大きな転換点でのことである。だとするならば、今日われわれは再び大きな節目を迎えているのではないか。そしてそれは、どのような性質のものであろうか。本特集は、以上のような疑問に答えるべく編集されている。またこの特集は、この転換点の質を決定する若い新しい仲間（大学生、青年）への熱いメッセージともなることを意図している。時代を拓く大学、学問、若者のためにこの特集を捧げる。

（編集部）

■特集　いま，大学とは 学問とは

〈座談会〉

いま，大学とは 学問とは

小原　秀雄
浜林　正夫
（司会）矢澤　修次郎

矢澤　本日はお忙しいなかをお集りくださり、有難うございます。まずこの座談会の「いま、大学とは　学問とは」というテーマについて編集委員会の意図を説明させていただきます。一九六〇年代末に大学と学問のあり方が問われて以来二〇年が経過したわけですが、今日再び大学とそこにおける学問が問題の焦点としてクローズアップされています。しかも一九六〇年代末とは異なって、保守派の知識人とその同調者たちの言動によって問題がクローズアップされたところに、今日という時代の一つの特徴があらわれていると言えなくもありません。しかしこう言ったからといって、もちろんわれわれは、東大の教官人事を契機とした狭い意味での「東大問題」に収斂（しゅうれん）していこうとするものではありません。逆に、それを今日における大学・学問の問題を歪めた形で反映したものとして理解し、正しい意味での大学・学問論として鋳直すことを意図しているものです。

そういう意味で今日ご出席の皆様に、現在の自分の大学における教育や学生の状態、それぞれの学部でどういう研究がされ、自分の研究がその他の大学共同体のメンバーとどういう形でリンクし、あるいはそれが総体として大学や学問にどれだけの有効性と実践性をもっているかというところを口火

にして、大学と学問の現状、それから現在における知が有効性を減少させているとするならばそれをどういう形で、どういう方向で再建していったらよいのかということをお話し願いたいと思います。それから若い人たちへのメッセージとして大学とはどんな所で、学問をやることの意味はどういうところにあるのかというようなアドバイスも最後にしていただければありがたいと思います。

それでは不躾ですが、小原先生あたりからいかがでしょうか。

大学と学問の現状

小原　必ずしも的確に表現できるとは思わないのですが、私のところの大学は単科大学で栄養学をやっていまして、しかも学長の方針として、栄養学は実践的なものでなければならない。つまり国民の健康に役立つものでなければならないという信念がありまして、学生も女子だけですがその九九%が就職するわけですから、働いている人間がもっている健全さというのは割合みんなもっているんです。

しかし進学の動機をみますと、社会的な動きと学生とのあいだに相互連関がありまして、たとえば少なくとも一〇年以上前までは食品添加物の問題などに一定の関心があって入学してきた学生がいたのですが、現在そういう学生は少なくなって、むしろ肥満とか腎臓に障害がある父親への食事療法がしたいとかいうことが動機になって進学してくる学生がかなりいます。それからこの程度の大学なら入れるからきたという学生もいて、こういう学生たちを相手に大学もいろいろ試みをやっています。で、まず感ずるのは、大学とは全員にAをつけてもいいしDをつけてもいいところなんだとか、出席も自由なんだと言うと、少し前だと額面通りに受け取ってくれてそこに信頼感みたいなものがあったが、今はそういう信頼感がなくなってきている。学ぶことも、理解するよりも覚えなければというくせがついている。

私は人間学と動物学ですので、教育委員会や学校の主催で話すときも、ヒトというのは教えたがり、同時に学びたがる性質を本性的にもっている種であるにもかかわらず、勉強嫌いになって高校を卒業してくる者が多い。ここに今の教育の「効果」が表れているというようなことを言ってやるんです。すると教育委員会の委員や校長さんはすごく嫌な顔をしますが、これは小・中・高の教育の問題だと思います。

生物学にしましても、生物についての物質的理解が深まったからといってきちっとした生物や生命像、生命観ができたかというとけっしてそんなことはなくて、むしろ生命について現在の主流である生物学で分析的・物質的側面を教われば教わるほど、ある面ではかえってそれと現実の生命現象との間の差が感じられるようになり、その差をオカルトとか宗教とか占いで埋めていく傾向がでてきている。実はここに現代の生物学教育の重大な課題があります。かつての大学の講義に求められるような、現代の科学研究の先端を教えればよいのかが問われていると思う。わたくし自身は単純に物質的・抽象的な自然ではなくて、現実にある自然というものがどういう存在形態をとっているかということを話すんですが、それが彼らの生物像や生命観として学生のなかに定着しないでむしろ試験を受けるための一つの知識というような受け取り方しかしてくれないところがありまして、正直なところ難しさを感じております。

矢澤　社会科学でも同じことが言えますね。

浜林　僕は歴史なんですが、経済学部で経済史をもっているんですが、一般的に言って歴史に対する関心がないですね。だから歴史のゼミというのはさびれている。もうやめられましたが、永原慶二さんの日本中世史なんて誰も来ない。僕は近代をやっていますので多少は来るのですが、中世などというものについては興味がない。僕ら学生の頃は、封建制の崩壊とか近代社会の成立とかが流行のテーマだったんですが、僕のゼミで卒論のテーマを選ばせますとたとえば「サッチャーの経済政策」などというものでして、もう歴史ではなくて時事問題なんですね。

ということはどういうことかと言いますと、今の世の中が変わっていくということには興味がなくて、これはもうこういう社会で、その社会のなかで目先どう行くかという短期的な視野しかもてず、だから興味がそこにしか湧かないということだろうと思うんです。部分的な知識はあるが全体がつかめないという小原先生のお話はそっくりそのまま同じ話なんです。

ところでもう一方では中世史はある意味でブームなんですね。古代史もそうです。これなど矛盾しているようですが、ブームになっている中世史や古代史というのは今につながっていない。昔話でそれはそれで完結してしまっている。藤ノ木古墳だというとワアッと集まり、古代のロマンだとかいう形ではやるのだけれど、そこから現代へどういうふうに流れ

てきたのかというパースペクティブは持っていない。そういう意味では時事問題と共通したところがあるんです。

矢澤　わたくしもそう感じます。わたくしは社会学でして、どちらかというと現在学なので、学生はたくさん集まるんですが問題がある。いつも学生に言うんですが、マルクスだとかウェーバーというような社会科学の歴史のなかで非常に傑出した研究者というのは、彼らが直面した資本主義がいったいどういうものであるのか、現実の問題をどう実践的に解釈するかというところから出発し、そこを中心にしながらしっかりと原始や古代にまでさかのぼり、また将来社会の構想まで展望する。そこでわたくしは、現在というところからどうやって歴史的パースペクティブをもつかという形で話すんですが、それがなかなかうまくいかない。そこらへんが現在の学生の問題点だろうと思います。

一九五〇年代のアメリカの学生のように、豊かな社会が永遠に続くといった錯覚をもっているところがありますね。彼らの意識の裏側にはどこかおかしいと感じているところもあると思うのですが、現実的には何をやっても変わるものではないとか、このままやっていけばなんとかなるのではないかという形で、学生が短期的視野しかもてないところに問題があると思います。ニュースペーパー・ソシオロジーという言葉がありまして、これは要するに新聞を見て社会学をやるという、アメリカで社会学を批判する言葉として使われているのですが、そういうところがあります。

もちろん小・中・高の教育にも問題があるのですが、大学はそういう学生を受け入れてどうやっていけばよいのか、ユニバーシティという一つの宇宙のなかに引き入れて、どうやって正確な自然観、社会観をもたせていくかということではいかがでしょう。

小原　教師の側のことで言えば、教えたいことが現実に増えている。それと教えるときに価値的に教えてはいけないということが、とくに自然科学では言われます。客観的・実験的な事実を自分の見方をできるだけ排除した形で教えなければならない。

Sさんという生物学者がいまして、〈Sの細胞学〉といったら我々からみると大変価値あるものなんですが、それに対してあるT大生が、「先生の主観的な細胞学でなく客観的な細胞学を教えてくれ」と言ったというんです。我々は〈〇〇先生の〉というのがあるからそこへ行って勉強するわけで、それが大学だと思っていましたから、これは大変なショックです。

ところが最近は若い先生でも、〈○○先生の〉を排除した〈情報〉を客観的に伝達するのが学生のためになると考えているようですね。学生の方でそれを自分で構造化し直すと。それはそれで正しいのですが、〈引き出し〉と〈カード〉だけでなく、〈書棚〉の作り方も学生に与えるべきではないかとわたくしは言うんですが、いままでのべたような構造化は不要という考えもあって先生たちの共感を得るのは難しいようです。

これは自分の研究のことになると逆に他のものを排除した形で専門を追求するということになる。たとえば発生学の一部を研究しているとすると、それが発生学全体のなかでどういう位置にあるのかということは偉い先生がやることで自分みたいな者がやることではないという考え方が若い研究者のなかにある。ではそれをどうやって取り払っていくのかというと、国立は別として私立の大学の先生は忙しすぎる。

矢澤　いや、国立でも同じです（笑）。

小原　サロンみたいなところでしゃべるゆとりがないといけないと感じていますね。その意味では少し極端ですが、知的エリートの〈気〉さえ作っていかなければいけないように思います。

知的共同体としての大学

矢澤　大学が知的共同体を作りえているかどうかが問題だと思います。わたくしは六〇年代末に大学の教師になったんですが、今日本の大学では、同じ学部でも人々が話をしなくなっている。そういう場がない。研究会は外に行って、中では茶飲み話くらいはするが、その人が何をやっているかというような話はあまりしない。表面的には書いた論文を読めばわかるのですが、講義さえ何をしゃべっているかお互にわからない。こういうことは昔からあったんでしょうか。

浜林　一橋は単科大学でしたからフォーマルなのもインフォーマルなのも含めて昔はかなりお互いの交流がありました。今は学問が細分化してしまって、学会報告でも「○○村の○○について」などと言われても本人にしかわからないものがある。歴史的なパースペクティブがないということは学生だけでなく教師の側にも言える。そういう状況があるわけで、そのなかで共通の話題の場というものをどこかに設定できないかということが一つの問題だと思います。経済でいいますと、円高という問題がある。これはマル経も近経も超えて、

現実の問題ですから共通の話題となります。しかしなかなか忙しくて場の設定ができないという問題がもう一つある。

制度論でいいますと、僕は今の大学の教養課程がうまく位置づけられていないのではないかと思うんです。学生は退屈して一般教育の二年間を過ごし、専門になったとたんに忙しい目にあわされて、結局何をやっているのかわからないというところがある。今一般教育をやめてしまえという声が大学審議会からでてきていますが、やめるのではなく、どう活性化するか、これが大きな問題です。

矢澤　アメリカの大学では六〇年代にいろいろな実験が行われまして、たとえば専門を一年からやって、その後で教養教育をするというようなのもありました。

小原　僕のところでは一年から一般教育と専門とを並行してやっていますが、その狙いは実学として専門を生かすには、社会や自然・文化・人間などについての理解なしには生かしようがないはずだと考えているわけです。それでも一般教育と専門はつながらない。教員の側で結びつくように配慮してやっていても学生の方が始めからぶつぎり思考になれた頭でくるからつながらない面もあります。卒業するときになって、あるいは卒業して一、二年すると、つなげるようにもっと勉強しておけばよかったと言ってくる。

浜林　高校の教育が予備校化しているから、大学に入ってきたときに一般教養的なものをもってない。そのしわよせが大学に来ているという感じがありますね。昔の旧制高校にあたる部分というものがなくなってしまった。これをどうするかが大きな制度問題だと思います。医学ではすでに六年になっていますが、レベルがあがってくるとそういうことも必要かもしれません。いま工学系などでは学部だけでは足りなくて、修士へかなり進みますが、それくらいなら学部を延長した方が良い。僕は学部の延長論なんです。四年でだめなら延長すべきだ。

小原　現在の教育制度で一八歳の段階で専門を決めろというのは難しいですね。

矢澤　知的共同体の形成が早急にやられませんと、大学外でのシンク・タンクや一般の研究所でダイナミックに研究が展開されてきて、ますます大学の相対的な地位の低下が生ずるわけで、知的共同体を形成していくためには具体的にはどういったことが考えられますか。

浜林　研究面と教育面と両方あると思いますが、研究面でいいますと、僕はずっと北海道にいたのでよくわかるんです

が、東京は一つの大学の中でというより、インター・カレッジにいろんな研究会がある。僕はそれはそれでいいと思っています。しかし個々の大学の中でやれることもあると思います。

小原　自然科学でいいますと、同一の大学内で一つのテーマでということは難しい。もっと別なテーマを考えないと無理だという気がします。たとえば教育の面ですね。今の自然科学教育はこれでいいのかというようなテーマならできると思います。いろいろな大学で噂はききますが、学問的なレベルでのディスカッションが人事で復讐されるなどというのは問題で、外国でも少しは陰にこもるんでしょうが、そういうことはない。しかし、学問の発達にはタブーはなしであらゆる課題について自由に論ずる必要があるのですが、日本ではディスカッションが上手にできないところにも問題がある。

それと自然科学の研究では実際にモノが中心になってしまうんですね。もちろん自然そのものは作られないわけで、現在の自然というのは社会化された自然で、これこそがわたくしは現代の重要な自然科学の対象だと思っていますが、社会化されていく動きに対応していく忙しさというのはすさまじい。ハイテク、バイテクといったものと、他方では自然ハカイ野生生物の絶滅などです。しかもハイテクなどは競争が激しいですから、三時間もあればディスカッションより実験やった方がいいということになる。またもう一つ別に自然の要素的解明、いわば純粋（？）自然の解明という課題もある。共通なのは歴史的な物の見方がない。実験やっている分にはそんなものは要らないわけで、実験結果を統合する立場になってこそ歴史性や議論が重要になってくる。この問題は大きい。だから大学外は別として、もし大学で現状で知的コミュニティを考えるんでしたら、研究ではなく教育の問題、知の再生産の問題でではないかと思います。

浜林　ヨーロッパではアカデミック・コミュニティが生き続けていますね。

矢澤　オックスフォードやケンブリッジなどでは、大学の正式メンバーというのはごくわずかなんですが、何をやっているかわからないような人が大学の周辺にたくさんいて、シンポでもあると集まってきてディスカッションが起こる。このようなものを多様な形で作っていくことが必要なんでしょうね。

大学における知の特質

浜林　日本の学会はディスカッションが五～一〇分くらい

浜林正夫氏

ですが、外国では報告一時間にたいしてディスカッションは長くてとことんやりますね。あれだけとことんできるとおもしろいでしょうね。日本のは何となく儀礼的に質問しておしまいですから、行ってみても損だなという気持ちがおこりがちです。

小原　学会の状況は自然科学も同じです。イギリスなどの状況を見て思うのは、教育の幅が違うということです。たとえばイギリスでは分子生物学をやっている連中でも僕の専門である哺乳類の種の名前を言うとわかるんです。日本では通じない。これは日本社会や文化の問題になってしまうのですが、企業がニーズを作りだし、そのニーズにしたがって研究チームが編成され、部分的な研究では国際的競争にも耐えられるような水準が確保されている。いろいろな批判はあるが、とにかく一定の成果がそこに生まれる。日本の社会が成功していった。

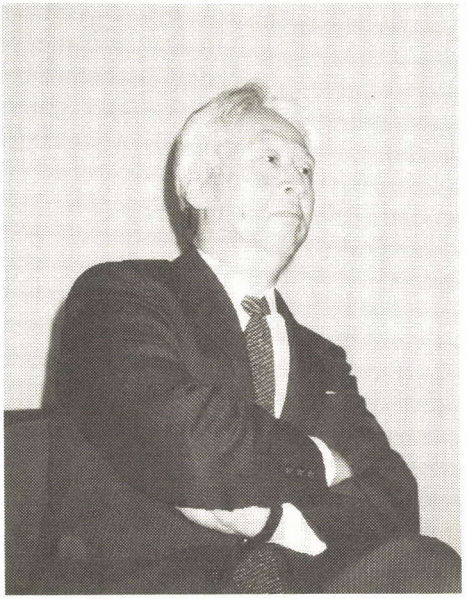
たとえばイギリスでは、一つの島に何種類の種が棲めるかといった問題が学会のテーマになるが、日本ではこんなテーマに人は集まらない。何の役にも立たないですから。そういう意味では自然科学の工学的な面は基礎まで含めて栄えているが、自然を解明する基礎的な自然科学などは衰弱しているのではないかと思いますね。

矢澤　確かに、日本の大学人は今のところはいかに日本が成功するかという視角から問題を考えてはいないわけで、そこに日本の大学の持っている意味がありますね。大学における研究は、民間の研究所と同じ発想をするのではなく、大学独自の、長いパースペクティブに立った研究テーマを持ち続けることの意味をしっかりつかんでおかなくてはいけません。

アメリカでは社会科学でも、一方では主観主義を生み落しながらますます自分と切り離された形での実証主義的、客観

主義的研究が増えてきていますが、日本の大学でも社会科学を勉強している若い人にもその傾向は強まっているのはちょっと心配です。

浜林　それは業績主義が原因なんですね。人のやっていることをやっていては業績にならないから、どこかに盲点はないかと探す。それが自分の生き方とどう関わりあうかということではなく、そこが残っているからということだけで研究をする。だからますます狭くなる。しかし大学院の連中は論文を書かないと就職できませんから、このことはあまり厳しくは言えないんですけれどね（笑）。



小原秀雄氏

矢澤　この間の東大問題をみましても、そこらへんが突かれているのではないかという気がします。東大問題の主人公は、個別専門主義というものを徹底的に批判するのだと言っている。この場合の個別専門主義というのはいろいろな考え方があるんですが、彼の場合には社会科学の総合化が必要だと言う。しかもその場合、インターディシプリンなアプローチが一時もてはやされたけれど、それでは問題は解決しなかった、だからトランスディシプリンなものを作っていかなければならないというようなことを言うわけです。そこで中沢新一さんが核となってそういうものが作れるのではないかという発想になるのですが、ここらへんのことはどう考えたらよいでしょうか。言葉通りには受け取れませんが、一つの問題提起としては意味があると思いますが。

専門・教養・一般教育

浜林　個々のディシプリンを深めずに、インターなりトランスなりができるのかと僕は疑問に思いますね。中沢さんはその必要性を説くのだけれど、彼自身はどこからそこへ迫っ

ていくのか。やはり個々のディシプリンをつっこんで、それを突破したところに何かでてくるのではないですか。

歴史学でいいますと、一橋大学の元学長の上原専禄さんはドイツ中世史をものすごくやって最高のレベルまでいく。で、戦後活動されるときにはもう細かい話ではなくて大きな話をする。個別分野を突破したところの発言とそうでないものとでは違うと僕は思いますね。

矢澤　東大では相関社会科学といっていますが、これが一体なんなのかという問題もありますね。

わたくしは社会科学概論というのをやっているのですが、これは高島善哉先生がやられていたものなんです。高島先生や大塚久雄先生はそれでいいでしょうが、わたくしみたいな者が社会科学概論をやるのはとても大変なんです。六〇年代中頃までは社会科学というものがウェーバーやマルクスを中心にできあがっていたんですが、その後社会変動が激しく、大学問題も起こり、社会科学が分断された。そんな状況の中で社会科学をまとめて教えていくということがとても難しくなった。

そこでわたくしなどは、社会科学を本当に再建しなければ教えられないのではないかと思うんです。わたくしは何も西部さんや中沢さんに賛成するわけではないのですが、そういうことを多くの人が求めているのではないでしょうか。

浜林　それは自然科学でも同じでしょうね。それと先ほどの話にもどりますが、まず専門をやって、その後で概論をやった方がよくわかるような気がしますね。僕は北海道にいたときに上原さんを集中講義で呼んで歴史学概論をやってもらったことがあるんです。一年生対象で、僕は傍聴させてもらったんですが、僕などには非常におもしろい講義だったんですが、学生にはちっともわからないんですね。

矢澤　仕上げとして概論が必要だという発想も大切なんでしょうね。

浜林　それが前期課程とか教養課程とかなっていますとできない。で、これは大学改革、制度論としては一つのポイントだと思います。

矢澤　一般教育で教えている人たちにとっては、ただいまのお話は気になるところがあるんじゃないでしょうか。専門主義が進行してきて一般教育が形骸化されてきたという面もあるんですよね。その面と今お話になった面との二つがあって、これは切り離すのが難しいと思うんです。戦前の反省から、専門と同時に教養が必要だということで、戦後一般教育

というものが設けられたわけですが、この一般教育をどうなさろうというのか、もう少しお聞かせ願えますか。

浜林　僕が言っているのは、一、二年生のときには一般教育というように機械的に分けるのは効果が薄いのではないかということなんで、一般教育そのものは充実すべきだと思っています。もちろん一般教育の内容にも問題がある。概論というのは一番難しくて、概論と称して専門の話をしたりしている。そういうことだと概論をおいている意味がない。一時期、概論作りの運動というのがありまして、薬学などテキストを作ったりしていましたが、あまりうまくいかなくてたち消えになってしまったようです。

矢澤修次郎氏

矢澤　四年全部を一般教育にというのはいかがですか。

浜林　そうしますと専門は大学院でということになる。そうすると専門教育を受ける人がすごく少なくなってしまう。僕は大学にきた者はみんな専門教育までいくべきだと思う。だから僕は学部延長論なんです。

矢澤　専門教育のあり方も問題なんでしょうね。大学における知の再建を考える場合、専門主義を強調するより一般教育を重視する方向の方が可能性があるという意見もあると思います。

小原　昔の言葉で素養というのがありますね。専門についての素養を持たなければならないという意味での専門の勉強の仕方というのがある。

大学でテクニシャンとしてのトレーニングまでやって送りだしても、企業ではもう一回教育をやり直すわけですから、専門といっても大学における専門教育とは何かということも考えないといけないのではないか。マスターにしてもドクターに行かないマスターの専門とは何かということも考えないといけない。これは一般教育についてもまったく同じで、先

ほどの話にもあったが、一般教育になっていない。だから一般教育の生物学を勉強しても生物像が作れない。一般教育と専門との違いは、前者は一つの穴からひろげて見ることだし、専門というのは一つの穴を狭いままずっと掘りさげることだと僕は言うんですけどね。そこで僕は哲学の果たす役割というのがものすごく大切だと思う一面があるんです。ただ哲学概論でこんな哲学もある、あんな哲学もあるというような話をやられたんではほとんど哲学の意味がなくなってしまうんで、専門と一般教育とをつなぐ役割を哲学はもたないといけない。

それでも、自然科学の場合は社会科学の先生たちと大学に対するイメージが違いますね。自然科学の場合、特に技術系や医歯系など専門的知識や技術をきちんと与えないといけない一面があるでしょう。語学もそうでしょうけれど。

浜林　亡くなった遠山啓さんが大学教育には劇場型と教習所型とがあるということを言ってましたが、医者だったらやはり訓練は必要ですよね。僕は社会科学や人文科学でもやはりそういうのがあると思うんです。だから僕が言っているのは専門主義ではなくて、どこか一つ専門的なものを持つということなんですよ。そして自分のつっこんだ穴が全体の中にどこに位置するのかをわかるようにするのが一般教育であって、一般教育と専門教育とはセットである。

小原　今先生がおっしゃったことは、専門の先生もそこまでやってくれないといけないのだと思います。専門教育のなかで、その専門全体のなかでの位置づけはやってもらわないと専門教育といっても本当の意味では兵卒としてしか役にたたないのではないでしょうか。

浜林　教員の方も一般教育と専門とに分かれているのが実はおかしい。両方やるべきでしょうね。その点で教養部組織というのは困るところがある。

小原　概論の話にもどりますが、概論的なものとしてわたくしたちの分野にはナチュラル・ヒストリーというのがあって、これはイギリスなどでは大分野として厳として存在している。ブリティッシュ・ミュージアム・オブ・ナチュラル・ヒストリーでは何十人というスタッフを抱えていて、他の分野からぼやきがでるほど権威ある分野なんですが、日本ではほとんどない。それはなぜかというと、日本の場合、早く近代化して西欧に追いつかなければならないというのが日本の学問に一つの発達傾向を作りだしているので、その点でヨーロッパと違うのだと思う。

そういう日本でですね、今西錦司さんですか、たとえば進化論なら進化論の新しいパラダイムというか実験的基礎はないのだけれど打ち上げたように、知的冒険をやる人が、たとえば千人の科学者のなかに三人くらいはいてもいいのではないかと思うんです。それが知の活性化になる。日本のサイエンスというのはせいぜい下士官ばかりで、将軍や参謀はでてこないんでしょうね。

浜林　社会的ニーズというのが日本の場合企業でしょう。臨教審を読んでいくと〈社会的要請〉と書いてあって、それがいつのまにか〈産業界の要請〉にすり替わっていく。〈社会的要請〉というのは本当はもっとあって、社会的弱者の要求とか、そのいろいろあるものに応えていく、表面に出てこない要求を掘りだし、応えていくのが大学だろうと思いますね。あるいは企業がだしてくるさまざまなニーズが唯一であるかどうかを疑い、オルタナティブをだしていくとか。

矢澤　その通りだと思います。アメリカでは戦後すぐに産・官・軍複合体のようなものができまして、大学がそのシステムの中にすっぽりと入ってしまった。その点日本の大学は、今瀬戸際に置かれているという感じがします。ですからここで社会のなかの大学の本当の意味やどういう機能を果たすべきなのかを多いに議論して、我々も国民も大学生も合意を形成していく必要があると考えます。

小原　企業がやりっこない公害研究などがあるわけですからね。しかし現実と切り離されると今度は一方で〈象牙の塔〉批判がでてくる。

矢澤　いい意味での〈象牙の塔〉は必要なんでしょうね。社会的ニーズというのをどこを基礎にして発展させていくのかということだと思います。

小原　市民・地域・あるいは障害者と大学との関係、いわゆる自主公開講座と言われているものが問われてきますね。僕流の言葉で言うと〈民衆のアカデミズム〉。これはあくまでもアカデミズムなんであって、これをどうやって作り上げるかが問題だと思います。

矢澤　〈民衆のアカデミズム〉を作り上げていく場合、日本の大学史からみて、私学の方が可能性があると言えるのでしょうか？

小原　私立にいますと、金を通して国家なり企業に再編成され、教員の出身大学などの人脈からも私大はその下請け的な研究をやっているようなところがあります。

浜林　その意味で私大の方が国家統制が強いという話を聞

いたことがあります。国立は黙っていても基礎的な経費はくるが、私大は文部省ににらまれると補助がぜんぜんこない。だからかえって厳しいのだと。

アカデミズムとジャーナリズム

矢澤　そこで話を学問と権力、アカデミズムとジャーナリズムという方向へ向けたいのですが、いかがでしょう。

浜林　僕はジャーナリズムにあまり縁がないのですが、大学の先生が求められている分野というのがあります。

僕は所沢に住んでいるのですが、婦人講座に呼ばれて〈おばさん連中〉に日本経済について柄にもなく話をしたんです。するとね、お金をどこに預けたら一番利子がいいでしょうかなどという話もでるんですが、お米の自由化はいいのでしょうかとか、生活体験をもっていますから、学生よりもはるかに反応がいいんです。学生はそんな話をしてもきょとんとして聞いている。

一橋でいうと杉原さんの憲法学、あれは至るところでやられていますね。これはジャーナリズムといっても新聞やテレビとは違うのですが、大学の先生が街へ行って話をする。それが自分の学問にも跳ね返ってくる。それこそ〈象牙の塔〉から出ていって〈民衆〉と話をすべきだと思います。

小原　自然科学でも本当は、現象までを本質的な法則性を展開して説明できないと充分とはいえない。また、非常に細かい部分をやっている人でも、現実と切り結んだ問題意識を持っている人はたいていフィロソフィをもっていて、話をするとすぐわかる。生活者というのは本物を求めていると僕は思っていますから、その本物の要求とぶつかりあうところに、アカデミズムと普及の働きとしてのジャーナリズムの切り結びの一つがあると思う。ところが卑俗化する動きが強くあると、お互いに避けあう。そこに今の日本社会の不健全さの一面がある。

わたしはジャーナリズムとのつきあいはわりとあるんですが、企業や国から研究費などがもらえないときは、わたくしの話が聞きたいと思っている人々からお布施をもらってでもやるべきだと考えているところがありましてね、ものを書くことによって、それをお金を払って読んでもらうというのも一つの方法だと考えています。しかしジャーナリズムの潮流は現代社会の動向と無縁ではありませんで、単純なおもしろさだけを求めていき、自然科学の本質的探求などには見向き

もしなくなるという傾向がある。そして一般の人々をますます俗流化の方向に向かわせる。そこで、今の状況のなかでは、アカデミズムとジャーナリズムとがしだいに離れていくという感じもしています。

矢澤　東大問題の張本人である西部さんなど、ジャーナリズムが卑俗だということはわかっていて、あまり信用していなくて、ただ利用だけしている。そういうやり方はよくない。わたくしの専門の立場から言いますと、ジャーナリズムはジャーナリズムで専門家でないとならない。外国の事例をみますと、ジャーナリズムの世界からジャーナリズムの専門家が育てられ、その専門家だけでは足りないところをアカデミズムから呼んでディスカッションをするとか解説をしてもらうとかいう形になっている。日本はその点で問題がある。

浜林　経済学者でない人から経済恐慌がくるなんていう話がいっぱいでているのに、経済学者には一向お呼びがかからない。そうしますと、そういうものと経済学とはどんな関係にあるのかと疑問をもちます。でも、アダム・スミスなどはそういうところから『国富論』を作っていったんですよね。そうしますと、ジャーナリスティックなところからアカデミズムへの道というのが方法としてあるのかなということを考えているんですが、まだよくわからない。経済学を勉強しなくても大前さんくらいのことは言えて『新国富論』なんて書けるのかと思うとむなしくなりますね（笑）。

小原　一般的な教育評論などは教育学をやっていない者にも書けましょうがね。また、先ほども言いましたが、学会などはとても狭くテーマを設けるようになってきていて、たとえば進化というような大きなテーマで何か言うとしたら、ジャーナリズムを借りて一般向けに書かないかぎり場がないですね。哲学的でもある生物論などを書く場合もそうです。

その点、京都の人たちはジャーナリズムを上手に使っていると思います。ただ、ジャーナリズムには売れなければ仕方がないということで、センセーショナリズムになっていく面が大勢としてありますので、そうなってきますとジャーナリズムでどこまで、問題提起が本当にできるかという問題が確かにあると思います。

浜林　僕のところにはないですが、テーマだけでなく、結論まで決めて注文してくるということもあるようです。確かに「大恐慌が来る」と書くから売れるので、来るかどうかわからないでは売れませんからね。そういう意味では学者は登場しにくい。

小原　アメリカやイギリスでは大恐慌が来るかどうかわからないというのでもジャーナリズムが受け入れる面がある。そこに健全さがあります。

矢澤　それはジャーナリズムの世界がきちんとした専門家で成り立っているからでしょう。ジャーナリストを批判しても仕方ないのですが、日本ではある会社に勤め、そこでたたきあげられるというのがジャーナリストですから、底が浅いところがある。

僕は大学人というのは専門家でないといけないのだけれど、一般民衆について考えていった場合には、アカデミズムの枠内には収まりきれず、健全な意味でのジャーナリズムの世界に当然出ていく必要があるし、お互いに有効な相互作用をしていく必要があると思いますね。

浜林　経済学では世俗をはなれて、象牙の塔に引きこもる傾向が強いですよ。この頃の経済学の報告なんて数式ばかりです。都留重人さんに言わせると、おもちゃの機関銃をいじっているようだという状況のなかで、たとえば宮崎義一さんなんて人は、きちんと理論を踏まえたうえで、ジャーナリズムというわけではないでしょうが、時事的・経済的な問題についても発言されている。イギリスでは官学と実務家とが分かれて育つんですが、ケインズは実務家だったんですね。そういう学問のでき方が日本はちょっと違う。

ニュー・アカデミズムについて

矢澤　少し前にニュー・アカデミズムというのが話題になりましたね。ここにおられる先生方もある意味ではジャーナリズムとアカデミズムを統一した、そういう意味では新しいアカデミズム論を展開されたように思うんですが、中身はともかくとして、あの現象、ああいうものが話題になった社会的背景、学問の現段階のあり方ということについてはどうお考えでしょうか。

浜林　今までのアカデミズムに対する不満なり批判なりが根底にあると思うんですが、ニュー・アカデミズムと称して何か新しいものがでてきたかというと、率直なところかけ声だけに終わってしまったのではないか。今までの経済学はよろしくないと言うところはわかるのだけれども、それではどういうパラダイムが作られるのかというと、それが出てこない。

アダム・スミスとかマルクスという男は新しいパラダイム

を作ったわけで、実際そういうものが出てくれば非常に大きい影響をもつと思うのですが、パラダイムが必要だと言っているだけでは何も出てこない。

小原　僕の領域で言いますと、生物学の現在の潮流というのは、歴史の発展のなかの一つの段階だと思っています。主要な潮流となっているものは、現代の社会の中で現実にものを作っているという有効性があるからです。ただ、一面では有効性が破れてきている。というのは、もし今の主流的自然科学が全体的に自然を捉えているなら、また生物学が生物的自然の法則性を全面的に正しくとらえているならば、それを応用して作りだしてくるものや働きかけは自然に合法則的になっていて、自然破壊なんて簡単に起こるはずがない。

ところが現実に自然破壊が起こっている。そうである以上、はじめは部分的妥当性があるから適合していたが、全体的には不適合であって、適用のしかたや企業や社会のありかただけでなく、今の自然科学なり工学や技術などにも問題があると言わざるをえない。だから僕はニュー・サイエンスにしろ、ニュー・アカデミズムにしろ、そこで言われている理論を簡単に肯定するつもりはないのですが、それがでてくるのは求められる何らかの根拠があることの反映だと思います。

もう一つは近代科学をどう超えるかということですね。このことに対する有効な答えが出てきていない。今の生物学の主流をみても、大ざっぱにいえば歴史性を欠落させた形で、分析的な手法だけで生物現象、生命現象を解明していこうとしている。

そういった課題の存在をあのような現象のなかにわたくしは読みとりたい。アンチ・マルクス主義みたいなメッセージだけが出てきてしまうとがっかりするんですが、現代の自然科学についてその有効性の限界を含めた問い直しは必要でしょう。そういう問題提起をしているところはわかるような気がします。問題提起は自由であるべきで、自由は知の活性化の一つの条件でしょう。

その批判は批判として新しいものを出していくべきだと思います。

知識人として知の退廃にどうたち向かうか

矢澤　技術系の大学につとめている友人から聞いたのですが、権力・政治との関係ということで最近びっくりすることが多いそうです。彼のところは工学部でして、国立ですから

研究費はもちろん国からでるのですが、民間からもきていまして、民間の方が倍なんだそうです。そういう状況を含めて大学問題を考えますと、六〇年代の大学問題との違いというのがでてくると思います。

浜林　現状はもう悪循環みたいになっていて、予算が少ないから産学共同化せざるをえない。人文系だとまだ本を読んでいるだけでどうにかなるけれど、実験系だととてもそうはいかない。国立大学の場合でも国の予算だけでは研究できないというのは常識ですから、ボスの先生方はいかに金を集めるかということが腕の見せどころとなっている。基本は国の予算を増やせということになるのですけれど、わざと貧乏にしておいてヒモをつけやすくするという政策で、もう悪循環なんです。これをどこでたち切るかは非常に難しい。

大学の方は抜けがけ的に、自分のところだけ予算を増やそうという文部省参り、こういう学部を作ってくれとかこういう設備を作ってくれとかいってお互いに競争していて、文部省の方はそれを操って、こうすればお金をだしますよという形でくる。これを根本的に改めていくのは、大学が横に連携をもたないとだめだと思います。自分のところだけを考えるのではなく、大学全体をどうやって底上げするかという発想が必要です。

そういう点で国大協に一時期待したのだけれど、もうダメなようですし、組合はあるのですが、それよりもう少し上のところ、たとえば私学には教授会連合というのがあるのですが、そういうような横の連携で、全体を底上げする運動に本格的に取り組む必要がある。その場合障害になっているのが、大学同士の差別意識なんです。「旧七帝大＋アルファ」というのがありまして、新制大学は相手にしないとか、これが妨げになっている。

矢澤　受験制度でもそうで、東大がまず決めてあとはそれに追随するという形ですね。

小原　だから学生の方は私大の先生というのはダメな先生の集まりだとみている。それに関連していえば、「知」を求めて集まるとはどういうことなのかが、問われている。別のいいかたをすれば、知識人のありかたがわかりにくいからともいえます。そして現実には知識人が、昔とは違ってソフトな形でスポイルされていることってたくさんありますよね。そういうことに対する意識があまりない。

矢澤　六〇年代くらいまでは、財界の仕事をしているような先生でも、ひもつきになることには反対するというような

節操があった。今はそれがズルズルになっていて、若い先生でも当り前なこととして受け取っている。

浜林　大学紛争の頃にだされた問題というのは何一つ解決されていない。ところがその後の、高度成長から一億総中間階級ムードのなかに大学も流れこんでいるところがある。それで問題を問題として感じられなくなっている。

矢澤　西部さんというのはそのことを右の方から叩いたという意味があるのでしょうね。彼の問題意識というのはそんな感じで、最終的には左翼がダメだということを言いたかったのではないかと思うのですが（笑）。我々としては民衆の立場に立って、どう大学の現状の改革をだせるかというところに最終的な問題をもっていかなければならないと思います。

小原　一時、大学そのものがダメなんだという考え方がありましたが、〈知の砦（とりで）としての大学〉ということについて、人間にとっての知というところから築き直す作業が必要なのではないか。教授の連合などというだけでは職業としての連合で、助手はどうするなどという話にもなりかねませんから。知識人として現在の知の退廃と死に対してどう立ち向かうかというなかで大学を論じませんと、大学解体論に対して有効なアンチテーゼがでないような気がします。

矢澤　では最後に、これからの若い大学院生と学生に一言ずつアドバイスをお願いいたします。

新しい友へ

浜林　社会科学を勉強しようとしている諸君には、社会の問題にもっと関心をもってもらいたい。学生に聞いてびっくりするのですが、新聞は読まない、テレビは見ない、世の中何が起こっているのか全然知らないで社会科学を勉強しているんですよ。難しい本を読む前に新聞を読む。テレビはニュースを見る。そして今、日本はどういう問題を抱えているのかというところからまず知ってもらいたい。

その点お母さん方というのは実によくそういうことを知っていて、日経なんて新聞も読んでいる。スタートは時事的問題でいいから、まず社会の経済的問題に関心を持つ。そのなかでどういう矛盾が起こっているかに目をつける。そういう目で見ると、新聞も週刊誌も結構いい材料になるはずで、そこから勉強が始まっていく。大学院生には、自分の生き方と関わった問題を発見していってもらいたい。それをやる、自分なりの必然性、自覚的な課題設定に努力してほしい。とっ

かかりはいろいろあっていいと思うんですが、選んだテーマが自分にとってどういう意味をもつかということをいつでも自覚していてもらいたいと思います。そうでないと勉強が遊びになってしまう。

小原　わたくしは、言うことはあっても、説教しても意味がないと思っていますが、強いていえば、大学生というのは生徒ではないのだから、学びつつ生きる、それによって自分の内に矛盾を作れということを言いたいですね。それには現実と抽象的な本による理論の両方を必ず知ることが必要です。

現実はフィールドという意味です。思考や論理をためす場のことで、場はどこにでもあります。

だが、そのためには、自分が全てに形式論理的な思考になれて、頭が固くなっているとの自覚が必要でしょう。答を覚える、これまでの考えから踏み出さなければなりませんが、この自覚自体がワクから出ない限りできそうもないですが。またまえに無意味な説教になると言ったのは、これをただ記憶するだけにされそうだからです。知的スタミナをつけるためには、調べ続けるとか、矛盾を抱えていくといったことが続かないとムリだからでもあります。知と知識とは同一ではありませんので、こうしたいいかたをしたわけです。

もう一つつけ加えれば、全て人間のため、人間にとってどうなのかという点に返って考えるくせをつけたい。全ての分野の学問が整って発達していくにつれて、一方では人間やその現実から離れていき、人間について知るのは経験によるかのようになっている点もあるからです。

矢澤　必ずしも学生にだけ言いたいというわけではないのですが、今「大学を知的発信源にしよう」「知性の官僚制化を克服しよう」ともっともらしいことを言って、大学の解体を進めようとする流れが支配層から出てきていますね。それの内容をよくみきわめて欲しいと思います。いわばこの「上からの大学解体」の動きを見極め、批判し、真の意味での下からの「知性の官僚制化」の克服の運動をいっしょに担っていって欲しいと思います。そこでは本当の意味での哲学が要求されていると思います。

（おばら　ひでお　女子栄養大学・動物学）
（はまばやし　まさお　一橋大学・歴史学）
（やざわ　しゅうじろう　一橋大学・社会学）

■特集　いま、大学とは　学問とは

現代日本社会と大学・学問論

――保守派の学問論をめぐって――

矢澤修次郎

はじめに

東京大学教養学部の教官人事問題、すなわち文化人類学者の中沢新一氏を助教授として教養学部に迎えるという案件が教授会で否決されてしまったことを巡って、実に様々な意見の表明が行われ、大学論・学問論は大学人の間だけではなく、広く論壇の主要テーマの一つになったことを、われわれはどのように考えたら良いのであろうか。勿論、この問いにたいする回答は、一様ではありえないであろう。問題の提出のされ方にしろ、問題の取り上げられ方にしろ、議論のされ方にしろ、それらは多くの問題を孕み、細部にこだわるならば、百人百様の答えがでてくることは必定である。いやそれよりも、思わず目を伏せてひたすら嵐の過ぎ去るを待つのが正しい判断だと言いたくなる人も多いのではないだろうか。しかし筆者は本論文において、あえてこの問題がわれわれが生きる後期ないしは先進資本主義社会をどのように象徴しているのかを問うことにしようと思う。いわばこの問題が現代社会の諸動向のどの部分を反映して出てきたのか、この問題を巡って提出された大学・学問論はなにを目指すのか、それらは

どのような大学・学問の現状を反映しているのかを問おうとするのである。そしてさらにそうした大学・学問論の問題点を指摘し、現時点における大学・学問のあるべき姿を提示してみようとするのである。

以上のようなこの問題にたいする徴候論的アプローチにたいしても、この問題の美化と過大視とを指摘する声が聞こえてくる。しかし筆者は、こうした声にたいしては耳を傾けはするものの、今は従うことはしない。何故ならば筆者は、今日の大学と学問の状況を一つの重大な転期として考え、それにたいして否定的にではなくて積極的に取り組むべきだという姿勢を示したいからである。

一

今回の東大問題にたいして最も頻繁に発言したのは、当事者の一人である西部邁氏であった。そこでまずはじめに、氏のこの問題にたいする言動の論理を把握し、その上で彼の大学・学問論を摘出して、その問題点を明確にしておくことにしたい。

西部氏は、今回の東大問題をめぐる自己の言動の意義を次のように整理している。第一は、大学は多くの構成員の人格の崩壊を結果するところまで深く腐敗しており、その現状を広く一般の人々に知らしめたことである。彼は、今回の問題に係わった多くの東大教授たちの人格にたいする攻撃を繰り返した。それは彼によれば、権力やカネによるチェックを受けない国立大学の腐敗は止まることを知らず、ついにはその腐敗は人格の崩壊というところまで行き着いていることを証明したかったからだという。そこで彼は、国立大学を私立大学に転換し、カネによるチェックを効かせて、激しい競争をすることによって大学の腐敗を食い止めることを提案している[1]のである。

筆者は西部氏と認識を異にする。大学人の人格の崩壊がどうしようもないところまで進行しているとは考えない。たとえ進んでいるにしても、大学だけが特別に進んでいるのではなくて、人間性の崩壊は先進資本主義社会に共通して現れていると考えられる。いやカネや権力によってチェックされて競争が激しく行われているところ程人格崩壊の度合いが激しいのではないか。東大問題と同時進行していったリクルート問題一つ取って見てもそのことは明らかであろう。リクルート問題は、政財官それに学の一部を巻き込んだ複合体の腐敗、

人格崩壊を浮き彫りにしている。それは、『文藝春秋』に掲載された公文俊平氏のリクルート問題に対する弁明文一つをとってみればよく判る。先進資本主義社会は、資本主義的生産様式に根ざす根本矛盾を糊塗するために、生産の場と生活の場とにおける管理化を押し進めざるをえないが、その管理化は世代交代のメカニズム（教育もその一貫である）をも狂わせる程のところまで進行している。人格崩壊の元凶は資本主義的生産様式・生活様式にあるのであって、そこを見ないどころか、それに大学を従属させるかのような議論をするのは、明らかに逆立ちした議論ではなかろうか。

言うまでもなく筆者は、今日の大学がこのままで良いということを言おうとしているのではない。今大学は多くの改革を要する課題を抱えていることは誰しも認めるところであろう。しかし問題は、改革の方向にある。大学を全部私学にしてアメリカ型の大学を作ってみたところで問題は解決しない。ヨーロッパのように国立大学の形で基礎研究を重視する大学づくりにそれなりに成功している事例は沢山ある。私立か国立かといったことは、比較的どうでも良い問題である。どのような形態を取るにせよ、ヨーロッパとアメリカの大学に比較的救いが見出せるのは、大学の自治、学問の自由が不充分ながらも確立されており、大学がいかなるものからも自立してあることが認められていることである。どのような形態を取るにせよ、大学が大学人の手で学問・教育の論理に従って運営されていることである。戦後の日本の大学と大学人は、大学・学問・教育の自由の確立のためにおおいなる努力を積み重ねてきた。しかしその課題が達成されたというわけではなく、それは今日においても依然として重要課題として残されている。久野収氏が指摘しているように、日本においては「教権というのは一回も政権から自立していない」[2]のであって、そうだとすれば、先の課題は未解決のままである。大学と大学人はそれ以外の場において学問・教育を押し進めている人々と手を結び、その課題の達成を通じて教権の確立のために邁進しなければならない。勿論、こうした課題の達成に邁進することは、大学が現代社会の実践的な問題に係わることを忌避するということとイコールではない。大学はそうした問題に積極的に係わっていかざるをえないが、そうしたかかわりはあくまで大学の自治や教権の確立といった方向を損なうものであってはならないということである。一九七〇年代になると、日本資本主義の知識化・情報化が急速に進行し、それは「決定をより技術的なものにすることによって、科学

者や経済学者を直接政治的過程に巻き込[3]んでいき、そのなかでここで述べてきたような基本的な方向が見失われがちになっていることは、実に憂うべきことであるのではなかろうか。

さて、西部氏が東大問題をめぐる自己の言動の第二の意義として上げていることは、大学人が専門人であるという意味において大衆人であることを論証し、大学も大衆の社会であって、したがって日本は社会のあらゆる部署が大衆によって占拠された高度大衆社会であることを証明したことにあるという。彼は「自分のやっているせせこましい事柄にしか関心をもたず、それ以外のことについては反発を穏さないような狭隘な精神の持ち主[4]」を大衆と定義し、その大衆が大学にも充満しているのが、日本の高度大衆社会であると言っているのである。ここでは西部氏の以上のような判断それ自体を問題にすることは差し控えておくことにしよう。それよりもむしろ、そう捉えてしまえば日本社会は出口の無い危機にあると見られざるをえず、ごく少数の孤高を楽しむ人々がいわば外部からその社会に挑戦していくといった結論しか出てこないのではないかという疑問を提示しておくことにしたい。彼自身も、高度大衆社会に対して勝ち目の無い闘いを挑むドン・キホーテといった自画像を描いて見せている。言葉を変えて言えば、大衆すなわち専門主義にたいして孤高の教養人が挑戦するのだが、予め敗北することが判っていてそうしているのであった。いや勝ったりしてしまうと、却ってこまってしまうのではないか。何故ならば、負けることによってはじめて、彼の正しさが証明されるようなものだからである。そうなってしまっているのは何故だろうか。それは、懐疑をしない人が大衆であり、そうする人が非大衆であるとする極めて静態的な二項対立図式、ゼロ―サム的な図式を用いているからであろう。西部氏が影響を受けたと思われるオルテガやマンハイムの大衆社会論は、大衆が充満してエリートという名の精神の貴族を支えている条件を付き崩してしまい、結果としてエリートが大衆化するという、それなりに実態的な根拠とダイナミズムとを持った関係論的な議論であったが、西部氏の議論にはそれが無くなってしまっている。その結果、今日の教養人は極端に高踏的、精神的、抽象的、英雄的なもののように祭りあげられてしまったのではないか。

つづいて西部氏は、今回の問題を通じて大学には「左翼的意識」が色濃く残っていることが明らかになり、そうした傾向にたいして戦後民主主義の否定、「真正の保守」の立場を

打ち出しえたことが、第三の意義であったという。筆者は、今回の問題にどのように「左翼的意識」が作用したのかを判断できる立場には置かれていないので、この点に関しては判断を留保せざるをえない。しかし、次のことは是非とも言っておきたい。すなわち、戦後民主主義は左翼でもなんでもないし、大学の過去・現在・未来にわたる第一原則は、大学の自治・学問の自由を守り、育て、発展させることであるということである。その原則が結果として権力に対して批判的な構えになって表れたとしても、それをもって「左翼的」というのは当たらないであろう。もう一つ。中沢氏のように西部氏とは一八〇度立場が違う人でも、学問的に優秀ならば採用するのが「真正の保守」の立場だと主張しておられるが、これは当たり前のことであり、保守とか革新とかには関係がない。「真正の保守」とはどのようなものだろうか。この立場は大学の自治・学問の自由をどのように考えているのだろうか。是非聞いてみたい。さらに西部氏は、中沢氏の立場を自分とは一八〇度違うと表現しているが、実際は案外近いのではないか。ポスト・モダニストとプレ・モダニストの違いはあるものの、資本主義の生産様式にたいする認識を括弧に入れておいて[5]、その上部構造だけをあげつらうといったやり方は、ともに両者の得意とするところである。対抗思想としてはそれなりの鋭さを持ってはいるものの、それ以上になるかどうかは今後を待たなければならない。

今回の東大問題における自己の行動の最後の意義として西部氏は、知識はどこか虚しいところがあり、知識人は口説の徒にすぎないから、知行合一をめざすほかないことを明らかにしたことを上げている。知行合一はよい。しかしそれを言うなら、知識はその目的を、言語活動の内部では達成しえないことを知っているので、それ自身つねに外部に、すなわち実践と呼ばれるものに開いている、と言うべきであろう。知識を虚しいと貶んでおいて、知行合一を一段高く持ち上げるのは、真の知識人のすることではない。しかも知行合一が保守派の知識人によって初めて達成されたかのように書くのは、本当にいただけない。言うまでもなく、知行合一の重要性を科学的に解明しつくしたのは、マルクスであった。

今回の東大問題にたいして自分の取った行動の意義について述べた後で、西部氏はやっと学問論を展開している。まず氏は、学問論を展開するための前提として、この二〇世紀が「科学主義、客観主義、実証主義とは異なった地平へ向かわざるをえなかった[6]」時代であると主張している。筆者もこの

点には同意してよいと考える。しかし筆者はすぐに、それらを克服する試みはまだ完全には成功しておらず、新しい形での実証主義に帰着してしまったり、非科学的な立場に陥ってしまったりしているのが実情であるということを付け加えておくことにしたい。この問題は、勿論、解決済みの問題ではない。今後にわたって正しい決着がつけられていくべき問題である。西部氏は、社会科学にとって仮説―演繹および仮説―検証の二段階の手続きは「まったく怪しげな底抜けのものにすぎない」[7]と主張する。何故ならば、社会科学においてはどんな理論でもたやすく実証されてしまうからであるという。しかし、だからと言って、仮説―形成のプロセスだけで問題が片づくわけではないだろう。仮説―形成のプロセスを問う解釈学はなるほど重要である（実際のところ、今日の社会科学はこの問題を不十分ながらも取り扱ってきている）が、方法的懐疑を極限まで押し進めて暗黒の深淵に直面しながらも、その一歩手前で「科学的命題として置く」ことはやはり避けることはできないのではなかろうか。

もう一つ西部氏は、個別専門主義を越えて様々な専門分野の総合化を如何にすすめるかという議論を提起している。紙幅の関係上詳細は省かざるをえないが、氏は「進んでディシプリンを超えていく」超学的アプローチを提唱している。[8]筆者はその試みをそれなりに評価するのにやぶさかではない。おしむらくは、彼の立場は全面的に展開されていないのではないか。もっとも、如何に全面的に展開されていようとそれは一つの試みに過ぎない。当面は、個別専門主義、インターディシプリナリーなアプローチ、ディシプリン帝国主義（一つのディシプリンによって全てを見ていこうとするもの）とともに共存し、もまれなくてはならない。問題は、そうした作業をし、ゆるやかな合意を作っていく、ゆるやかな知的共同体が成立していないところにありはしないだろうか。リジッドに一つのアプローチのもとに教育が行われる大学などはありえないしむしろ気味が悪い。ゆるやかな合意のもとに、様々な立場が共存してこそ大学なのではないか。誤解が誤解を生むような状態を改善しないで、超学的なアプローチを取る一人の人物を連れてくることによって問題を解決していこうとするその姿勢こそが、本末転倒だと言わなければならない。

さらに西部氏は「事実・現象にふれようとすると、社会科学にこだわっているわけにはいかない。社会科学に可能なのは、現実からはなれた死せる言葉である。現実に切り込んで

生きた言葉を吐こうとすると、自分の経験と才覚を総動員しつつ、いわば冒険的な決断として、言葉を組み立てていくしかない」[9]と主張し、アカデミズムとジャーナリズムの相互乗り入れを提唱している。しかし社会科学にアカデミズムのなかでそのような言葉の組立ができなければ、正しい意味でのアカデミズムとジャーナリズムの相互乗り入れなど不可能ではないだろうか。多くの優れたアカデミシャンたちが、アカデミズムの内部において現実に切り込んで生きた言葉を組み立てることに成功している。最も顕在的な努力としては、内田義彦氏の業績を上げるだけで良いだろう[10]。そうした真摯な努力なしに、ジャーナリズムと相互乗り入れしてどうなるのか。ジャーナリズムにしても、その商業主義とセンセーショナリズムの部分を自らの手で克服することなくしては、アカデミズムとの相互乗り入れなど、思いもよらないであろう。

二

続いて、今回の東大問題に関連して大学を辞め、大学・学問論を展開している村上泰亮氏の議論を検討しておくことにしよう。彼は、西部氏が大学・学問論はまかせたと発言しているのを見ても判るように、西部氏よりも一段と思慮深い論客である。

村上氏は東大教授の職を辞任したあとで、「大学という名の神聖喜劇」という論文を発表している[11]。まず第一に村上氏は、戦前の日本の大学教育を「理念を欠いた実用教育」、よくても「安定的な基本理念を欠いていた」「西欧文化の学習と日本文化の体験とが何らかの調和に達するだろうという楽天的折衷主義」の上に成り立った「擬エリート主義」教育と特徴づけ、さらには戦後の大衆型高等教育を「民主化の理想と立身出世主義との幸せな結合」[12]に依拠するものであると主張する。彼によれば日本の高等教育は、終始一貫して「実用主義・功利主義のすすめ」によって彩られてきた。「西欧文化を普遍的で高度であるとしたうえで、日本文化の貢献も発見できるとする同化志向と、それに反発する異化志向とが、交代してあらわれる」ために、どうしても安定的な基本理念を固定することが出来ず、せいぜい先のような楽天的折衷主義すなわち「教養主義」を生み落としたにすぎなかった。しかしそれとても、個とか自由とか神といった概念を正面から取り扱うことがなかったし、極端な形の異化志向である国粋主義が台頭すると脆くも崩れ去ってしまったのだから、西欧

型のリベラルアーツというにはあくまでも疑似的なものと言った方が良いのではないか。

第二に村上氏は、大衆型大学制度においては必然的に大学間にヒエラーキーが成立し、日本ではそれに国営型の対処をしたために、大学内外において競争が制約を受け、結局それが大学のレジャーランド化に繋がったことを明らかにしている。高等教育は、学生の「知的創造力」を最大にしようと努力する。そのことは学生の間に著しい教育効果の格差を生み出し、結局のところ「平等主義を基調とする大衆化との間に重大な摩擦を引き起こす」[13]ことになる。この矛盾の解決のためには理論的に様々な対処の仕方があろう。しかし最も現実的なのは、大学間にヒエラーキーを設けることである。勿論具体的な対処の仕方は国によっても違う。アメリカは大学の運営を大学の自主性に委ね、大学間の運営競争という形で優劣差と多様性を大学間に作り出していく方式を取っている。これに対して戦後日本は、「見かけは私立優勢型ではあるが、実際には国営型であって、運営様式の点では個々の大学が特徴を打ち出すことが難しい。」そうしておいて文部省は、有力国立大学―地方国立大学・私立大学というヒエラーキーを作り出した。その結果はどうだったか。大学は競争して上昇していこうとする意欲を奪われ、大学内部では終身雇用・年功序列型の慣行が貫徹されたので、大学間・大学内部での競争が排除されてしまった。この競争の欠如の行き着くところは、教育・研究の停滞と画一化、産業面とは反対に欧米の教育・研究との格差の拡大、大学のシンクタンクに対する立ち遅れ、偏差値の支配する受験体制等などであった。

第三に村上氏は、この論文で「一般教育」とはいかなるものであるのか自説を展開している。大学の大衆化のなかにあっては、大学生であることは即座にエリートであることを意味するのではない。彼らは「相対的に高度な技能を学び、その学んだという事実によってある種の能力を証明」するだけである。したがって、氏によれば大衆化時代の大学には、「はっきり定義される形の知識・技能」「専門化された分野」の学習への要求が強まる。換言すれば「高等教育が大衆化するとき、主導的教育理念はエリート教養主義に代わって専門主義となる。」[14]こうして専門主義が主流になったとき、それはリベラルアーツ教育を風化せしめ、その結果として現れたのが「一般教育」であるという。それは様々の知識を統合する理念がなく、「理念を断念した『相対主義』が知的一品料理の共存を容認している」[15]ものにすぎない。アメリカの公立

大学はその典型である。日本の現状はそれ以上に悪い。先に指摘されたような状況（国営型、東大中心の資金配分、教育・研究における競争の欠如）が加わって、専門主義の不徹底といった事態が生み出され、大学院制度の充実が阻まれている。

第四に村上氏は、なぜ今大学、東大の駒場を問題にしなければならないかを明らかにしている。彼によれば、現在は高度大衆社会が飽和点に達してしまった。物的には経済システムが行き詰まり、人々の心の面では高度大衆社会というクライマックスまで辿り着いた産業化そのものにたいして懐疑が深まっている。また現在は近代西欧を支えてきた理念が基本的に動揺している時代でもある。多くの思想は反デカルト的であり、「思想としてはある意味では既に決着はついており、純粋に近代西欧的な思想伝統からはもはや救援はえられない」[16]ところまで来ている。氏の危機意識は極めて強く、かつまた複雑である。何故ならば、近代西欧的理念に対して衝撃を与えたものの一つは日本の挑戦、とりわけその組織原理であったはずなのに、その日本がアメリカよりもさらに徹底した高度大衆社会を形成し今飽和点に達してしまっているからである。したがって、日本文化の中心であるべき大学は、その理念を高く掲げ、人々を大衆化の彼方に導くべきだというのであろう。

第五に村上氏は、彼自身の教養概念を提示している。彼によれば教養とは「主観を絶対化せず、客観と同じ平面につねに回帰させる立場」「西欧の哲学の伝統では『解釈学 hermeneutics』と呼ばれているもの」[17]のことである。教養をこのように考えれば、西洋のみならず、東洋や日本の知的伝統もそのなかに位置づけられるだろうし、是非ともそうあらねばならない。そしてこのような教養とは何かを作りだそうとする人々は、「教養主義者」「反専門主義者」として、専門主義や語学教育とカリキュラム的に共存することなく、駒場大学、駒場学校として自立しなくてはならないというのである。

いささか長々と村上氏の議論を紹介したのは、今日の大学論・学問論の文脈を氏の議論が実に良く反映していると判断したからである。彼の大学論・学問論を読むことによって、今日の学問論・大学論のプロブレマティークを理解しておくことは重要なことである。そして西部氏の議論に比較して、それなりに学ぶべきところ、教えられるところも少なくない。

それにもかかわらず村上氏の議論は、根本的に転倒した議論になっている。彼は理念の欠如に大学の病巣の根幹を見ているが、たとえそれが一半の事実だとしても、理念の欠如を

もたらしたより根本的な原因を追究していない。明治以来、国家と資本主義は終始一貫して大学を自己に従属させてきたのであり、多くの大学人は自分たちの意志に基づいて理念を掲げることが出来なかったかそれを阻止されてしまったのである。彼の議論は、国家や資本主義的生産様式の問題を括弧に入れて、理念だけを問題にしている。この点では、先の西部氏の議論と同じ誤りをおかしていると言えよう。

彼は大衆化の彼方へという議論を展開している。しかし理念を論ずるだけではそれは達成されない。何故ならば大衆化というのは、資本主義的生産様式に内在する矛盾を、資本主義的生産様式はそのままにして、生産形態や社会形態における変化によって糊塗していこうとする結果として起こってくるものであって、資本主義的生産様式そのものを問題にしないかぎり克服しようがないからである。彼は、高度大衆社会の飽和というのは、物的には経済システムの行詰まりであり、かつまたクライマックスにまで達した産業化そのものにたいする懐疑であると指摘しながら、それ事態にかんしてはなんら議論を展開することなく、理念についてだけ問題を提起している。これはきわめて不可解なことである。

先にも書いたように、村上氏の危機意識は相当に強い。いや近年ますます強くなってきていると言うのが正確であろう。別稿において書いたように、[18] これまでの彼は、大衆社会を頂点を過ぎた下降期に現れる社会としながらも、その社会のなかで新しい文明が準備される可能性を否定していなかった。そして筆者は、どのような新しい文明が、どのような人々によって、どのようにして準備されるのかに関する彼の分析の出現を心待ちにしていた一人であった。それにもかかわらず彼はそうした分析を明示的には展開してみせてくれていない。というよりもそうした可能性さえも潰してしまいそうな大衆社会の危機が深まっていると、今は主張したいのかもしれない。実際のところは、彼のこれまでの階級・階層分析の誤りがわざわいして、先の分析ができなくなってしまい、理念の重要性を一面的に強調し、制度論を欠落させた議論におちいってしまったというのが真相だろう。しかし、この危機意識を理解しておかないと彼の大学論・学問論は判らなくなってしまうのではないだろうか。ひょっとすると、この彼の大学論・学問論は、強烈な危機意識の上に立った新しい文明形成過程論なのかもしれない。

それにしても、彼の大学論・学問論の真の狙いとその構造は意外と摑み難い。筆者はその真の狙いを大衆化を如何に克

服するかを明らかにするとともに、新しい文明なるものの担い手を養成する場として大学を作っていくことであったと理解する。では彼の大学論の構造とはどのようになっているのか。どうやら彼の大学論は二重の構造を持っているらしい。なによりもまず彼の大学教育とは、西欧のエリート主義教育と同じように「上流の防護壁・供給源としての中流」をターゲットとして、彼らにたいして教養教育を施すことである。その教養教育は、従来のような「ヨーロッパ的原理」だけではなくて「アジア的原理」をも加味しなければならないという。いや、ヨーロッパ思想のアンダーグラウンドに流れていた、そしてアジアにおいては主流としてある（「解釈学的文明」[19]）「解釈学的知」が涵養され、教えられなければならないのであった。多分これは、真のエリート、新しい文明の中核的担い手を作るものであろう。しかしこれだけでは足りない。そこで彼はもう一つの構造を考えているように見える。それは、大衆は徹底的に競争させ、勝ち残った者は専門主義を徹底させた大学院大学に入れよう、残りの大衆は、理念を断念した「相対主義」「知的一品料理の共存」としての四年制の一般教育をあてることにしよう、というものではなかったか。はっきりは言っていないが、そう考えなければ辻褄があわないではないか。彼の大衆教育像は、アメリカ型であることは明白である。

村上氏の学問論については、次の二点を指摘しておくことにしたい。一つは氏が西欧思想が著しく反デカルト的になってきており、「思想としてはある意味で既に決着はついており、純粋に近代西欧的な思想伝統からはもはや救援はえられない」と指摘している点である。この発言は、一面では正しいだろう。なによりもデカルト自身がぎりぎりのところまで反デカルト的であったのだ。彼は深い懐疑にうらうちされて主客二元論に立たざるを得なかったのである。だから、その後の思想史が反デカルト的になることは不思議でもなんでもない。問題はむしろ、主客未分離のところまで立ち帰って、デカルトを近代をどのように正しく克服しうるかにある。現代の様々な思想は、この課題の達成に成功していない。いろいろな思想が宣伝されるが、それらはこの課題の前で汗牛充棟の状態にある。村上氏のいう「解釈学」もその一つにすぎない。氏は「解釈学」というのをかなり広義に用いているようだが、それにしてもそれを教養と等置するのはあまりにも狭量ではあるまいか。デカルト主義を乗り越えると言いながら新種の実証主義に陥っている思想が多いし、他方ではミス

ティシズムに逃げ込んでしまっている思想も夥しい。それをどうするのか。また、デカルトや近代を正しく乗り越える最大の可能性を持ったマルクスの思想や弁証法を排除しているように思えるのだが、それはどうしてなのだろうか。

もう一つは、村上氏が新しい文明形成の鍵を握るのは「日本的原理」を含む「アジア的原理」であるとしている点に関してである。鍵を握っているその日本が、アメリカ以上の高度大衆社会になってしまったというところに、彼の危機意識の根源がある。村上氏の「日本的原理」「アジア的原理」への着眼は、言うまでもなく『文明としてのイエ社会』以来のものである。今は紙幅が限られているので、『文明としてのイエ社会』は実のところは『野蛮としてのイエ社会』[20]であることは問題にしないことにしよう。ここで問題にしておきたいことは、村上氏は文明としてのイエ社会は産業化を押し進めるのには有効であったと主張してきたが、産業化が極点に達して高度大衆社会が飽和点に達している現在では、文明としてのイエ社会の原理の再検討を迫られているのではないかということである。そして、これまで普遍性を独占してきたヨーロッパの近代的な社会構成原理に取って代わりうる高次の社会構成原理を提出しようとしているのではないかということである。できるかどうかは別にして、そのような課題の達成に貢献しうるような学問でありたいというのが、彼の大学論・学問論・知識人論であろう。

最後に村上氏の大学論・学問論の残された問題点に簡単にふれておくことにしたい。筆者は、大学の国営型運営をやめようと言う村上氏の主張には大いに賛成である。実際のところ、日本の大学の発展を阻害しているのは大学にたいする文部省統制に他ならない。しかし、氏の主張が国立大学の分割・民営化を意味するものであるならば、それには反対である。要するに、国家や資本から正しい意味で独立していなければ、大学は発展することがない。競争原理を大学に導入するということもどうだろうか。筆者も競争一般を拒否するものではない。しかし、問題はどのような質を持った競争かということである。一番乗りを競うような競争は却って学問の荒廃を招く結果になる。村上氏は、日本の社会科学が外国はおろか日本のシンクタンクにも水を開けられようとしていると書いているが、大学とシンクタンクは目指す所が違うのであって、同一平面上で競争する性質のものではない。目指されるべきことは、柔軟な大学知的共同体の形成にあるのではないか。そこで多様な競争が行われることは、勿論、妨げるものでは

ない。

三

ここまでで、筆者の意図した課題の半分を果たしえたように思う。しかし、他者の論文を批判的に検討して、今日における大学論・学問論のプロブレマティークを明らかにしただけでは問題は終わらない。そこで以下残された紙幅を使って、かつまた保守派の論客の大胆な問題提起に誘われる形で、筆者自身のポジティブな大学論（学問論にふれる余裕はない）の一端を提示することにしよう。

本稿でも、折りにふれて言及したように、筆者はゆるやかな大学知的共同体の建設こそ、今日において最も重要な課題であると考えている。それは大きなものでも小さなものでも構わないし、学部ごとや大学ごとに作られても、学部や大学を越えてつくられても構わない。どのような知的共同体を作るかに関しては、歴史上のいろいろな成功例を学ぶ必要が大いにあるだろう。プラトンの学園アカデメイア、[21]ボローニアやローマ大学、オックスフォード、ケンブリッジ、ハーバード大学やシカゴ大学など、多くの大学が詳細に研究し尽くされなければならない。しかし、筆者は今のところ暫定的ながらその知的共同体をアメリカの社会学者A・グールドナーに従って以下のようなものにしていくのが良いと考えている。[22]

知的共同体を作り上げていくためには、暫定的であれ一連の価値を多くの研究者が共有することが不可欠のことになる。その一連の価値を一言で言い表すとすれば、社会理論の目的は人間の解放にあるということである。人間の解放という場合、人間の感覚、感受性さらにはその人間の身体の解放といったことも含まれるであろう。したがって、社会理論は実践理性を取る以外に道はないのである。

まず社会理論は、人間の解放のために諸社会をその全体性において把握しなければならない。その際に重要なことは、社会と人間を歴史的に、歴史的存在として理解することにある。したがって認識論―存在論のレベルにおいて特に強調されなければならないことは、歴史性ということである。そして人間が言語を使って世界を構成し、世界を理解していることを考慮に入れると、認識論―存在論のレベルにおいては、言語性ということも同等に重視しなければならないものである。しかし極めて残念なことであるが、人間はその言語活動の範囲内においては世界認識を完成することはできない。そ

こで言語活動の外側に出ていって世界認識を可能にするものとしての弁証法を持っていなければならない。

したがってより限定的に、認識論—方法論のレベルにおいては、弁証法、さらには哲学の重要性が強調されなければならない。その哲学とは、科学の論理を提供する科学哲学ではなくて、反省性、自己意識を提供する哲学である。またこのレベルにおいては、経験性ということも特に重視する必要があろう。これは、伝統的に「科学的」と表現されてきたことと同一ではない。それは経験的なものを一つの価値として理解することであり、自己と自然に関する適切な概念を持つこと、さらには自己と自然との関係に関する適切な概念を持つことを意味するのである。そしてこのレベルにおいては、世界を変革しようとする努力と、そこから派生してくる理論と実践問題とが重視されることは言うまでもない。

最後に、純粋に存在論のレベル（社会的実在の性質）においては、システムとシステム性との構造、その両者の弁証法を重視しなければならない。システムとシステム性において、マルクス主義とブルジュア社会科学の存在論が収斂する。

以上のような一連の価値を共有することによって作られる知的共同体は、「武装されたロゴス」の共同体と呼ばれるのがふさわしい。それは、社会解放、実践理性、具体的全体性の分析、歴史性、言語性、弁証法、哲学性、経験性、それらの幾つかを内包しながら発展してきた解釈学、世界へのアンガージュ、体系的な分析などを共有することから始まる。その共同体は、村上氏などが意図している大学人の共同体とは根本的に異なるものであろう。後者は、一部のエリートをターゲットにするとともに、能力主義、競争原理の上に大学を置こうとしているが、われわれの共同体はそうではなく、広く国民一人一人の解放を意図しているからである。

われわれは教養を狭く「解釈学」に限定するようなことはしない。先に見たように、われわれは教養をより広いものと考える。またわれわれは、専門と教養を故意に対立させるようなことはしない。ましてや、一般教養を理念を放棄した相対主義や知的一品料理に放置するようなことはしない。われわれは、D・ベルに従って、教養教育、一般教育の目的、内容を(1)知的偏狭主義を克服すること、(2)方法の中心性（概念的革新の役割）を認識すること、(3)歴史感覚を獲得すること、(4)諸観念と社会構造の関係を示すこと、(5)あらゆる探究には価値が付加されているその仕方を理解すること、(6)ヒューマニティの文明化的役割を示すこと、などにおく。[23] ベルによれ

ば、知的偏狭主義は現在二つの形態を取って現れている。一つは、人々の精神に神話やイデオロギーや偏向が根づく根拠を与えるという形をとって、そしてもう一つは専門主義という形を取って現れている。前者は比較的克服することは容易であるが、後者は先に検討した保守派の大学論・学問論が専門と教養をかたくなに対立させて捉えていたように、克服することが極めて困難な問題である。しかし、われわれはベルとともに、一般教育と専門主義を二律背反とは考えない。むしろ両者を串刺しにするものとして、「概念的探究」「方法」があることを強調したい。それは、狭い意味での技術を取り扱うのではなくて、知識それ自体の諸前提を明らかにするとともに、どのようにして特定のディシプリンがその概念を確立するのか、どのようにして新しい問題に見合うように概念を改定するか、いかにしていくつかの選択肢のなかから一つの探究のパターンを選択するのかといったことを取り扱うものである。

方法の中心性などと言うと、解釈学の立場に依拠する人からは実証主義だと批判を浴びることになるかも知れない。そこで、ある学問の方法に注意を限定しがちなベルとは離れ、[24] 方法を次のように考えておく。ここで言う方法とは、内田義彦氏が述べているように、「ある学問なり修業法に含まれている前提と、相互に関連のあるさまざまなハウ・トウの総体」「あるディシプリンにおいて、……さまざまなハウ・トウの総体をバラバラにせずに、まさに関連のある総体たらしめている大前提なりプリンシプルの吟味」「いろんな学問分野なり修業法には、……メソドロジーがあるわけですね、そのメソドロジーの前提やメソッドを、そのものとして論理的に問う」[25] などといったことを全て含んだものである。要するに、ここでいう方法とは、常識や通念を破ってものを見る操作を知ること＝一般に方法的に考えること＝学問的方法＝常識を学問的に批判する方法と、諸学問の方法論の両者を含むものなのである。教養とはその両者を結びつけていくことにほかならない。したがって、一般教育、教養教育こそ、正しい社会科学の発達のための鍵を握るものであり、決しておろそかにすることの出来ないものである。

（1）西部邁『剝がされた仮面』文藝春秋社、一九八八年。彼の大学論・学問論は、この著書にもっとも良く表れている。とくに最後尾におかれている「私の学問論」を参照のこと。

（2）久野収・浅田彰「対談・ナショナリズム・天皇制・リクルート疑惑の系譜」『エコノミスト』一九八九年一月三日・一〇

日号、一一頁。

(3) D.Bell, *The Coming of Post-Industrial Society*, 1973, (内田忠夫他訳『脱工業社会の到来』〔上〕、ダイヤモンド社、一九七五年) 邦訳、六二頁。

(4) 西部・前掲書、一五六頁。

(5) ポスト・モダニズムの問題性については、次の論文を参照のこと。佐々木力「批判的思考の衰退—学問論の二〇年」『思想』一九八八年一一月号、一四—三七頁。

(6) 西部・前掲書、一六八頁。

(7) 同書、一七〇頁。

(8) 同書、一七八—一八二頁。

(9) 同書、一八二頁。

(10) 内田義彦『資本論の世界』岩波新書、一九六六年、同『社会認識の歩み』岩波新書、一九七一年、同『学問への散策』岩波書店、一九七四年、同『作品としての社会科学』岩波書店、一九八一年、同『読書と社会科学』岩波書店、一九八五年。

(11) 村上泰亮「大学という名の神聖喜劇」『中央公論』一九八八年七月号、六六—八五頁。

(12) 同論文、七一頁。

(13) 同論文、七三頁。

(14) 同論文、七六頁。

(15) 同論文、七六頁。

(16) 同論文、七九頁。

(17) 同論文、八五頁。

(18) 拙稿「大衆社会を超えて—知識人と大衆の弁証法」『思想と現代』第二号、一八—三二頁。

(19) 村上泰亮「『超越型』文明と『解釈型』文明」『中央公論』一九八八年一二月号、三三四—三五五頁。

(20) 関曠野『野蛮としてのイエ社会』御茶の水書房、一九八七年。

(21) 広川洋一『プラトンの学園アカデメイア』岩波書店、一九八〇年。

(22) Alvin W. Gouldner, *Logos Armed : The Metapolitics of Mind*, (mimeo).

(23) Daniel Bell, *The Reforming of General Education*, Anchor Edition, 1968, pp.154-161.

(24) ベルの場合には、ある一つの専門教育を先に行い、そのうえで方法を中心とした教養教育を行うという発想があるが、われわれはそうした立場はとらない。専門以前に、日常・常識批判としての学問的方法を学び、それと専門を繋げていくことが肝心である。

(25) 内田義彦『社会認識の歩み』岩波新書、一九七一年、二四頁。

(やざわ　しゅうじろう　一橋大学・社会学)

■いま、大学とは 学問とは

アカデミズムとジャーナリズム

——その本質と可能性——

碓井敏正

はじめに

近年、アカデミズムとジャーナリズムの交流が強まってきているように思われる。ジャーナリズムの論壇には、多くの大学教授が登場しているし、一部のタレント的教授は、テレビにまで進出している。又昨年の東大の中沢人事問題は、大学の一採用人事がジャーナリズムの話題となったという点で、稀有の現象であった。しかしこれらの事実をもって、アカデミズムとジャーナリズムの関係が進展したと見ることはできない。なぜなら、これらは商業ジャーナリズムによる、アカデミズム的要素の単なる部分的利用にすぎないからである。

アカデミズムとジャーナリズムの本来の交流を考える際には、それぞれの本質的性格と役割を明らかにすることが必要であろうし、さらに現代において、それぞれが抱える矛盾を解明することが必要であろう。そのような作業を前提とした時にのみ、アカデミズムとジャーナリズムの関係を正当に論じることができるのである。本稿はそのためのささやかな試論である。

一　アカデミズムとジャーナリズムの本質

さてそれでは、アカデミズムとジャーナリズムの本質的性格をどのように理解したらよいのであろうか。まずジャーナリズムは、その言葉の元の意味にあるように、日常的な出来事の中の話題性のある情報を問題とする。したがってそれは時事性を本質としている。もち論何が話題となるかは、その社会の文化水準によって規定されていることは言うまでもない。ジャーナリズムにおいて問題となる知識が、時事的な話題であるということは、ジャーナリズムが同時に、総合的、常識的な性格を有するものであるということを意味している。なぜなら現実的出来事は、常に総合的であるし、又まずは人々の常識によって捉えられるものだからである。それに言うまでもなく、時事的話題は実践的性格を帯びている。まとめるならば、ジャーナリズムは「時事性」、「総合性」、「常識的性格」、「実践性」を有すると言うことができるであろう。

一方、これに対してアカデミズムは、ジャーナリズムと対照的な性格を有している。まず第一に、それは日常的な出来事を直接の研究対象とはしない。時代の現実に直接には影響されない、固有の研究領域というものを持っているのである。その意味で、アカデミズムは、非日常性を本質としていると言うことができる。又ジャーナリズムの話題が、総合的、常識的であるのに対して、アカデミズムの研究は、分析的、専門的であり、研究方法論の確立の度合いによって程度の差はあるが、一定の概念と原理に基づいた理論的体系性を特徴としている。ジャーナリズムの話題が、実践的ではあるが常識によって捉えられるのと対照的なのである。まとめるならば、アカデミズムは「非日常性」、「専門性」、「理論性」を本質とする、と言うことができるであろう。

ところで人々は、日々の生活において常識を基準として事に当たるのが普通であるが、一旦困難に遭遇すると、それを「問題」として捉え、分析的、理論的に解決することに努めるものである。このように人間の生活は、常識の契機と理論的契機の両者を含んでいる。ジャーナリズムとアカデミズムは、事物に対するこのような人間の二つの態度に対応する、知識の形態であると考えることができる。

とするならば、アカデミズムとジャーナリズムは、それぞれ固有の本質と活動領域をもってはいるが、決して単純に対立すべきものではない、ということが分かるであろう。しか

し現実には、両者が人間の生活を向上させ、社会進歩に役立つような形で、有機的に関係しているとは言い難いのが実情であろう。それどころか、それぞれにおいてさえ、本来の役割を果たしているとはとても言えないのである。

その原因はどこにあるのであろうか。それは第一に、すでに見た両者の本質的性格の内に隠されている。これは言い換えれば、知識の二つの形態が、分業として存在しているという事実そのものに係わっている。つまりジャーナリズムは、時事性を本質とするということであったが、時事性は単なる興味本位の話題性に容易に堕する危険性をもっているし、一方アカデミズムは、その専門性の故に、保守的閉鎖性に容易に結びつく危険性をもっているのである。前者における俗流性、後者における貴族性は、両者がもっとも警戒すべき陥穽であるだろう。

残念ながら、ジャーナリズムとアカデミズムの現実態が、この二つの否定的特徴によって印象づけられているのは、否めない事実である。かつて戸坂は、ジャーナリズムの欠陥はアカデミズムの長所に、アカデミズムの欠陥はジャーナリズムの長所に対応するとし、両者のあるべき関係について、次のように述べていた。

「アカデミーは容易に皮相化しようとするジャーナリズムを好意的に牽制して之を多少とも基本的な労作に向かわしめ、ジャーナリズムは又容易に停滞に陥ろうとするアカデミーを親和的に刺激して之を時代への関心に引き込む。アカデミーは基礎的・原理的なものを用意し、ジャーナリズムは当面的・実際的なるものを与える……」(1)

ところで、ジャーナリズムにおける時事性が興味本位の話題性に堕し、アカデミズムの専門性が保守的閉鎖性と結びつくのは、一定の客観的条件によって規定された場合だけである。それはどのようなものか、又そのような条件下において、それらはどのような変容を蒙ることになるのであろうか、次にこの点を問題としよう。

二　ジャーナリズムの現在

(1)情報の断片化と批評性の後退

現代のジャーナリズムが、マスコミ資本によって担われていることは、言うまでもない事実である。ところでマスコミ資本と言えども、資本の一形態に他ならない以上、最大限利

潤の追求という資本一般の課題を担わされている。特に巨大マスコミ資本は、そのシェア（販売部数・視聴率）の拡大のために熾烈な闘いを展開しているのである。

このような現実が、ジャーナリズムのもつ商業性を、さらに商業主義的性格へと変質させることになる。そしてこの商業主義において、もっとも価値があるとされるのが、興味本位の話題なのである。時事性が興味本位の話題性へ変質すると、時事性が本来もっていた総合的性格が失われ、刺激性のみが肥大化してゆくことになる。刺激的な情報は、映像によってもっともよく伝達されるため、テレビジャーナリズムが、視聴率を上げるために好んで採用するところとなる。刺激性の強化は、情報の断片化と相即的である。本来刺激性というものは、断片的、一時的のものであり、知的興味のような継続性をもたないことを特徴としている。このような傾向は、具体的には書籍よりも雑誌の売上げ高の方が多いという、近年のいわゆる「雑高書低」の現象として現われたし、その極め付けは、オムニバス方式をとる写真週刊誌の一大ブームであった。

さらに重要なことは、情報の断片化が、ジャーナリズムにおける批判的機能＝批評性の後退と結びついている、という点である。ジャーナリズムは、時事的話題を対自化し、その意味を解説するという、批評性を固有の本質としている。これはジャーナリズムの理論的側面とも言うべきものである。明治期に成立した日本の近代的新聞は、自由民権運動と結びついた、いわゆる「政論新聞」（大新聞）として出発した経緯もあり、明治初年においてはしばしば激しく時の政府と衝突した。しかし現在の『朝日』『毎日』『読売』など、当時「小新聞」と呼ばれた新聞は、権力に対する批判的機能を弱め、市民社会の日常的話題を読者に提供することによって、その勢力を拡張することになるのである。[2] しかしそれでも新聞は、戦後においてたとえばサンフランシスコ講和条約の締結をめぐって、国論が二分した時、立場の違いはあれ、国の進路について社会の木鐸たらんとする気概を残していたものである。[3]

ところが戦後の市民社会の「成熟」の中で、新聞は商業主義的性格をますます強め、批判的機能をさらに後退させ、断片的情報の提供媒体へと変貌してゆく。もち論現在の新聞にも解説的記事は多くあり、むしろ量の面では増えているかも知れない。しかしその内容は営業と権力への配慮から、微温的トーンで貫かれており、真の批評性とは程遠いのが実情である。

ジャーナリズムにおける批評性の後退に、一層の拍車をかけたものとして、テレビの普及をあげなければならない。テ

レビ映像の迫真性は、理性にではなく、イメージに訴えることによって、人間の判断能力を低下させる傾向をもつし、加えてテレビの娯楽重視路線は、かつて「一億総白痴化」と言われた現象を生み出した。

(2)ジャーナリズムにおける商業性と商業主義

さて、ジャーナリズムにおける批評性の後退は、商業主義の強化と並行して起こるのであるが、このことは商業性がジャーナリズムにとって、本質的に否定的なものである、ということを意味しない。我々はここで、商業性と商業主義を明確に区別しなければならない。マスコミ企業間の競争が、ジャーナリズムの活性化をもたらすことをみても分かるように、商業ジャーナリズムは、その商業性の故に積極的な役割を果たすこともできるのである。

たとえば、ジャーナリズムは権力の秘密やスキャンダルを暴くことに熱心である、という傾向をもっている。それは民衆が、権力に対する疎隔感を常にもっているからであり、そのような情報が、商業的価値を有するからである。ジャーナリズムは、基本的には体制の一機関であるが、そのことはジャーナリズムが、権力の政策・イデオロギーの単なる宣伝媒体であるということを意味しない。むしろジャーナリズムが商業性の原理に立脚する限り、権力としばしば矛盾、衝突することがあるのである。「表現の自由」や「知る権利」といった、近代の権利が、その意味で商業的なジャーナリズムの活動によって、実体を与えられていることも見落とすことができない側面である。

しかし商業性が商業主義に転化する時、そこに事態の本質的な変化が現われることになる。それは次のようなことである。商業性は、真実を報道するというジャーナリズムの本質と矛盾しないどころか、それを促進しさえするが、商業主義にとっては、真実の報道はもはや第一義的ではなくなる。なぜなら、ジャーナリズムにおける商業主義の本質は、いかに真実を伝えるかではなく、いかに売れる情報を伝えるかにあるからである。そのためには、かつてテレビ朝日の「やらせ事件」にみられたように、虚偽の現実を作り上げることすら厭わないのである。

(3)ジャーナリズムの権力迎合的性格とその根拠

ジャーナリズムの権力に対抗する側面を正当に評価しつつも、その権力迎合的性格と世論操作的側面も正確に捉えてお

かねばならないであろう。最近のジャーナリズムの動向をみる時、この点の理解は特に重要となってきている。この問題を考える際に、我々は二つの側面を区別して捉える必要がある。一つは、ジャーナリズムの機関が構造的に体制に組み込まれている、という側面であり、もう一つは、マスコミ的形態をとったジャーナリズムの本質の内に、体制順応主義を再生産する形で、世論操作をする機能が隠されているという側面である。ここでは前者の側面を問題とする。

この点で第一にあげるべきは、マスコミ各機関が政府（郵政省）の許認可権によって、その存在と活動を制約されているという事実である。さらにマスコミ各企業に対してとられている事実上の政府による優遇措置は、無言の圧力となっているであろう。もち論現在の日本において、これらの権力が政府によって露骨に行使されることは考えにくいのであるが、マスコミの側に自主規制を生み出す根本要因となっていることは、疑いえない事実である。

次にあげなければならないのは、広告の問題である。特にテレビは、これに全国的に依存しているのであるが、新聞においても広告収入は、現在では販売収入を大きく上回っているのである。このことは直接には、マスコミが宣伝媒体としての性格を強めているということであるが、ジャーナリズムの自主性を大きく制約し、体制内化を促進する大きな要因ともなっているのである。

ジャーナリズムの自主性との関連でふれておかねばならないものに、編集権の問題がある。編集権が誰に属するかは、ジャーナリズムの批判的機能の確保にとっても重要な問題であり、戦争直後の新聞の民主化闘争において一つの争点となったが、結局経営に属するという形で決着をみることになる。このことは、ジャーナリズムの内部において「体制」の力が勝利したことを意味している。(4)

(4)イデオロギーの機関としてのジャーナリズム

さて次に問題としなければならないのは、ジャーナリズムがイデオロギーの機関として、固有の体制擁護的役割を果たすという側面である。「一つの時代における支配的思想は、支配階級の思想である」というのは、マルクス主義の有名な命題であるが、現代のマスコミ・ジャーナリズムは、それに特有の仕方でこの命題を現実化するのである。しかもジャーナリズムは、このことを半ば無自覚的にそして自発的に行なう。それだけにこの側面は危険であり、無視できないのである。

この点で第一にあげるべきは、マスコミが世論を平準化する傾向を必然的に有しているという事実である。マスコミ各機関は、それがマスコミであるが故に、すなわち不特定多数の大衆に情報を送らねばならないという立場に規定されて、極論（それはしばしば正論である）を避け、平均的な意見を自らの論調とするようになる。マスコミが営業上の観点を無視しえない以上、この傾向は避け難いものとなる。かくして「中立性」、「不偏不党」が、マスコミのやむをえざるアイデンティティとなるのである。

ところで重要なのは、次の点である。平均的な意見は、大体において現実主義的な意見であることを特徴とする。そして現実主義的であるということは、体制的であるということと殆ど同義である。現実主義的であるということが、体制イデオロギーの最大の強味なのである。したがって、マスコミは世論を平準化することを通じて、人々の考え方の体制内化を促進する役割を果たすことになるのである（マスコミの平準化作用に肯定的な面が全く無いというわけではない）[5]。

世論の平準化は、少数意見のさらなる少数化と、その世論からのはじき出し効果を生み出すことになる。人々は孤立することを本質的に恐れるものであるから、マスコミの論調によって、自己の意見が少数意見であることを認識させられると、意見の表明を自ら規制してしまう。このようにして、マスコミの舞台から少数意見ははじき出されることになるのである。これが大勢順応主義が、体制順応主義を拡大再生産してゆく過程なのである。

マスコミ・ジャーナリズムの任務は、以上で終わるわけではない。必要とあらば、時の政府の政策に国民が協力するように、イデオロギー的統合（世論操作）の役を買って出るのである。このことは、戦前のジャーナリズムの歴史が雄弁に物語っているところである。戦前における日本の新聞は、軍国主義政府の統制に服するだけではなく、戦争政策に積極的に協力し、戦意昂揚の旗振り役を演じたのであった。次の一文は、情報統制のために一県一紙に統一しようとする国策に協力した、ある地方新聞の合同に際しての社告の一節である。

「……而もその新聞紙が負うところの時代的役割は決して旧態勢時代の個人主義的、自由主義的、功利的、商品的新聞紙であってはならないのであります。新聞新体制を一言にして申すならば一億一心の国民の耳目を統制する国家的新聞と云うものに帰一されねばならぬ必要上から国策新聞の出現を促進した次第であります。[6]」

戦後においても時代のターニングポイントで、ジャーナリズムはこのような役割を果たしてきた。たとえば六〇年安保の際の、新聞の「七社共同宣言」がそれに当たるであろう。[7] 最近では、二つの例をあげることができる。一つは、政府が導入を策して失敗した「売上税」に対する、『読売新聞』の姿勢である。『読売新聞』は圧倒的多数の国民が反対した売上税に対して、終始一貫して賛成の論陣を張った。日本一の販売部数を誇る新聞としては、この姿勢は営業上決して好ましいものではなかったはずである。

もう一つは、天皇の死直後のマスコミの報道ぶりである。一月七日、八日の二日間、テレビは政府の服喪要請に応え、平常の番組を取り止め、一切コマーシャルをはさまず、又視聴率も気にすることなく、天皇関連番組を流し続けた。宣伝収入に全面的に依存するテレビ資本にとって、これは相当な経済的損失を伴うものであったはずである。これら二つの事実は、現代のマスコミ・ジャーナリズムが、自らの商業的基盤を犠牲にしても、体制擁護のために積極的な役を買って出ることを意味するものである。

このことは、先にみた商業性の問題について、新たな理解を付け加えるものである。すなわち商業性は確かに、ジャーナリズムの活性化をもたらす積極面を有しているが、権力に対抗する積極的な原理とはなりえない、ということである。このことは同時に、商業性の思想的表現である自由主義や、功利主義についても当てはまるのである。先に引用した社告の文章が、そのことをよく示している。

三　アカデミズムの現状

(1)戦前における日本の大学

さて日本のアカデミズムは、これまでみてきたジャーナリズムとの関連において、どのように捉えられるのであろうか。アカデミズムの機関である大学は、本来真理の探究を第一の目的としているはずであるが、そのような立場から戸坂の言うように、「容易に皮相化しようとするジャーナリズムを好意的に牽制して之を多少とも基本的な労作に向かわしめ」るようなインパクトを与えてきたであろうか。

残念ながら、日本のアカデミズムは成立の当初から、そのような影響をジャーナリズムに与えることが困難な状況に置かれていた。もともと日本の大学は、自由な研究によって真

理を追究し、人間性を向上させるというアカデミズム本来の理念に基づいて造られたものではなかった。それは明治初年において、国家によって成立させられ、国家によってその基本的あり方と方向性が決定されたのである。この点で、中世以来の伝統をもつ西欧の多くの大学とは、性格を異にしているのである。明治一九年の帝国大学令第一条には次のように書かれていた。「帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル学術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス」大学は国家が必要とする官僚や技術者の養成と、彼らの職務遂行のための知識を授けることを主たる任務としていたのである。大学の負ったこのような性格は、近代化を急がねばならなかった、当時の日本の事情によって規定されたものと考えられる。いずれにせよ、それは体制の機関としての性格が強く、在野のジャーナリズムによって、その権力的性格を激しく批判されることになるのである。[8]

その後大学制度の拡充とともに、大学の中から学問研究の自立性と学者の身分の保障を求める声が出てくる。[9] そして限られた範囲ではあるが、大学の自治が認められるようになる。しかし自由な研究の保障であるべき大学の自治は、知的エリート集団のギルド的特権の擁護の手段という性格が強かった。特権的意識に支配された教授達は、学問研究の社会的使命を自覚することなく、自らの狭い専門の殻の中にとじ込もることが許された。一般民衆の問題を、自らの研究の問題意識とすることなど、彼らの考え及ぶところではなかった。

このことは戦前におけるアカデミズムのあり方を、二様に規定することになった。一つは、時流からの一定の距離の確保を可能にさせたということである。これによって、アカデミズムはジャーナリズムのように、極端に反動化することを免れることができたのである。この面は、アカデミズムの非日常的性格に由来する強味ということができる。しかしこの強味は、容易に弱点に転化する。つまりアカデミズムは、同じ立場から民衆の抱える時代の切実な問題に対して、無頓着であることもできるからである。これはアカデミズムの弊害である、保守的閉鎖性に係わる側面である。

加えて日本の学問の後進性が、このようなアカデミズムの弱点を拡大することになった。西洋の学問の紹介、移植をその大きな任務としていた戦前のアカデミズム（その傾向は現在も残っているが）は、自国の現実よりも、外国の学問文化に目を向ける傾向が強かった。これが大学教授の社会的意識の低さと相まって、現実感覚の稀薄化をもたらすことになっ

たことは疑えないところである。

このような状況においては、アカデミズムとジャーナリズムが交流する余地はなかった、と考えるべきであろう。そもそもこの二つの契機が関係しうるためには、それぞれが相手の要素を多少なりとも、自らの内に蔵していなければならない。その要素を通してのみ、相手の問題を自らの問題として自覚することが可能になるのである。そのような要素を欠く時、両者は全く疎遠なる他者の関係にとどまることになるであろう。時流に迎合するジャーナリズムと、時流から隔絶したアカデミズムは、ともに疎外された形態にあるのであるが、このような形態において両者が関係を結ぶことは不可能であった。戦前にも、吉野作造や三木清のような、ジャーナリズムと接点をもった優れたアカデミシャンはいたが、個人的な例外にとどまったのである。(10)

(2)戦後アカデミズムの再出発と俗流化

敗戦を経て、新憲法の下戦後の大学は、新たな理念と、制度の改革をもって再出発をすることとなる。「学問の自由」は憲法上保障され、教育の目的も狭隘な国家目的から解放され、「世界の平和と人類の福祉」(『教育基本法』前文)との関係で位置づけられることとなった。このことは、大学における研究者がより高い自覚をもって、研究・教育にあたらねばならないことを意味している。もはや特権的エリートとして、象牙の塔の住人であることは許されないのである。

しかしこれは、真理探究の府としてのアカデミズムにとって、好ましい事態であった。なぜなら、学問研究は一部の権力者や国家目的のためではなく、人類全体の生活向上のために営まれるべきものであり、その成果は、人類全体に還元されねばならないからである。大学をめぐるその後の事態の推移は、ある意味では民主的な理念を現実化してきたようにも思われる。と言うのは、高等教育の普及の中で大学は、かつてのエリート養成機関から、国民の高等教育の機関へと変貌してきたように思われるからである。しかしこれは、大学の国民化のための客観的条件が形成されてきたということにとどまるであろう。なぜなら、その内実において現代の大学は、アカデミズムの理念を放棄しつつあると見られるからである。

研究の面についてみれば、自然科学系の学問を中心として、産業界との無原則的な癒着関係が強まってきているし、社会科学系の学問は、既存の体制を無批判に前提し、現実の彌縫策を提供する社会工学化の傾向を強めてきている。(11)一方教育

についてみると、人間性の向上という目的は二の次に置かれ、職業に役立つ専門知識の切り売りを任務とすることによって、大学自ら専門学校化を押し進める結果となっている。

以上の傾向は、大学におけるアカデミズム性の喪失とみることができる。アカデミズムは、現実を対自化し、現実の矛盾を理論的に分析し、その矛盾の真の解決の方向を示さねばならないからである。

四　アカデミズムとジャーナリズムの可能性

さてこれまで我々は、ジャーナリズムとアカデミズムの否定的側面を中心に問題を論じてきた。確かに両者の現実において、否定的現象が目立つのは事実である。そしてそれは、資本主義的疎外の、それぞれにおける現われである以上、必然的でもあった。我々はむしろ、その否定的過程の進行の内に成長する、積極的な要素を評価しなければならない。巨視的な観点に立てば、アカデミズムとジャーナリズムは、進歩の方向へ向かっていると考えられるのである。

それを進歩とみる第一の根拠として、「大衆化」の現象をあげなければならないであろう。大衆化は、卑俗化、現実追随、批判性の欠如と結びついていたが、別の角度からみるならば、それはアカデミズム、ジャーナリズムと民衆との接近を意味しているし、民衆がそれらの実質的な主人公として登場する客観的条件の成熟を意味している。

ところでアカデミズムとジャーナリズムが、民衆の主体形成に資することができるためには、それらにおいて新たなアイデンティティの確立がなされなければならない。そのアイデンティティは、単なる商業性によって規定されるものであってはならないし、又単なる真理追究の理念によって規定されるものであってもならない。それは国民的要求との関連で、規定されねばならないであろう。このことは単なる理念の確立に終わるものではない。アカデミズム、ジャーナリズムとも、国民的立場に立つ現実的な可能性を与えられているのである。両者の社会における位置を図式的に示すならば、次のようになるであろう。

〈アカデミズム〉国家権力 ↔ 〔経営者管理者〕↔ 大学人 ＝ 国民

〈ジャーナリズム〉国家権力 ↔ 〔経営者↔ジャーナリスト〕 マスコミ機関 ＝ 国民

大学人、ジャーナリストは、国民的基盤に立つことによっ

て、経営者（管理者）をまき込み、権力とよく対抗することが可能となるのである。そして権力と対抗する原理となるのは、大学においては「学問の自由」、「大学の自治」であり、ジャーナリズムにおいては、「表現の自由」、「知る権利」である。これらの権利は、これまで大学人やジャーナリストの特権と考えられる傾向があったが、これらも国民的基盤において解釈され直されるべきであろう。

学問の自由、大学の自治についてみるならば、それらは国民の教育権、学習権との関係で捉え直されるべきであろうし、[12] 又表現の自由、知る権利をジャーナリストが行使する場合、それは国民の負託によるものであると理解すべきであろう。逆に、このように捉えることによって、これらの権利が十全の意義を獲得することになるのである。

戦後、大学人やジャーナリストによって取り組まれてきた運動は、アカデミズムとジャーナリズムの両領域において、国民的原理を確立するための粘り強い闘いであった。それらは、「大学管理法」や「国家秘密法」に反対する闘いのように、権力の統制に抵抗する受身の闘いである場合が多かったが、一方で「東大確認書」や名古屋大学の「平和憲章」のように、大学の自治や研究を国民的原理に基づかせようとする積極的な闘いも存在した。アカデミズムとジャーナリズムの将来は、このような闘いによってのみ切り拓かれることになるであろう。

（1）『戸坂潤全集』（勁草書房）第三巻150頁。

（2）この辺の事情については、内川芳美・新井直之編『日本のジャーナリズム』（有斐閣選書）Ⅰ章「近代日本のジャーナリズム」を参照されたい。

（3）『世界』をはじめとする総合雑誌は概して全面講和支持であったが、新聞でも『朝日新聞』をはじめ一六・三％（一四紙）が全面講和支持であった。

（4）編集権の問題については、『講座Ⅵ現代ジャーナリズム・ジャーナリスト』（時事通信社）所収の論文「『編集権・編成権』をどう考えるか」（塚本三夫）が詳しい。

（5）マスコミによる世論の平準化作用によって、低水準の世論の部分の底上げ現象が起こることも否定できない事実である。

（6）中井晶夫・三輪公忠編『権力と人間』（彩流社）238～239頁。

（7）六〇年安保で民衆の抗議行動が激化した時、在京七社によって、事態の収拾をはかれとする宣言が出されるが、これが戦後の新聞の転回点となったとも言われている。

（8）明治二五年、雑誌『国民之友』に「思想上に於ける帝国大学の感化」と題する、次のような社説が載った。

「大学が常に一代の健全正大なる思想に対して戦ひつつ其歴

史を作り為せしは、吾人が実に遺憾に思ふ所也。自由民権の運動に反対したるものは誰ぞや。亡学亡術の山師、其表面に立つと雖も、多く武器を大学出身の徒より借り来りしにあらずや。……」家永三郎『大学の自由の歴史』（塙選書）171頁。

(9) たとえば美濃部達吉は、明治三八年、法学雑誌に次のような一文を寄せて、学者の自立性について論じている。

「大学教授ハ為政者ニ非ラズ、又為政者ノ属僚ニ非ラズ。政府ノ外ニ独立シテ学術ノ研究ニ従フ者ナリ。」（同書39頁）。

(10) 三木清は戦前において、アカデミズムとジャーナリズムについて、又両者の関係について、もっとも精力的に論じた思想家である。たとえば、「ジャーナリズム」（『三木清全集』第一四巻）「大学とアカデミズム」（『同第一三巻』）。

(11) 現代の日本の学者の権力迎合的性格について論じた最近の論文に次のものがある。K・G・Vウォルフレン「なぜ日本の知識人はひたすら権力に追従するのか」『中央公論』一九八九年一月号。

(12) 寺崎昌男・大沢勝『講座日本の大学改革第1巻　現代社会と大学』（青木書店）所収の「現代における大学の自治と学問の自由」（渡辺洋三）が、このような立場から新しい見解を展開している。

（うすい　としまさ　京都橘女子大学・哲学）

池谷壽夫／後藤道夫／竹内章郎
中西新太郎／吉崎祥司／吉田千秋　著　¥2000
競争の教育から共同の教育へ
今日の学校教育をつらぬいている能力主義・管理主義を徹底的に批判するとともに、孤立した個人の競争を強いる教育から、共同的な人間関係を基軸にした教育への転換をめざし、その理論的・思想的指針を提示する。臨教審「教育改革」路線と対決する斬新な共同研究による教育論。

心理科学研究会　編　¥2200
かたりあう青年心理学
今日の青年をどのように理解したらよいか。学ぶこと、生きること、働くこと、性とは、など青年が日ごろ悩み、かかえている問題を取り上げ、それらの意味をともに考え、かたりあうなかで現代青年の意識の実態をいきいきと掘り起こす。

青木書店　東京都千代田区神田神保町一
電話 03 二九二一〇四八一

■特集　いま、大学とは　学問とは

知の構築への出航

川口啓明

大学や学問のあり方が、今、問われるのは、さまざまな問題点が社会的にも歴然と現れてきているからであろう。しかし、私は、一人の自称「科学ジャーナリスト」にすぎない。大学における知のあり方を論じるのは身に余るし、そもそも私は大学と学問に嫌気がさして大学を辞めてしまった人間だから、私への原稿依頼の編集委員会の意図も、そのような議論は期待していないと思える。そこで、「いま、大学とは　学問とは」という特集テーマからは少しずれるかもしれないが、学問や研究者の社会的責任などに対する私自身の考え方を述べて、今テーマの一つの参考となればと思う。(1)

一　職業としての学問

結果としてのある一つの行動が、ある一つの理由によって説明されるというのは稀であろう。いくつもの、それ自体としては取るに足りないことごとが加算されて、全体としてある閾値(いきち)を越えた時に、ある行動が生じると思える。私が大学を辞める気になったのも、そして実際に辞めたのも、いくつものことが関係している。したがって、以下で述べることは原因のいくつかではあったけれども、それがすべてだという

わけではない。ここでは、大学を辞めた理由を、今の時点で、自分自身で整理しながら述べたいと思う。文章にしてしまうと、言葉では表しにくい微妙ないくつもの感情や事情が削り落とされ、整理されすぎてしまう面があることは了解していただきたい。また、私自身に関連して述べる学問とは、自然科学ないしは生物学のことであることも了解していただきたい。

大学を辞めてもよいと思った理由の一つは、学問が面白くないということであった。なぜ面白くなかったのか。私は生物学を学んだ。大学、および大学院で学んだ、主として分子生物学の知識は、それこそ「血湧き肉踊る」というぐらい面白いものだった。だが、大学院で徐々に実験研究らしきものに携わってくると、学問の面白さは次第に薄れていった。当初は、自分自身でも、この面白みのなさに戸惑った。学問が面白くないという、その理由を自分なりに納得できたのは、マックス・ウェーバーの『職業としての学問』を読んだ時だった。ウェーバーは言う。

こんにちなにか実際に学問上の仕事を完成したという誇りは、ひとり自己の専門に閉じこもることによってのみ得られるのである。これはたんに外的条件としてそうであるばかりではない。心構えのうえからいってもそうなのである。(2)

こうしたあまり類のない、第三者にはおよそ馬鹿げてみえる三昧境、こうした情熱、つまりいまいったような、ある写本のある箇所について「これが何千年も前から解かれないできた永遠の問題である」として、なにごとも忘れてその解釈を得ることに熱中するといった心構え——これのない人は学問には向いていない。そういう人はなにかほかのことをやったほうがいい。(3)

現在の「職業としての学問」は、細分化され、専門化し、そしてステレオタイプ化した論文の形式に代表されるように標準化されている。これは、「瑣末な専門主義」などと批判すれば片づくものではなく、ウェーバーが見通していた通り、現在の学問の必然の道であると思える。「職業としての学問」に携わるためには、つまり具体的には、大学に勤め、ある学会に属し、研究発表を行い、研究成果をまとめて学術論文を書くためには、自らの関心を細分化し、専門化し、標準化す

ることが、よほどのアウトサイダーで生きようとしない限り、どうしても必要になる。しかし、このようなことが必要であると納得することと、それを面白いと思う感情は別のものである。少なくとも私はそうであった。

実際、このような「職業としての学問」は必要であると思えるが、面白くとも何ともなかったのである。知識を得ることと、実際の実験研究を通して知識を作り上げていくこととは、多少異なっている。アマチュア的に知識を得ることは大体において面白いものだが、職業的に知識を作り出すことには面白みが少ない。この二つのことにはギャップがある。

ウェーバーの本の「旧訳の序」には、この本のもとになったウェーバーの講演は、聴衆に「おびやかすような印象」を与えたとある。しかし、私が思うには、ウェーバーのこのような講演を聞いた聴衆は「職業としての学問」のあまりの面白みのなさに唖然としたのではなかろうかと思えてくる。

いずれにせよ、細分化、専門化、標準化していく現代の自然科学の潮流は不可避である。ウェーバーの警句に対抗しようとすれば、現代の自然科学を「要素還元主義」として非難する全体論（ホーリズム）のような「非合理主義」に流れていかざるを得ない。つまりは、「一般に自然科学でおこなわれる分析は、あくまで悟性的、形式論理学的分析である。そしてこのさいに、『分析は即総合である』とか、『分析と総合は盾の裏表で切りはなすことはできない』などという、いわゆる弁証法的分析総合論などは、科学の研究の第一歩（この段階）にあっては、害があっても、益はまったくない」[4]からである。生物学に関係した学術論文は、次々とそれこそ山と出されているが、ほとんどは、この「分析」に関係している。

やはり、私のように現在の「職業としての学問」にのめり込めなかった者は、ウェーバーの忠告の通りで「学問には向いていない」し、「そういう人はなにかほかのことをやったほうがいい」のであろうと思う。大学において「職業としての学問」に携わるためには、それを面白いと思っていなければ耐えられるものではない。面白くない、これが私が大学を辞めた一つの理由である。

二　狂気の内幕

しかし、大学で行われている現在の「職業としての学問」が必要のないものだ、などとはもちろん思わない。私にとっての主要な問題は、面白くもない「職業としての学問」を、

私自身がやっていくのかどうか、という個人的なことであった。

しかし、また別のことも気になっていた。面白いということは、「職業としての学問」に携わるうえで必須の条件であろうが、これが面白いということを前提とすると、さらに次の段階の問いとして、「面白ければ何でもいいのか」ということが問題になってくる。

効率的な核戦争戦略とか「人道的」中性子爆弾などを研究・開発している科学者たちは、それはそれなりに面白みを感じて研究に従事しているのであろう。研究を行うべきかどうか、研究者が面白いと感じたら研究の自由から言って、どのような研究でも行ってもいいのか、というような議論は、核兵器などの研究では、ある程度に明確になるが、医学・生物学での生命操作や遺伝子組換え実験などになってくると、議論が難しくなってくる。このような研究を推進しようとする科学者の側は、科学の進歩の必然性と必要性をうたい上げる。しかし、このような議論で、推進側の科学者の言い分を聞いても、割り切れない気分が残ってくる原因の一つは、科学が社会のなかでどのような役割を担うのがよいのかということと、科学を進展させて、どのような社会を作り出そうとしているのかということとが不可分の関係であるのに、そのような観点が大抵の科学者に抜け落ちているからだと思える。

原発やP4施設（遺伝子組換え実験を行う高度安全実験施設）についての議論で、科学研究の進展の必要性を研究者が説くのを聞くと、なんとなく違和感と抵抗感を覚えるのも、このためであろう。しかし、研究者たちに科学と社会との関係を問うても答えられないだろうし（恐ろしく楽観的ないい加減な答えが返ってくる可能性はあるが、これは答えていないのと同じである）、そのようなことは研究者の思考の枠組みのなかには、そもそも入っていないであろう。

先のウェーバーは、自然科学のこのような没価値性についても述べている。

> 一般に自然科学は、もし人生を技術的に支配したいと思うならばわれわれはどうするべきであるか、という問いにたいしてはわれわれに答えてくれる。しかし、そもそもそれが技術的に支配されるべきかどうか、またそのことをわれわれが欲するかどうか、ということ、さらにまたそうすることがなにか特別の意義をもつかどうかということ、――こうしたことについてはなんらの解釈を

も与えず、あるいはむしろこれをその当然の前提とするのである。[5]

結局、学問（自然科学）は面白いだけでいいのか、という問いを考えてみると、それは自然科学が社会的に没価値であっていいのかという問いに関係し、没価値であってはならないはずだという立場を取るとすれば、自然科学の社会での位置づけを整理しなければならず、付随して、科学的な作業を行う科学者の社会的、かつ個人的責任ということが問題になってくる。

このようなことに対して、私がいちばん気になり、いつも思い出すのはアルバート・シュペールである。

シュペールは、第二次世界大戦中のナチスドイツの軍需大臣であった。彼はもともとは建築家であった。そして、ヒトラーに積極的に賛同していたわけではないものの、ヒトラーのために巨大な建築物を設計し、戦争中には軍需大臣として兵器生産と工業生産を効率的に行うことに努力した。そして、ニュールンベルク裁判の後、二〇年余りの独房生活を送り、そのあとに回想録を書いている。彼の回想録が現在でも意義を持つと思えるのは、ファシズムに巻き込まれた自己を深く考察しているからである。シュペールは次のように述べる。

仕事への情熱が、本来なら私が直面すべき諸問題を押しのけてしまった。せわしい毎日の中で、途方にくれる暇はなかった。この回想録を書き進めていくうちに改めて自分でも驚き、かつ愕然としたのは、私が一九四四年まで、めったに、いや本当はまるっきりといってよいくらい、自分自身と自分のやっていることを考えてみたことがなかったということ、私が自分というものを一度もふり返ってみたことがなかったということである。……（中略）……ユダヤ人、フリーメイソン、社会民主党あるいはエホバの証人派の人たちが、私の周囲の者によって野良犬のように殺されたことを聞いても、私個人には関係ないと思ったにちがいない。自分さえそれに加わらなければいいんだと。[6]

シュペールは、事件全体に協力した事実ははっきりと脳裏に残っているものの、自分の道徳感の欠如は詳細に分析できないと述べる。[7]そして、近代社会のなかでは人間の非人格化が進み、個人的責任が薄れてくることを述べて、回想録の最

後を次の文章で締め括っている。

私は人生における最も大切な年月を、技術のために奉仕した。技術の可能性に眩惑されたのである。結果はこれに反した。そして懐疑だけが残ったのである。[8]

社会的な狂気の内幕というのは、シュペールが述べるようなところが、実際のところであろう。社会全体の狂気は、平凡な、善良な、仕事熱心な、楽天的な普通の人たちによって支えられてくるのであろう。現代社会が狂気に満ちたものであっても、複雑化した現代社会では、自らの社会的な道徳感の欠如を自分自身で把握し、反省し、途方にくれることは難しい。シュペールが犯した過ちを、われわれが犯さないと言えるだろうか。われわれもまた、この社会に生まれ落ち、この社会に育てられ、この社会の職業に就き、そして仕事に対して情熱を燃やす。そのなかで、自分が属している社会、自分自身、自分のやっていることをふり返るということ、これは実際には容易ではない。シュペールの反省は、自分自身のあり方を考えた時、恐怖となって襲ってくる。自分自身もまた、シュペールと同じ過ちを犯しているのではないかという恐怖である。

数年前の事件であるが、多数の老人たちを食いものにした豊田商事は、社会的な事件として取り上げられる以前に、自社の「優良社員」を数多く表彰していた。これらの「優良社員」が非難されるべきだとすれば、それはどの立場からだろうか。社員として仕事に情熱をもって「まじめに」働いたこと自体が非難されることではないとすれば、自分自身、現代社会のなかで働くということ自体、自分のやっていること、これらを考えてみたことがなかったということが非難されることなのであろう。

大学で「職業としての学問」に携わっている人たちはどうであろうか。バイオテクノロジーなどに見られるように、現代は皮相的ではあれ、科学技術がもてはやされる時代である。そのなかで、慌ただしく研究を進め、論文生産に励む科学者たちは、自分自身をふり返っているだろうか。自分のやっていることを社会との関連で考えてみたことがあるだろうか。そのような科学技術によって支えられている社会に狂気は満ちていないだろうか。技術の可能性に眩惑され、振り回されているだけではないのだろうか。これから先にもたらされるであろう社会を考えているであろうか。

このように考えてくれれば、シュペールが置かれていた立場と、豊田商事の「優良社員」と、大学の「まじめな」研究者の立場は、案外と近いと思えてくる。

社会的な責任を個人的にはどこから取ればよいのか、つまりは、どこに線引きをして引き受ければよいのかという判断は難しい。大学になんらかの問題があるなら、大学にとどまって、ねばり強く少しでも改善していくという立場もあることは充分に承知しているし、そうすることは必要でもあり、望ましいことでもあろう。しかし、資本主義社会はろくでもないものだと思えるし、大学が資本主義社会の一つである日本の、その国家機関の一つであることから言えば、大学を辞めるという立場もまたあり得ると思える。シュペールに対して、あるいは豊田商事の社員に対して、その社会的地位を放棄すればよかったのだ、という考え方は、それによって彼らを取り巻く状況が改善されなかったとしても、個人的な責任の取り方の一つとしてはなりたつだろう。

責任の取り方には、社会的な形と個人的な形があろう。社会を変革していくことが前提にはなるだろうが、社会が悪いと言って個人的な責任を取らないというのも気分的に落ち着かない。最近の異常な天皇報道に対しても思うのだが、嫌なものは絶対に嫌だと個人としてもはっきりさせることが、社会全体の狂気に自分自身が巻き込まれない、また自分自身が加担しないためには必要だと思える。それで社会が変わるわけでもないだろうという批判もあるだろうが、だからと言って、個人的な責任を何も取らなくてよいということでもないだろう。

現代社会に対する個人的な責任を大学を辞めるという形で取ること、このことがあまりにも短絡的、小児病的であるという批判も当然あろう。しかし、私にとっては、そういう責任の取り方を選びたかったのだと答えるしかない。もちろん、このようなことが唯一の責任の取り方だとは思わないし、他の人に、このような選択を押しつけるようなお節介さも、私は持ち合わせていない。それぞれの人が自分なりの責任の取り方をすればよいのだと思う。

しかし、少なくとも私自身にとっては、自分の職業が現在の社会の維持機関の一部であったとしても、社会全体の狂気に直接的に加担しなければ自分自身と関係ないという立場は、選択可能な立場ではなかったということである。

このようなことが、私が大学を辞めた、もう一つの理由である。

三　一九八四年

では、大学を辞めて私は何をやりたかったのか。その他のこともあるが、「いま、大学とは 学問とは」というテーマに関連した面だけについて言えば、アカデミズムにとらわれない、生活に根ざした「知の構築」ということである。ジョージ・オーウェルの『一九八四年』のなかに、主人公（ウィンストン）が社会変革に希望を抱く場面がある。ウィンストンは、庭先の逞しい五十女を見て思う。彼女の人生は最初は子供達、それから孫達のために三十年以上も休まずに働き続けて来たに違いない。しかし、人生の終わりに近づきながら、それでも彼女は歌いながら今ここで洗濯物を干している。ウィンストンは、彼女に対して不可思議な敬愛の念を抱く。

しかも大空の下に生きる人々は、どんなにかお互いに似ていることか――世界じゅうどこでも、自分たちと同じような人間が何億、何十億とお互いの存在さえ知らずに憎悪と虚構の壁に隔てられ、それでいながら互いにひどく似通っているのだ――彼らは一度も考えることを身につけた例しがないのに、その心と腹と筋肉は何時か世界を転覆させる力を備えているのである。もし希望があるとすれば、それはプロレにこそあるのだ！[9]

アカデミックに知識を加工・生産することよりも、生活の現場に根ざすことこそが、社会変革に繋がるように思える。つまりは、大学内での「知の再建」ではなく、普通の人たちの生活の現場に根ざした「知の構築」こそが、現在、求められているのではないか。

アカデミズムの自然科学が没価値性を示すのに対して、生活の現場から問えば、自然科学もまた価値を持たざるを得ない。生活様式、文化、暮らし方のなかでの自然科学の有り様が問われてくるからである。生活の現場に根ざした「知の構築」ということをいう意味は、価値を伴う自然科学こそが求められているのではないかと思えるからである。

私は、自分自身が面白いと思うことには何にでも頭を突っ込むようにしているので、私がいくらか関係しているいくつかのことを、例にして述べよう。昨年来、問題になっていることの一つに原発問題がある。

原発をアカデミックに取り扱うとすれば、原子炉の材質、

安全系の組立、その信頼性、あるいは安全な新型原子炉の設計、あるいはまた放射性廃棄物の管理方法や無害化手法などが問題となろう。研究者は、原発の存在を前提として、このようなことを研究すれば学術論文を生産できる。しかし一方、生活の現場から原発を問えば、自分たちの暮らし方そのものなかでの原発の位置づけが問題になってくる。原発によって支えられる現在の社会がまともなのかどうか、原発によって提供されるような自分たちの暮らしの便利さ、快適さが本当に必要なのかどうか、都市はどのように造られるべきなのかなどが問題になってくる。自然科学の社会的価値が問われてくるのである。そして、それは社会のあり方を問うことになる。原発に反対する運動は、ラダイト運動的な段階を乗り越えさえすれば、社会変革に繋がるものであろう。

また、いわゆる「食品公害」での食品添加物や残留農薬や残留抗生物質やその他の人工的な化学物質について言えば、これらの化学物質について、アカデミックに学術論文を生産できるような形で取り扱おうとすれば、使用されている、あるいはこれから使用されようとしている人工化学物質を用いて動物実験を行い、毒性を判断するというようなことになるだろう。しかし、実際の生活の現場では、自然科学的に毒性がどうこうというのは、問題の一つにはなるが、主要な問題とはならない。そういう人工化学物質が使用されるということこそが、いちばんの問題となるからである。動物実験を行っても、人間での毒性は判断できないことのほうが圧倒的に多い。そのために、自然科学的に毒性がどの程度かという学術的な議論よりも、怪しげな人工化学物質はできる限り使用しないということのほうが重要になってくるのである。そして、できる限り使用しないためには、現在とは異なる、生産・流通・消費の全過程を含む新しい食文化を作り出すということが、次の主要な問題となる。

自然科学的な毒性問題だけにこだわることは、かえって人工化学物質の存在そのものの問題を見えなくしてしまう。実際、これまでは自然科学的な毒性問題にこだわり過ぎたために、急性毒性が小さいというだけの「低毒性」農薬や、毒性データがないために、毒性が議論にならないというだけの「天然」添加物が、現在、氾濫しているのである。

また、世界的に問題になってきている環境破壊について言えば、これの大きな要因である資本主義体制を免罪するつもりは毛頭ないが、われわれの生活そのものの基盤が問われていることも事実であろう。熱帯林の破壊では、日本の箸コネ

クションも言われているし、そもそも日本は世界最大の木材輸入国であり、東南アジアの熱帯林を徹底的に破壊している。環境破壊をアカデミックに研究することもできるであろうが、そのことよりも環境破壊を防ぐためにわれわれの生活を組立て直すことが、まず優先されるべきであろう。

いくつかの例をあげたが、ウェーバーが言うような自然科学の没価値性に対して、生活の現場から自然科学の価値そのものを問わなければならないように思える。つまり、細分化、専門化、標準化したアカデミックな科学も必要ではあろうが、われわれの生活のあり方そのものを問い、そのなかでの科学を問い、社会そのものを問うことも必要であろう。このための、生活に根ざした新たな「知の構築」がなされなければならないと思える。

こういうことから言えば、「職業としての学問」がなされる大学における「知の再建」に必ずしもこだわることはないのではないかと私には思える。実際の生活の現場に、「知の構築」の必要性は満ちている。それは、現代の社会が、矛盾と困難と奇妙さに満ちているからである。そして私にとっては、「職業としての学問」よりも、生活に根ざした「知の構築」のほうが圧倒的に面白い。

大学を辞める時、友人のうちの何人かは、「もうこれで科学研究をやれなくなるけれど、それで満足するのか」と同情気味に尋ねてくれた。しかし、私にすれば「もっと面白いことをやれるぞ」という期待と、「職業としての学問」のつまらなさと訣別できてせいせいするという心地好さに内心は満ちていた。

大学を辞めて、そんなことをしても展望があるのかと問う人もいた。ある行動を起こす時の展望一般について言えば、もちろん展望はないよりあったほうがよい。しかし、展望なんていうのは、せいぜいその程度のものだろう。ともかくも、やり始めることが大切であると思える。力不足であるかもしれないが、やってみなければ分からないことのほうが多い。

四　もう一度、船をだせ

川上徹は『もう一度、船をだせ』のなかで劇団・統一劇場によって上演された「出航」という芝居[10]を援用しながら、「展望」について述べている。芝居は、漁師たちのたまり場である食堂を主な舞台として進む。景気がよかったのは昔の話で、漁業の先行きは、どう考えてみても明るい材料は一つ

もない。船主と漁師たちは、家族とともに「解散式」を行う。その「解散式」の過程で、男も女もしだいしだいに「大漁節」を力のかぎり歌い踊るようになる。突然、誰かが「もう一度、船を出せんかなあ」と叫ぶ。そして、もう一度、船を出そう、ということになる。

歌っているうちに明るい「展望」が見えてきた、というのではなかった。船を出せる条件が出てきた、というのでもなかった。漁師たちに何らかの打算があって、ふたたび決意したのではなかった。内なるものにつきあげられ、そうせずにはいられない、ある高まりのなかから出された結論であった。

そういう意味で、この芝居は「論理」的ではなかったけれども、私にとってリアリティーがあった。人間が生きるとはそういうことではないか。船を出すことに見通しがあったから魚をとりにいくのではない、魚をとりにいきたいから、漁なくして自分が自分でなくなるから、だから船を出そうと思ったのだ。

人生において選択を求められるとき、「展望」の有無を基準とするときはある。誰でも、明らかに失敗し破滅する道を選ぶことはないであろう。しかし、同時に、「展望」の有無にかかわらず、どうしてもその道を選ばないではいられない、というときもあるのではないだろうか。そうしなければ自分が自分でなくなるような、自分の存在意義をかけた選択である。これは、もっとも人間的な選択の場面であると私は思う。このとき、自分の選んだ選択肢の成功の保障の有無は問題になりえない。(11)

私がいつも自分自身で問題にしてきたことは、私自身が何をやりたいのか、何を面白いと思うのか、この奇妙さと困難に満ちた現代社会に生きる一人として、何に個人的な責任を負うのかということであった。

総じて言えば、大学における「知の再建」ということが、その本人にとって面白く、また社会的意義もあると思え、個人的責任の取り方の一つとして行いたく、さらには自分らしさを保つうえで是が非でも行うことが必要だと思えば、それはそれとして、やればよいと思う。しかしながら、現在、求められているのは、現代社会を変革していくうえでの、先に述べたような新しい「知の構築」ではないのかと思える。そして、それは、大学に限らず、どのような場でもやれるので

はないのか。私自身は日常生活の現場に基づいて、それをやっていきたいと思っている。

ブルータスは言う。「おおよそ人のなすことには潮時というものがある、一度その差し潮に乗じさえすれば幸運の渚に達しよう」[12]。われわれは今こそ、新しい「知の構築」へ向けて「出航！」と勇ましく叫び声をあげるべきなのだと思える。

（1）この拙文を読んでいただくためには、私自身の経歴を簡単に紹介しておくほうがよいと思える。

一九七四年大阪大学理学部生物学科卒業
一九七九年東京大学理系大学院生物化学専門課程修了
一九七九年宮崎医科大学医学部助手
一九八〇年大学を辞め、日本生活協同組合連合会に勤務
一九八四年退社、以降は著述などに従事

主な著訳書。『放射能汚染食品の背景』同時代社、共著。『だいじょうぶ？　いまの野菜』同時代社。『食品添加物の「非」科学』芽ばえ社。『バイオテクノロジーってなに？』岩崎書店。『遺伝的乗っ取り』紀伊國屋書店、共訳、など。

（2）マックス・ウェーバー『職業としての学問』岩波文庫、21頁。
（3）同、22―23頁。
（4）井尻正二『社会科学と自然科学の方法――『資本論』の方法をめぐって』大月書店（工藤晃と共著）、25頁。
（5）マックス・ウェーバー前掲書、45頁。
（6）アルバート・シュペール『ナチス狂気の内幕――シュペールの回想録』読売新聞社、41―42頁。
（7）同、528頁。
（8）同、529頁。
（9）ジョージ・オーウェル『一九八四年』早川書房、203頁。
（10）この「出航」という芝居は、統一劇場によって、一九八九年前半に九州地域、中京地区、東京で演じられる予定である。
（11）川上徹『もう一度、船をだせ』花伝社、45―46頁。
（12）シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』新潮文庫、110頁。

（かわぐち　ひろあき　東京唯物論研究会・生物学）

現代における教養とはなにか

松井　正樹

(1)

今どき「教養とはなにか」を問題にするのは、やり忘れた宿題をあとで解いているような変な感じがしないでもない。いま重要視されているのは、「生涯教育」と言ったことだろう。もっとも、生涯学習と言わないで「教育」というところが押し付けがましいが、「学習」というと私事めいて聞こえるので、問題の社会的性格を特徴付けるのに「生涯教育」と表現されているのか、その間の事情はつまびらかではない。

しかし、生涯にわたって社会的枠組みを押し付けられたり、イデオロギー的誘導を被るのではたまったものではない。しかも、そういった心配が危惧でないことは、最近の幾多の事例で証明できるが、ここでは、一例だけにしておこう。大学入試センターが、不評の共通一次試験にかえて実施しようとしている「新テスト」の「試行テスト」が昨年一二月二五日から行われたが、その日本史の四問題の一つに、心配したとおり旧来の天皇神聖視を「日本人の国家観」として押し付ける問題がだされたりしている。十年前に共通一次試験が実施されようとした時、すでにそれが国民思想のイデオロギー的

操作のテコとして使われる危険性を警告しておいたが、その心配が明白な事実となって現れたのである。だから「新テスト」もすぐに止めてほしいのだが、こんなことが「生涯教育」として生涯にわたってまで実施されるとしたら天皇制軍国主義の再来も夢ではなくなってしまう。

他方、学習者の主体性を示すとはいえ、「学習」という表現は、「まねる」を語源とする未熟さと私事性への偏りがその語感につきまとう。ということになると、本当は「生涯教養」というのが最も適当な表現なのではなかろうか。しかし、そういう表現はいまだに確立されてはいない。その理由は幾つか考えられようが、教養ということは生涯にわたってなされるのが当然であるという暗黙の了解があるのに、それを殊更に再表現することの愚かしさの感じもその一つであろう。こうした暗黙の了解のなかには、貴重な歴史的知恵の無自覚な内容が含まれていることがあるが、この件もその一つではなかろうか。ということで、これを手掛かりとして、話を本来のテーマ「教養とはなにか」にもどそう。

そこで、まず第一に言えることは、「教養は、生涯にわたってなされるはずのことだ」ということであろう。したがって、この特集テーマである「いま、大学とは 学問とは」という課題との関連で考えるとすれば、「大学における教養」は「生涯にわたる教養」に強いインパクトを与えるものでなければならないし、またそれでこそ「教養教育」と呼ぶことができるのではないかという重い問いが浮かび上がってくる。とりわけ、高齢化社会への対応として生涯教育が重視されている今日の教養教育としては、それが「生涯にわたる教養」の出発点となり、また持続的な推進力ともなりうるようなものであることが求められているといえよう。少なくとも、この程度の責任関連がなければ、教養教育が専門教育とともに大学教育の二大主柱をなすとはいえないであろう。

もちろん、教養教育の意義は学生各個人の生涯への責任関連だけではない。「生涯」を個人の人生といった私事に矮小化する観点をのりこえて、それを社会生活の展開過程として現実的に考えるならば、教養教育は個人の社会生活の在り方を介して社会の歴史過程にたいしてまで責任関連をもつといえよう。私生活主義まんえんの今日では、おおげさな説教はよしてくれと言われそうだが、教養教育の歴史を振り返ってみるとそうは言っていられなくなる。ここでも、一例を指摘するにとどめるが、大正から第二次世界大戦期にいたる旧制高等学校での教養主義教育が、帝国大学の専門教育を介して、

大日本帝国の支配層とその官僚との精神構造を育成する上で大きなインパクトを与え、日本の帝国主義的拡張の文化的支柱を形成するうえでかなりの責任関連を有したことは、多言を要しない事実であろう。しかも、教養主義教育の自明の目標が「個人の人間の完成」に置かれていたことを考え合わせると、たとえ教養教育が教養主義のように個人的私事に目標を置いたとしても、その社会的責任関連は問われなければならない。すなわち、その教養教育は、いかなる社会の、いかなる歴史過程を展望しておこなわれるのかが問われなければならない。

教養教育は単なる私事ではないと言うとき、注意しなければならないことがある。私の逆である公に二義があるということである。「公・私」問題は本誌でも特集されたが、日本では公事という主君（おおやけ・大家・皇）に奉仕する官のこと（official にその義あり）と解する伝統が強いために、民衆の公共事（public〈people にその義あり）として自覚的に官と区別しながら議論展開するという傾向が弱いという問題がある。戦前の教養主義から今日の私生活主義にいたるまで概して官的公を敬遠する傾向がみられるが、民衆的公共性をも軽視するため、民衆的共同を形成できずに、結局は官制的管理に摂収されてしまう。今日の教養教育がそんなことにならないためには、民衆的共同をめざす真の公共性が自覚されねばならないだろう。

以上のように、生涯にわたる展望を持ち、社会の展開過程に責任関連をもち、とりわけ民衆的共同をめざす真の公共性が求められるというのが、教養教育を性格付けている要件であるとすれば、それが general education と呼ばれ、「人間性豊かな社会人の育成を目指す」教育と説明されたのは適切であった。しかし、それが専門教育との対比で「一般教育」と訳され、最近の国大協の報告（国立大学協会・教養課程に関する特別委員会報告「教養課程の改革」昭和六三年一一月・改革報告と略称）でも指摘されているように、一般教育を「均等・分散」履修の教育と解される現実が生じたことは遺憾であったといえよう。職業的・専門科学技術的能力の習得をめざす専門教育との対比で訳すとすれば、「総合教育」とするほうがよりましであったろうし、「教養教育」と称するほうがより素直であったろう。それが「一般教育」と名付けられたのにはそれなりの理由がありそうだが、旧制高校式の liberal arts 型の教養教育と区別しようという意識が働いたのかもしれない。前掲の国大協の改革報告でも、一般教育の発足につい

て次のように記している。長文であるが重要なので引用しておこう。

「敗戦を契機とする民主主義的諸改革の一環として実施された学制改革のもとで、新制大学が発足した際、それを支える重要な柱として〈一般教育〉が導入された事は、戦前の高等教育を改善するうえで大きな意義をもっていた。戦前の高等教育の弊害に対する深い反省のうえに立ち、〈人間教育〉の重要性を強調する立場から構想された一般教育は、戦前の旧制高校において実施された少数エリートのための予備的ないし準備的な教養教育とは異なり、戦後の民主主義的理想を反映して、民主的社会の担い手としてふさわしい高度な市民性を育成するところにその目標をおいたものであった。」

(2)

まことに初心忘るべからずであるが、今日その再改革が求められているのは、この初心が十分達成されていないからばかりではなく、逆に教養教育無用論を初めとする反動的圧力と、さらに当初の一般教育が旧制高校の教員によって担われたことなどによるliberal arts型の惰性などによって、新しいgeneral educationとしての教養教育が確立されなかったからだといえよう。「民主改革」とさえ言われた敗戦直後の民主的改革は一九五〇年ごろから急激に反動的ブレーキをかけられ、さらにその後の高度経済成長とその結果に対処する超近代主義的発展への要求は、教育の場へも大きな影響をあたえた。

簡略に指摘した、こうした戦後の変遷とその教育への影響のなかで、戦前のliberal arts型の教育をうけた自由主義的教養人のなかには戦前の天皇制軍国主義の非合理主義的潮流にふりまわされなかった者もいるとされ、そのliberal arts型の教養教育が戦後の教育反動に対しても一定の抵抗性をもつのではないかといった再評価がなされたりもした。しかし、それは戦後の民主化を「過渡期」とする革新的な運動の停滞と、スターリニズムや文化大革命などの悪影響による革新的展望の戸惑いなどのために、次善の策として再評価されたにすぎず、それでは高度経済成長以後の「危機」とまで言われる諸問題を解決する期待に応えられず、再改革が声高に求められることになったのである。

もともと、liberal arts型の教養教育に期待されたのは、帝国主義にいたる資本主義の科学技術的発展を支える近代主

義的専門技術教育を補完する、合理主義的文化主義による主体形成の教育（人格教育）としてであった。したがって、資本主義の近代主義的発展の頂点ともいえる高度経済成長以後の諸問題の解決を託せる主体を形成する教育を liberal arts 型の近代主義的な教養教育に期待するわけにはいかない。そこで登場するのが超近代主義的な教育路線であって、その非合理主義的文化主義は復古的形態とポストモダニズムのような超近代的形態とに別れて競合的に発生し、先端技術的または政策科学的専門教育を補完するよう期待される。だがそうした路線が保障しようとするのは、資本主義の近代主義的発展が生みだす帝国主義的諸問題への対応策にすぎないのではなかろうか。だから、今日の大学教育に求められている教養教育の改革は、資本主義のファッシズム的な（「近代の超克」と称された）発展を克服するだけでなく、資本主義の近代主義的な発展を克服する可能性をも内包していた「敗戦を契機とする民主主義的諸改革の一環として実施された」一般教育の初心にもどって検討しなおし、その真の教養教育への改革を構想すべきであろう。

ところで、国大協の改革報告は一般教育の「形骸化」ないしは「空洞化」の要因として次の五点をあげている。すなわち、(1)新制大学発足時の諸状況、(2)施設・設備の不十分、(3)専門教育の重視と一般教育の軽視、(4)学問研究の高度化と専門分化の進行、(5)大学教育の大衆化、である。そのうち、(1)と(5)をのぞいては大学の努力と教育行政の誠意ある協力がえられれば改善の見通しのつくことである。とはいえ、専門学部では学生三人に教員一人平均といわれるのに、教養教育では教員一人にたいして学生二〇人さらに私学では数百人におよぶマスプロ教育がおしつけられ、研究条件が専門学部よりかなり悪いという状況は、一般教育を「専門総合教育としての教養教育」へと改編するためには、抜本的に改善し、むしろ教養教育の方を優遇する必要があるとさえいえる問題である。

このような抜本的な条件の改善は、教養教育にたいする共通理解の抜本的な改善を必要としている。まず、従来の一般教育のように、専門教育への「予備的ないし準備的」な教育だと考えることをやめなければならない。だからといって、現在多くの大学で低学年次に横断的にまとめられている教養課程を、すぐ縦割り型に四年一貫制へと改編すればよいと言うのは、短絡しすぎで逆効果を生みかねない。現在の専門教育重視の態勢を観念上も研究条件においても、すなわち物心

両面においてそのままにしておいて、教養科目を四年間に「分散」させると、教養教育の「軽視」や「形骸化」がいっそう悪化しかねない。現在は、教養教育を横断的にまとめ、学生集団と対応する教師集団の責任体制を確立することで、そうした悪化を防いでいるのだから。とはいえ、この責任体制が形骸化すると学生は「通過集団」にすぎなくなる。また、教養科目には専門教育の準備的教科も存在する。それを専門基礎科目にまとめて、教養課程にいれるか、それとも専門課程へ編成替えするか、も重要な問題である。

現在の教養課程は、一般教育科目と共通基礎科目としての外国語および保健体育科目からなる。現在は混在的な一般教育を「専門総合教育としての教養教育」と「専門基礎的ないし準備的教育」とに改編し、共通基礎科目をも加えて編成しなおすとすれば、専門教育との縦割り型四年一貫制にする方がよりよいことは確かである。しかし、そうするためには、現在の教養担当教員と専門担当教員との制度的区別を廃止することが絶対に必要である。教員の側が、教養教育と専門教育の両方を原則的には（例外をのぞき、また交替制などの工夫をくわえて）担当することで、専門総合教育が実質的に準備されるのであるし、専門的総合研究（学際的研究など）が促進されることにもなるのである。

しかし、こうした制度的改革は可能性を与えるにすぎないのだから、実質問題は教養教育と呼ぶにふさわしい教育を実現することにあろう。そのためには、教養教育の目標とそれ

ドイツ観念論における「自律思想」の展開

●田村　一郎　著　A5判・348頁・四五〇〇円

ドイツ観念論を貫く〝内なる「ア・プリオリな原理」による人間の「自律性」の基礎づけ〟を「自律思想」として位置付け、その流れを考究した労作。たんなる「論理」を超えた「心根」から思想を理解すべく、社会・文化状況までも射程に入れて検討を加える。

現代科学対話

科学の方法と科学者の役割

宮原將平・岩崎允胤著　永年のコンビが巨大化した現代科学の功罪を率直に語りあう　四六判・246頁・一三〇〇円

北海道大学図書刊行会

札幌市北区北8条西8丁目 北大生協会館内
☎011(747)2308・振替 小樽3-17011

を達成するにふさわしい教育内容とその達成を媒介する教育方法とを検討しなければならない。もちろん、いかなる教養教育が実現されるかは、すくなくとも更に教育の場の相互作用の相互主体である学生と教師のそれぞれの状態や、教育に多様な媒介的影響を及ぼす社会的条件によって大きく左右されることであるから、これらの問題についても教育学的・心理学的・教育社会学的その他の検討を必要とするであろう。しかも、こうした相互主体や媒介条件の在り方によって、教育効果は教育目標より多様な・逆転をも含む広般な現れ方をするし、それがどう意識されるかはさらに媒介された現象として検討されなければならない。だが、この論文ではそれらの問題については必要に応じて指摘するにとどめ、主として教養教育の目標、教育内容、その方法についての思想問題的検討を行うことで、今日各方面から強く要望されている教養教育改革の基本方針を求めることに重点をおこう。とりわけ、臨教審をはじめ多方面からだされている教養改革論議には、無理解や不当な要求や攻撃までが見られるし、善意であっても結果的には教養を専門に従属させることになりかねない議論もあり、それらを正すためにも教養教育についての基本的了解を確立する必要がある。しかもその改革に直面している大学の現場では、具体的対策に追われて根本問題の検討があんがい論議されにくい。さらに改革の具体案や対策は各大学の具体的な相違によって、かなり違ったものにならざるをえないし、すでに名古屋大学・東北大学・神戸大学などの調査報告や検討された構想の具体案まで幾つか発表されているので、それらを検討して、それらの大学の集団的了解から学ぶほうがより重要であろう。

(3)

まず教養教育の目標について考察してみると、既に述べたところから推定できるように、ほぼ次の三つの類型に分けられよう。(1)支配階級たるにふさわしい教養的人格の陶冶、(2)民主的社会の担い手たるにふさわしい学術的教養を身に付けた市民性の育成、(3)国際的な高度産業社会の中核たるにふさわしい科学技術的・国際的教養を総合的に授けられた総合的知能の形成の三類型で、(1)は、戦前の大日本帝国の旧制高校での liberal arts 教育に代表されるし、(2)が戦後の民主化教育における教養部での general education で意図されたものであるのに対して、(3)は高度経済成長後の今日、(国家と企業の)

国際競争力の育成要求を大学教育にも貫徹しようとする臨時教育審議会などでの議論の主な方向を推定したものである。

さらに教養教育の形骸化した形態を、つぎの二類型で示すことができよう。すなわち、(4)専門教育のための準備教育や補完教育を担当する予科教育型、(5)学術的教養の一般的教育を担当する文化講習会（または教習所）型である。教養教育の目標についての公共的了解が少なくとも各大学全体で確立されていない場合には、こうした堕落が起こりがちである。また(1)、(2)、(3)の目標が競い合って対立している場合にもこうなりがちである。

そうだとすれば、(1)・(2)・(3)の諸目標を統合した目標設定ができないだろうか。しかし、それが困難であるのは各目標がそれぞれ異なった社会構造の動向に規定されているからであり、これらの三目標の統合を考えるためには、社会の構造的変化のいっそうの展望を確立しなければならないからである。この論文の課題が「現代における」と規定されている所以であろう。しかし、社会的変化の展望を設定するというのはイデオロギー的なものを含まざるをえない。少なくとも、帝国主義的発展か社会主義的変革かといった対立的展望の問題がでてくるが、公共的な教養教育の目標設定にそうした対立を直接持ち込むべきではないから、この対立項の両者にも共通しうる第三の展望を設定しなければならない。目下のところ、公共的に想定できるのは日本国憲法に示されている民主的平和的発展の展望以外にはなかろう。そうだとすれば、教養教育についての三目標のうち(2)の目標に、(1)と(3)の二目標をいかに統合できるかという問題がでてこよう。もし、その統合ができないとすれば、少なくとも公共的なものとしては教養教育は成立し難くなり、各大学の自主性にゆだねるか、教員の個人もしくは集団的意思にまかせるか、廃止するしかない。研究・教育の自由を抽象的に解すれば、それでもいいと言えるかもしれないが、それでは教養教育の目標を論じたり、その効果を評したりすることさえ無意味となり、教養教育は形骸化し、廃止に追込まれよう。今日の教養教育についての議論の底流には、こうした動向のあることは否めない事実である。

教養教育の形骸化の動向をはねかえすためにも、(2)憲法に基づく目標設定に(1)と(3)の目標を統合するにはどう考えればよいのか。その手掛かりとなるのは最初に引用しておいた発足時のgeneral educationの規定である。「民主的社会の担い手としてふさわしい高度な市民性を育成する」という目標の

「高度な市民性」とは何かということである。この「高度な」は当初においては、高度な民主的教養（社会性）を意味したであろうが、それに高度な科学技術的・国際的教養を統合し、かつ「市民性の育成」に国民的主権者たるにふさわしい人格の形成を合体させて目標を構想するということは可能であろう。すなわち教養教育の統合された目標は「高度な科学技術的・国際的教養を身に付けた民主的主権者たるにふさわしい人格の育成」ということになろう。

この目標を達成するにふさわしい教養課程のカリキュラム構造を想定してみれば、概略的には、自然科学・技術的科目群と国際理解・文化交流的科目群とが、民主的人格形成をめざす社会科学・人文学的科目群と有機的に統合されるような構造が望ましいであろう。それは、これまでの一般教育の三分野（自然・人文・社会）構成の諸科目のように、「均等・分散」的で「並列・選択」方式の履修構造のまま放置されてはならない。もちろん、いかなる科目をどのように有機的に構造化して実施するかは、各大学の専門課程の種類や在り方、さらに教養課程を担当する教員の構成と所属（教養部を構成しているか、専門学部に所属するか、単一か複数学部に分属かetc.）などによって、多様な具体化がありえよう。しかし、民主的人格形成という目標において有機的に統合するために必要だと思われる要点を二、三あげておこう。

その一つは、民主的社会理解とその実践的担い手たる主権者的人格形成の観点から問題にすべきだと思われる主題（世界史的または現代社会的または文化批判的な諸主題など）による教養総合科目を組織することの重要性であり、その実例を千葉大学等の貴重な実践から学ぶことができることである。その二は、討論型の授業形態の増加と授業の可能なかぎりの少人数化、さらに人格的交流を可能にする少人数の教養セミナー等の全体的設営などによって、教養教育における人格形成的教化力を強める必要性である。その三は、それぞれの科目は、教養課程における各科目の有機的な関連の全体を絶えず意識しながら教授されねばならぬということと、教員におけるその理解を促進するためのカリキュラム検討会や共同研究会や総合科目担当者会議などの有効性についてである。その四は、情報・言語などの能力の育成を担当するコンピューター実習や外国語演習、さらには日本語演習などの科目は、共通基礎科目とでも位置付け、低学年次に集約的に実施し、さらに専門課程でも持続的に活用され・向上させられるようにカリキュラムが組織されることが望ましいということである。

なお、これらの実習的科目の時間当たりの単位が講義科目の半分といった制度は、実態にあわないので改正されるべきであろう。

さらに大学教育は、教養教育だけで成立しているのではなく専門教育との複合態としてあり、さらに大学院教育とも関連する。したがって、まず専門教育との関連において教養教育の在り方とその内容を考えなければならない。ここでも二、三の要点を指摘するだけにとどめるが、まず第一に教養の科学・技術的科目群には、専門教育の広般な土台となる基礎科学的科目（狭義の専門基礎科目とは異なる）がかなりの部分を占め、教養的科目と明確に区別されて組織されることが必要となる。第二に、専門教育の概論的・入門的科目を低学年次に実施することの有効性についてである。それが教養科目として実施されるか、教養課程へクサビ型に導入される専門科目として実施されるかは事情によることであるが、専門科目の教養科目的導入となることがのぞましい。第三に、専門教育と教養教育のどちらかが他を従属化するのではなく、相互批判を介しながら、専門職業のための高度な専門科学的能力を習得した民主的社会人の育成という総合的目標の達成をめざす相互協力体制の確立の重要性ということである。

大学院との関連についても検討する必要があるが、ここでは検討課題を二点だけ指摘するにとどめたい。一つは、研究を専門職業にするための高度な専門科目の教育と教養教育との関連はいかに、言い換えれば「専門バカ」にならないために有効な教養教育はいかにといった問題である。次は、教養科目担当教員が大学院を兼担したり、大学院生に教養科目のチューターを担当させるなどして、研究と教育とりわけ教養教育との相互媒介を工夫するという問題である。一般的に言って、最新の研究成果が具体化されて教養教育（の内容など）に取り入れられ、また典型的な研究過程がかなり具体的に示されたりすることは、教養教育の向上に資するところ大であろうが、かなりの熟練が必要とされる。

概して言えば、学問伝授を基本とする専門教育に比して、教養教育は学問内容を人格化し・生活化し・社会化し・歴史化するとともに、問題提起型に具体化したり・総合化したりして教授する必要度が高いので、その授業の工夫や熟練が強く求められる。そのために専門教育よりも成熟した教員が必要であるとか、専門教育の豊かな経験のある教員が教養教育を担当するのが望ましいなどと言われることがある。しかし、現行の大学の制度や設置基準など更に教育行政も、むしろ逆

の見地に立っており、教養教育の教員を軽視していると言わざるを得ない。まことに教養教育の改革が求められる所以がここにもある。専門職業のための学問伝授のほうが、社会的人格形成のための学問教養よりも重視されている現状の社会的要因の批判的検討も必要である。

「大学における」という特集の総枠から「現代における教養とはなにか」という論題を「大学における教養教育」という狭い問題に絞り込んでしまった。しかし、視野を多少とも拡大すれば、現代における教養が教養教育だけで与えられているわけではなく、国立大学協会の報告でも指摘されているように、大学教育全体で現代的教養を与えようとしているのであるし、特に専門教育は現代の科学的教養の根幹を養成しようとしているとも言えよう。更に、クラブ活動・社会奉仕・アルバイト・旅行・家庭生活・交友関係・マスコミ情報など生活の全体を通じて、教養は与えられているのだ。もっとも、教養教育は現代的教養を意識的に与えようとしているので、その典型的な在り方を探る手掛かりにはなるし、これまでの検討はその役割を果たしたと言えよう。そこで最後に、「大学における」という枠をこえて「現代における教養とはなにか」の根幹に探りをいれてみよう。そのことがまた逆に「大学における教養教育」の問題に根本的な光を反射することにもなろうから。

(4)

「教養」についての語義的・文献学的詮索は周知のこととして、その社会的在り方としての「文化」にも共通する内実として「事象の人間化」もしくは「人間的存在様態の形成」をあげることができよう。そして人間化とか人間的形成とかを、人間性の発現・対象化を通じての人間性の開発のことであり、人間性とは人間的存在・人間的事象を成立させる能力や性質の総体のことであるとすれば、人間はその生活での人間性の発現・対象化を通じて人間的事象世界（文化世界）を環境として形成すると同時に、その世界で相互交流的に生活している各個人の人間性を個性的に開発することになる。この個性的に開発された人間性とその発現・対象化を「教養」とよび、それが社会的人間関係によって媒介されて社会的形成態になったのが「文化」であると言えよう。マルクスの「フォイエルバッハ・テーゼ第六」の「その現実性においては、それ（人間性）は社会的諸関係の総体である」という知

見をも参照すれば、教養とは社会的諸関係に媒介された人間性の個性的開発であり、文化の個性的習得であると言えよう。

教養を人格の形成というときの人格とは、人間性の個性的統合の主体たることであり、社会的諸関係によって媒介されながらも自己統合ができることで、それは自由の主体でもある。社会的諸関係は経済的社会構成を土台とする矛盾的重層構造態であり、さらにそれを骨格とする動的な人間社会集団の多重交流から成ると言えるが、その多重交流の結節点として絶えず自己統合しなおしながら各人は生活しているのである。経済的社会構成と絡み合っている多重交流の結節点としての各人の社会的分業がその専門職業であるとすれば、各人の専門職業の在り方は社会的多重交流における人格的統合の在り方に多大の影響を与えるにちがいない。この専門職業における科学・技術的能力の育成を目標にしているのが専門教育である。この専門職業の主体であると同時に、より広般な社会的多重交流における主体でもある各人が人間性の発現・対象化の多重交流を通じて人格的統合力を発展させるとき、そこに教養が成立するのであり、それを促進するのが教養教育である。この自己統合力の発展は、人間性を構成する多様な能力や性質の総合的発展によって媒介されている。したがって、教養による人格的統合力の発展（主体形成とも言われる）は、人間性を構成するいかなる能力や性質の発展によって媒介されるかが問題になる。

第一に、高橋徹が「現代アメリカ知識人論」（新泉社）で「知性（intellect）」と「知能（intelligence）」とを区別せよと次のように論じているのが注目される。すなわち氏は、「批判・創造・鑑照などをこととする精神の側面」である知性によって生きるばかりでなく、その知性が開示する理念世界のために生きる人間を「知識人」とよぶのにたいして、「把握・操作・再調整・整除などをこととする精神の側面」である知能の人は知性に寄生する「精神の技術者や専門家」にすぎない、と言う。この意味での「知性」について、千葉敦子は「いのちの手紙」（筑摩書房）で「知性にはいろいろな働きがあるが、最も重要なものは、会ったこともない人々の痛みをわが痛みと感じ、見ず知らずの人々の喜びをわが喜びと感じることのできる能力だと私は思っている」と書いている。彼女はまた「私自身は、高等教育を受けた人間であり、もし私が見知らぬ人間の痛みを自らのものとして受け止められないのなら、私は受けた教育の価値に値しない人間であることになるだろう」とも書いている。このような人間的普遍

性をもつ「知性」こそドイツ古典哲学で「理性」とよばれた精神能力につうじ、日本で「知恵」とよばれたものにつうずるのではないか。こうした人間的普遍性に貫かれた教養こそヒューマニズムの原点であり、しかも現代の教養にもっとも求められている根本精神であろう。

第二に、現代の教養は歴史の真実を学び活かす精神力たる歴史的理性の教養でなければならない。「過去に目を閉ざすものは、現在にも盲目となってしまう」とヴァイッゼッカーは語り、「過去を振り返ることは将来に対する責任をにないことです」とヨハネ・パウロ二世は訪日した一九八一年の広島で語っている。それをうけて真下信一は「ヨハネ・パウロ二世も広島で言われたように（戦争は人間のしわざであり、そうである限り人間の力で押し留めることができる）という教訓もそこから引き出せます」と指摘している。古在由重との対談で、上田耕一郎は「そういうこと（広島のすぐそばの岩国に米核部隊の基地が設営されていること）に協力しているような日本の政治の異常さに対する怒りを燃え立たせる意味でも、歴史にまなぶということが大事でしょう。……そういう政治に対する批判、歴史から学ぶこと、新しい歴史をどう作っていくかという点では、草の根の運動の中での知識人の果たす役割というのは非常に大事です」と語っている。

第三に、現代は「西側陣営」などといった偏頗な国際性ではなく、文字通り全世界的な視野にたつ普遍的理性の教養が求められている。それは何事でも一般的一面的にしか理解できない抽象的理性（じつは悟性）ではなく、全体を多様の総合として具体的に把握する真の理性である。「理性は人間的な総合的な価値判断の力のことです」と言う真下信一にとって、「人類史の理想は世界のどの国もが狭い意味での国家主義を越え、人種や民族の違いを超えて人間が連帯していくところにある」。それを展望し、それを実現しようとする「思想の力」、それが理性なのである。そして「これまで日本の為政者は理性教育の振興を語ったことは一度もありません。……（しかも）…没理性の教育ほど恐ろしいものはありません。それはファシズムの温床ともいえるでしょう」と警告する。

第四に、現代の求める教養は理性にもとづく徹底した批判力（批判的理性）の育成である。それは、抽象的一般的形式的な反対に固執することではなく、矛盾を分析してそこから問題設定を行い、その解決の展望を拓く積極的総合的な弁証法的理性のことであり、問題解決の展望の実現にも責任をおう

とする実践的理性でもある。歴史的理性は徹底した批判性を帯びなければ、歴史の真実を露呈させることはできない。また無責任な教養などというのは、人格（主体）形成としての教養ではありえない。したがって、教養において個性的な多様な観点は成立するが、没主体的な相対主義的没価値論は成立しない。それは、教養のニヒリズムに陥るからだ。

第五に、現代の教養は、客観的な科学的認識と主体的な価値観との真の統合を成就するものでなければならない。それは現代の広般な科学的知識を体系的に把握しなければならないが、その知識を方法的に応用することを主な任務とする技術的知能に留まらないで、主権者としての批判的で主体的な知恵（理性）に高まるためには、理想目的（価値観）との問題解決的緊張と実践的実現（意欲）による媒介的統一という動的な総合態（これを真の統合と呼ぶ）を形成できなければならない。価値観の方は、社会的生活体験や文芸をはじめとする高度な文化的経験を通じて陶冶され、客観的事実認識との間にそれまでより一層深刻な緊張を生みだす。この緊張が人間存在を活性化させ（活かし）、活動させ、「生きがい」を成立させるのである。

以上で概説したような「現代の教養」を「大学において」いかに教育し、いかに実現するかは、各大学の集団的討議を通じ、創意を結集した総意で構想するしかあるまい。そうした各大学の努力の結晶とも言うべき各種の改革構想を根本的に検討する必要がある。同じ意図でも、異なった条件では、かなり違った構想案になるからだ。また、諸科学の総合によってこそ現代の教養教育が達成されるとして、教養教育の第三類型への改革の先頭を切った広島大学の総合科学部の成果を検討することも必要であろう。さらに、日本福祉大学の基礎ゼミの長年にわたる実施の成果や、千葉大学で広般に開講されている総合科目の実態と成果等を検討することで、学ばれることも大きかろう。神戸大学の改革構想で打ち出された教養課程におけるコア・カリキュラム方式、その先駆者ともいうべきハーバード大学の教養教育におけるコア・カリキュラムの実績等、まだまだ検討すべき事項は多い。しかし、それらの検討は専門的な分析評価を必要とすることで、与えられた論題「現代における教養とはなにか」からはみ出してしまう。自分としては、この論題をまさに現代教養風に論じたつもりであるが、散漫な一般論に陥っていなければ幸いである。

（まつい　まさき　岐阜大学・哲学）

学問と政治

――権力との関係を中心として――

北村　実

はじめに

オランダ紙の特派員として長年在日しているK・G・v・ウォルフレン氏の「なぜ日本の知識人はひたすら権力に追従するのか」（『中央公論』一九八九年一月号）が、あちこちで大分話題になったようだ。各紙の論壇時評でも、大きく取り上げられていた。致命的な事実の誤認とそれなりの正論との混じりあったこの論文がこれほど評判になったのは、おそらくそこに一部の体制派の学者・評論家には耳の痛い批判が含まれていたからであろう。だが、それは元来波紋を投じるほどのものではない。というのは、この批判に該当するのは日本の知識人の少数部分でしかないからである。四半世紀におよぶ在日体験をもつ筆者がこの事実に気づかなかったとはとうてい信じがたいが、もしそれが嘘でないなら、みずからの接触範囲の狭さを呪うべきであろう。

とはいえ、どうやら筆者のウォルフレン氏は決して悪意の持ち主ではなさそうだから、氏の不明を正し、そうでない知識人が健在であることを認識してもらうために、事実誤認にもとづいてなされた日本知識人批判に対して、意義申し立て

を行う必要がありそうだ。さもなければ、事実に反する指摘を認めたことになるであろう。日本の知識人が全体として権力の走狗になりさがっていないどころか、それをいさぎよしとしない知識人のほうが圧倒的多数派であることを、この際あらためて明らかにしておきたい。それは、期せずして、編集委員会から与えられた「学問と政治」という古くて新しいテーマに対する私なりの答えともなるであろう。

1

ウォルフレン氏に「なぜ日本の知識人はひたすら権力に追従するのか」と題する知識人批判の筆を執らせたそもそもの動機は、日本の学者や文化人のなかには真の知識人が見当たらないという氏の認識にあるようだ。氏はこれを慨嘆してやまない。氏の知識人批判は、次のような激烈な文章で始っている。「日本には、知識人がいちばん必要とされるときに、知識人らしく振る舞う知識人がまことに少ないようである。これは痛ましいし、危険なことである。さらに、日本国民一般にとっては悲しむべき事柄である。なぜなら、知識人の機能の一つは、彼ら庶民の利益を守ることにあるからだ」と。

ウォルフレン氏によると、「日本には沢山の学者、ジャーナリスト、ブンカジン（文化人）がいて――それと知ってか知らずか――意図的な情報をまき散らしている」が、「知識人として当然果たすべき役割を果たす知識人」はいないそうだ。一外国人特派員の下したこの判定は、自他ともに知識人をもって任じている人々の目を剝かせるに違いない。はたして日本に知識人の名に値する人材がいないかどうかについてはおおいに異論のあるところである。だが、それはひとまずおくとして、識者の名において「意図的な情報をまき散らしている」学者やジャーナリストは真の知識人の名に値しない、という氏の意見には何の異論もないどころか、むしろ賛同したい。

では、ウォルフレン氏の念頭にある「真の」知識人とはどんな要件を備えた人物でなければならないのだろうか。それについて、氏は次のようにいっている。「知識人というのは、博識である人とか、硬派ものの記事を書く人とか、大変な学識のある人とかとは違う。こうした人もおそらく知識人ではあろうが、しょせんは役人、もしくはジャーナリスト、もしくは学者でしかないかもしれない。別の言い方をすれば、これらは真実の追求、あるいは客観的な理解の追求を、金銭と

か安全保障とか相互扶助とかの追求より大切であると考えるとはかぎらない人々なのである。知的な誠実さを何よりも尊しとする姿勢こそ、知識人のきわだった特徴である。人が知識人であるがためには、独立不羈の思索家でなくてはならない。役人、ジャーナリスト、学者など、自分の頭を使って仕事をする人々も、『知識人』たりえようけれど、これらの人はしばしばこの名称に値するほど知的に誠実ではないのが普通だ」。

ウォルフレン氏の挙げる知識人の資格要求は、いずれももっともなものばかりで、とくに異論をさしはさむ余地はない。真実の追求をめざしてやまない知的誠実さが知識人に必須であることは、氏を待つまでもなく、衆目の一致するところである。氏は知識人に「独立不羈の思索家」たることを求めているが、まさしく権力から独立して、自由に思索するのでなければ、真の知識人とはいえない。権力に従属し、その代弁の役を勤める知識人は知識の所有者ではあっても、真の知識人ではない。知識人に期待されているのは、権力の隠蔽しようとする真実を暴き出し、それを国民に知らせ、国民の利益を守る役割にほかならない。「我々の自由が無用に縮小されたり、権力を保持する者がその支配下にある万人を災難に追い込んだりしないよう取り計らううえで、知識人こそ我々の持てる最大の希望である」というのが、氏の知識人に寄せる期待と希望である。

以上のようなウォルフレン氏の知識人観は、たしかに素朴で古典的ではあるが、決して不当なものではなかろう。氏の「独立不羈の思索家」はマンハイムの「自由に浮動するインテリゲンチャ」を連想させるが、しかし両者の類似は外見上のものでしかないだろう。周知のように、マイハイムはすべてのイデオロギーの「存在被拘束性」、社会的諸条件による被規定性に鋭い批判の目を向け、「イデオロギー暴露」、つまりそのイデオロギーの党派性・仮象性・虚偽性の暴露を主張するとともに、「視座構造」そのものの社会的・歴史的被規定性を自覚し、相手方だけでなく、みずからの視座をも相対化しうる立場の確立を求めた。彼はこの立場を「相関主義」と呼び、その担い手として「社会的に自由に浮動するインテリゲンチャ」、すなわち、特定の階級に属さず、諸階級の間を自由にめぐり歩き、さまざまな立場に身を置くことができ、したがってさまざまの思想や文化の調停者・総合者になりうるインテリゲンチャなるものを想定した。このインテリゲンチャなくしては、一定の見地から展望する部分的な認識を相

互に関連づけて総合的に評価することによって、その時代にもっとも妥当する認識に到達することは不可能である、とマンハイムは考えたのであった。

しかし、マンハイムの「自由に浮動するインテリゲンチャ」は夢物語に終わらざるをえない。なぜなら、階級社会に身を置きながら、諸階級の間を自由に浮動し、諸階級の思想の調停者・総合者の役割をはたしうるインテリゲンチャなるものは、現実にはおよそ存在しえないからである。だからといって、時代にもっとも妥当する認識に到達する可能性が否定されるわけではない。というのは、現実の正しい認識への到達は、特定の階級に属さず、諸階級の間を自由に浮動することによってではなく、かえって正しい認識に到達しうる視座を歴史的・社会状況によって付与されている階級なり社会集団なりの立場に立つことによってのみ可能となるからである。マンハイムの誤りは、被支配階級を正しい認識へ到達させる可能性がその社会的・歴史的規定性のゆえであることを見抜けず、超階級的なインテリゲンチャなるものを持ち出した点にあるといってよかろう。

マンハイムとは違って、ウォルフレン氏は、真の知識人は大衆の立場に立つべきだ、とはっきり主張している。「庶民の利益を守る」ことを知識人の機能の一つとみなす氏は、また知識人の役割として権力の「監視」を挙げている。「日本の政治環境を、その全側面にわたり、自立的かつ誠実に監視しているような人」が期待される真の知識人なのである。したがって、「およそ知識人たる者は絶えず国民に権力のもつ危険を思い起こさせ、権力保持者をいつも緊張させておくことを自らの職責とみなすべきである」と、氏は力説してやまない。このようなウォルフレン氏の知識人観について、とくに異論を唱える人はなかろう。というのも、それは何ら目新しいものではなく、われわれの見方とそんなに違ってはいないからである。むしろここで問題になるとしたら、一外国人特派員にこのような主張をさせるにいたった事情ないし背景のほうであろう。

なぜウォルフレン氏はこと新しく知識人論を提起したのであろうか。それは、氏の目に写った日本の知識人の姿勢が氏に疑問と憂慮を抱かせたからにほかならない。氏の見るところ、日本には真の知識人が見当たらず、権力の監視が行われていないどころか、それに代わって権力の宣伝が知識人の仕事になっている。「日本の知識人が政治の世界を監視しなければ、不幸な結果が生じる」と確信する氏には、「監視らし

い監視がないかわりに、我々には本質的に宣伝用の日本像が提示される」ことはとうてい容認しうる事態ではない。かくて、氏は、日本の知識人に仮借なき批判を浴びせ、猛省を促そうとして、筆を執るにいたったと思われる。

ウォルフレン氏の慨嘆に値するような事実は、たしかに存在する。しかし、政府の宣伝に憂き身をやつしている学者や文化人は日本の知識人のごく一部分でしかない。最初に指摘したように、この点は明らかに氏の事実誤認であって、いかに外国人であっても、真の知識人の健在に気づかないのは不明のそしりを免れない。氏の知らないところで真の知識人と呼ぶにふさわしい人々がそれぞれの視角から権力の監視に努めており、氏の期待する知識人の役割を十分とはいえないまでもそれなりに果たしている、と私は確信している。氏によれば、日本とは違って、アメリカの知識人は監視の役割を十分にはたしているそうだが、事実は正反対であるといわなくてはなるまい。共和、民主の二大保守政党しか政治的影響力をもちえないアメリカでは、権力に対する真の監視も批判も存在しない。もちろん、政権の根幹を揺るがしたウォーターゲート事件のように、ときには世論による監視が大きな力を発揮することはあったし、今後もありうるであろう。しかし、全体的には、アメリカは社会科学の「政策科学」化の発祥地であって、どこの資本主義国におけるよりも、権力と癒着した学者を輩出させている事実は否定しがたい。ウォルフレン氏の日本知識人への非難は、むしろアメリカの体制派知識人に向けたほうが的を射ているのではなかろうか。

じつはアメリカの体制派知識人のあとを追っているのが、ウォルフレン氏の非難する一部の日本の知識人たちなのである。そのもっとも典型的な顔ぶれは、「政策構想フォーラム」に参加している面々であろう。彼らは「学の独立」はもはや時代遅れの理念として斥け、政策決定に参画すべく積極的に権力の中枢に入っていったのである。彼らは、日本の大学人のなかでは、圧倒的な少数派である。また、彼らは各学会の多数意見の代弁者でないどころか、しばしば特異な少数意見の信奉者であったりする。にもかかわらず、彼らの存在はしばしばクローズアップされ、実情以上に大きく写る。日本には彼らの他には知識人がいない、とウォルフレン氏に誤解させるほどの勢いである。「宣伝者たちは強大だ。おびただしい数に上るケンキュウカイ（研究会）は、その多くが多額の資金供与を受けていて、たとえば経済問題に関する情報を収集、分析するために、表面上は超党派の努力を傾けているが、

その実、権力層の目的にかなうレポートを次々に生み出している」ことに、氏は脅威を感じている。

しかし、すでに述べたように、このような体制派の知識人は決して多数派でなく、まして知的権威をそれぞれの専門家集団のなかで獲得していない。それなのに、彼らが実力以上の影響力をおよぼしうるのは、日本のマスコミの支援の賜物にほかならない。日本の有力な新聞・テレビ・雑誌も、彼らのような体制派知識人をもっぱら重用し、体制派知識人の権威づけに貢献している。ウォルフレン氏が日本の将来を憂慮するのであれば、むしろ日本のマスコミの権力追随・権力迎合の姿勢こそ批判の俎上にのぼすべきではなかろうか。氏の批判する「権力の宣伝」に挺身する知識人なるものは、じつは日本のマスコミが培養し、育成してきたのである。

かつては「社会の木鐸」と称していた日本のジャーナリズムだが、いまや完全に牙を抜かれ、記者クラブにたむろして、政府当局の「発表」を待ち、お手盛りの「発表」をそのまま記事にして、国民に流すという情けない存在に成り下がってしまったのである。「発表ジャーナリズム」と蔑称されるほど、マスコミの現状は何とも無残としかいいようがない。ウォルフレン氏もさすがに同業者の状況には気づいているようで、日本のマスコミにも批判の刃を向け、「読者は、キシャクラブ（記者クラブ）制度なるものがあって、これが日本におけるニュースおよび情報規制の主な要因となっていることに気づくだろう。いまここでは、日本の新聞は日本の社会制度を監視するかわりに、読者から必要不可欠な情報を体系的に奪うことによって、現在進行中の出来事を不明瞭にする役割を演じている、とだけ申しあげたい」と痛烈な苦言を呈している。

この「発表ジャーナリズム」を飾るデコレーションとして色を添えるのが、まさしく体制派知識人なのである。「社会の木鐸」の役割を返上して、「客観報道」の美名のもとに、権力追随・権力迎合に甘んじるジャーナリズムにとっては、権力に対して批判的な知識人は望ましくない。彼らの必要とする知識人は、権力に適当なジャッブをかましても、絶対にアッパーカットを加える恐れのない、中道から右にかけての「穏健派」でなくてはならない。いまのジャーナリズムには、大筋では体制を擁護しつつ、体制には影響しない範囲で、批判めいたポーズをとってみせるような人種が最適なのである。日本のジャーナリズムは、それぞれ起用しては困る知識人のリストを用意して、間違ってもラジカルな体制批判を登場さ

せないように腐心している。その結果、多数の読者を擁する代表的なメディアに、まともな知識人はほとんど登場せず、知識人の風上にも置けないようなまがいものばかりが紙面をにぎわす、という奇妙な事態に立ちいたっている。これにひきかえ、真の知識人による警世の訴えは、わずかにマイナーなメディアを通じてしかなされえない。それらは、おそらくウォルフレン氏の耳目に達しなかったに違いない。だから、氏は日本には真の知識人が不在であると思い込んでしまったのだろう。

もっとも、ウォルフレン氏もマルクス主義者の存在を無視してはいない。それどころか、「日本の大学でマルクス主義が奇妙なほど強力な地位を保持している」ことを認めてはいる。しかし、氏によると、日本の「大多数のマルクス主義専門家は無害だった」という。「外見上はまことにラジカルな、既成秩序への反対」は、「実際的現実からあまりにもかけ離れており、またあまりにも形式儀礼主義的なものであったため、既成秩序には痛みらしい痛みは全く与えなかった」が、「このおかげで学者たちは、まるで自分が政治的に活発であるかのような幻想にひたることができた」。しかし、「こうした幻想への耽溺、こういう形式儀礼的な政治的反対の修辞は、既成秩序側の勢力が官僚政治の現状に真に反対する組織ならびにグループを、一つ一つ骨抜きにし、除去していくのを阻むのに何の役にもたたなかった。真正な労働運動に、教育制度に、日教組に、青法協に、総評に何が起こったか、見ればよい」というのが、氏の左翼批判である。だが、これもまた明らかな事実誤認というほかない。氏の皮相な鑑識眼では、真のマルクス主義者とそうでない者との違いすら見分けられないようである。

ウォルフレン氏の認識とは違って、マルクス主義者を筆頭に、権力に追従しない知識人はそれなりに健闘している。それが氏の耳目に触れなかったとしたら、その理由はただ一つ、真の知識人が巨大な影響力をもつマスメディアの手によって巧妙に神隠しされているからにほかならない。むしろ、これこそ日本の将来にとって憂慮すべき事態なのである。日本のジャーナリズムは戦前・戦中の権力迎合を深く反省し、戦後の再出発にあたって国民とともに歩むことを誓っていたのに、いつのまにか再び権力追従の轍を踏み出し、社会の木鐸たる使命をみずから放棄してしまった。はしなくもそのすさまじい堕落ぶりを見事に証明してみせてくれたのが、先般の天皇の発病から死去にいたる異様なキャンペーンだった。読者や

視聴者からの批判に出会って、多少の手直しを迫られるまで、戦前を思わせるような時代錯誤の報道に明け暮れたマスコミのありようは、墓穴を掘る愚挙といわなくてはなるまい。

初心を忘れ、恥を捨て、権力追従・迎合に身をやつす商業ジャーナリズムは、権力からの強制によってではなく、自己規制によって、国民の利益を擁護すべく敢然として権力に立ち向かう真の知識人の存在を国民の耳目に触れさせないように、左翼知識人を徹底的に排除してきた。その効あって、いまや国民の前に顔を出すのは無難な知識人かせいぜい二、三流の学者・評論家ばかりという惨たんたる状況に立ちいたっている。ウォルフレン氏に日本には政府の宣伝を勤める学者や文化人しかいないと誤解させたのも、むべなるかなと同情を禁じえない。それにしても、マスコミの寵児とされている体制派知識人の迎合ぶりもすさまじい。これに対する氏の批判は、個々の内容では疑問の点もあるが、決して筋違いではなかろう。

2

ウォルフレン氏の批判に対して、早速村上泰亮、舛添要一の両氏が『中央公論』三月号に反論を寄せている。舛添氏の「知的誠実さに欠けるのはどちらか」は、自己宣伝と相手のミスへのいいがかりに終始していて、これほど品位に欠けた文章も珍しい。これと比べるなら、村上氏の「移行期における知識人の役割」のほうは少なくとも品位に欠けることはない。とはいえ、内容的には、ウォルフレン氏が的はずれだと主張するのみで、有効な反論になっているとは思えない。もとより村上氏の反論に逐一かかずらわなければならない義理などまったくないが、氏の知識人観については多少意見を述べておきたい。

村上氏によれば、一元的進歩史観を信奉し、「資本主義は時代遅れの体制であり、社会主義が西洋に起源をもつ進歩の理想をより良く体現した」と考えてきた「進歩的知識人」は大学紛争を境にして没落し、七〇年代半ば以来旧来とは趣を異にした「脱進歩派」のときめく時代になったという。村上氏のいう「脱進歩派」なるものは、「議会制と市場経済に対する原理的賛成、あるいはマルクス主義に対する反対」を基本としつつ、次のような特徴をもつとされている。すなわち、「とりあえずその特徴を挙げれば、たとえば第一に、旧進歩派の一元的進歩史観に対する反動として、反西洋主義の傾向

をもつ人が少なくない。一元的進歩史観の反例となるような国内的事実（たとえば『日本的経営』）が見出されるときに、旧進歩派は有効に反論されるからである。しかしたとえば、経済学者に多くみられるように、かなりハードな西洋主義の立場をとる人も少なくない。第二に、統制的な経済運営には基本的に反対な市場自由主義者が多いが、たとえばケインズ的政策あたりまでは許容範囲と考える人は少なくない。第三には、進歩派にくらべてハト派的な要素が薄いが、人によってその根拠とするところはかなり違う。このようにして、アメリカと対比すればリベラルからコンサーバティブまでの幅をもって様々の意見が渦巻いているというのが、ここ十年程の日本の現状の適切な表現である」。

このように、村上氏のいう脱進歩派なるものは、たしかに若干の相違を含んでいて、かならずしも一枚岩とはいえないが、しかしその違いは所詮保守派の間での種差以上に出るものではない。この派に属す人々は、市場自由主義（資本主義）経済に対しては原理的に賛成の態度をとるのであるから、いずれも思想的には保守主義・自由主義者であり、党派的には自民党の路線の（全面的か部分的かは別として）支持者であるに違いない。一般に、このような人々が体制派知識人と呼ばれているのである。彼らは大局的には権力の味方であって、絶対に庶民の味方ではない。もっとも、村上氏にいわせると、現代の政治理論においては「庶民」といった「素朴な概念」はもはや使われなくなっているのだそうである。「普通選挙権の下で議会制が機能している場合には、程度の差はあっても支配者と庶民とは或る程度浸透しあい、庶民の概念は多義的となる。選挙民の多数意見を庶民と定義すれば、少数グループは庶民から排除されてしまう。少数グループの尊重を庶民という概念のなかに含めれば、少数グループ間の意見の対立が庶民という概念の使用を事実上無意味にしてしまう」と、村上氏はいう。

かりに百歩譲って「庶民」という概念のあいまいさを認めてもよいが、国民の過半数を占める年収五百万以下の勤労者の存在を否定することは不可能である。これらの人々を「庶民」と呼ばないとしたら、何と呼ぶべきだろうか。いずれにせよ、日本社会にはれっきとして階級・階層が現存しており、当事者の意識がどうあろうと、低い生活水準を余儀なくされている国民の存在は事実として認められなくてはならない。選挙に際して、これらの人々が自己の階級的利益に反する選択を行い、支配階級の政治代弁者にほかならない自民党に一

票を投じることも少なくない。だが、それはイデオロギー攻勢の作り出した錯誤の所産であって、いわば票をだまし取ったといってよい。政権政党の影響力は、本来相反する立場に立つはずの勤労者をも支持者に取り込んでしまうほど強力である。この簡単な事実を見抜けず、「普通選挙権の下で議会制が機能している場合には、程度の差はあっても支配者と庶民とは或る程度浸透しあい、庶民の概念は多義的となる」というにいたっては、呆れるほかない。生活保護で細々暮らしている老婆でも、自民党の支持者であれば、もはや庶民でなく、支配者側に浸透した、というのだろうか。論理的にはそういわざるをえないだろう。少なくとも社会科学者の看板をかかげている村上氏の口から、こんな迷論が飛び出すとは思わなかった。これでは、「庶民の利益を守る」のが知識人の役割だとするウォルフレン氏の主張も、馬の耳に念仏でしかなかろう。

「庶民」の存在を見捨てる村上氏からすれば、政府への協力も当然であって、これをもって「権力への追従」というのは適切ではない、ということになる。もっとも、村上氏も多少ためらいを感じているらしく、こう弁解している。「因みに、このような臨時審議会・研究会等への参加が権力への追従であったのか、政府への有効な影響力行使であったのか、判断は簡単には下せない。アメリカにみられるような正規の官職就任や報告書委嘱方式と比べて、日本の臨時審議会・研究会方式に様々な問題があることは確かである。だが一般的にいえば、『包括型政党（catch-all party）による一党優越（one-party dominance）』の下において、原理的対立の立場をとらない批判者の振る舞いについて明確な公式はない。各種批判への柔軟な対応によって優越政党の政権が長期に持続している場合、権力への追従か、政府への有効な影響力行使かを識別する（統計学用語でいえばidentify）ことは難しい」と。

政府や地方公共団体の設置する各種の審議会や公聴会への参加・出席がただちに権力への追従を意味しないことは、いうまでもない。問題は参加する知識人の態度にある。多くの場合、与党的な有識者しか起用されない。そもそも政権担当者が委員の人選を行う以上、都合の悪い人物が起用されなくても不思議ではない。その結果、各種の審議会に名を連ねる有識者はつねに与党的に振る舞い、間違っても野党的言動をすることはない。これらの有識者のなかにも、権力べったりではなく、多少自主的な人もときには見かけられる。しかし、

このような人でも、政府批判の声明やアピールに内心では賛同しても、「じつは政府の審議会の委員になっているから、名前を出すのはかんべんしてほしい」ということになる。審議会の委員の座を失うまいとして、本心を隠すなどとは、本末転倒以外の何物でもない。この逆転に何の疑問も抱かないような有識者がはたして知識人といえるだろうか。彼らにはウォルフレン氏の批判に返す言葉はなかろう。

このような人種と違って、村上氏は自己の政治的立場を隠そうとはしていない。村上氏の自己規定によると、自民党の「永続的優越性」の下で「原理的反対の立場をとらない批判者」というのが氏のスタンスのようだ。それは、いいかえれば、全体的には現体制を支持しつつ、部分的な批判によって、体制の改善に寄与していこう、という立場といってよい。村上氏自身も「新保守主義」という呼び名を使っているように、これは一般に「新保守主義」とか「ニュー・ライト」とか呼ばれている路線であって、この推進者は自民党内にも存在する。自民党を「包括型政党」と呼ぶのは、特定の階層に限定されないという意味と一定の範囲内での多元性を持ち合わせているという意味との両方からのようだが、村上氏はこれを評価して、自民党によると「一党優越」の下で「原理的反対」の立場をとらない、と明言する。自他ともに認めているように、村上氏は正真正銘の体制派であって、その批判なるものも自民党内でも許容可能な「体制内革新」の域を出るものでないことはいうまでもない。しかも、この「新保守主義」が中曽根流の「新国家主義」とも折り合えることも、すでに証明済である。

ここにも、事実認識と価値評価の関係というウェーバー以来の古くて新しい問題がまた顔をのぞかす。たしかに、自民党の一党優越の状況が長期にわたって持続してきたことは事実であって、それを否定する人はいない。だからといって、誰もがこの事実を肯定的に評価するとはかぎらない。ほぼ半数の国民が永続する自民党政権に対し批判ないし反対の声を上げており、すでに「黒い霧解散」（一九六六年）以降、各種選挙で自民党の支持率が五〇％を割り込んでいる。にもかかわらず、過半数を越える議席の確保に成功しているのは、不平等な選挙区制に助けられてでしかない。全国一区の比例代表制選挙が行われていたら、自民党単独政権は六〇年代の末までには姿を消していたに違いない。議会制への「原理的賛成」を強調する村上氏がこの不合理・不正義を論難しないのは、どうしてだろうか。議会制民主主義の擁護者であるなら、

民意を正しく反映しえない不公正な現行選挙制の改革を主張しないはずはない。これについてまったく言及しない村上氏の「良識」（氏はこれを強調している）は、作為的多数に道義的やましさを感じない程度のものなのだろうか。

ところで、村上氏を含む「政策構想フォーラム」のメンバーは、体制派知識人の典型といってもさしつかえなかろう。この人々は、社会科学者として、国家的・国民的ニーズに応じる社会科学の研究を標榜し、政府と社会科学者との緊密な相互関係の必要を強調するだけでなく、実際にも省庁の審議会に積極的に参加し、政策立案に参画したり、また独自に政策提言を行い、政府・与党への働きかけを行ったりしている。彼らのこのような行動の支えとなっているのは、「政策科学」としての社会科学という信念であろう。周知のように、OECDの「日本の社会科学政策に関する調査報告」（一九七六年六月）は、日本の社会科学の「欠陥」なるものを批判し、いくつかの勧告を行った。この勧告をもっとも忠実に実行に移したのが、「政策構想フォーラム」に名を連ねている人々である。だが、この勧告については、ほとんどの社会科学者が疑問を表明しており、肯定な論評は皆無に近かった。社会科学の「政策科学」化がみずからの批判的・規範的機能の放棄とその必然的帰結としての現実の無批判的追認とをもたらさずにはおかないことを予想しないような人は、少なくともまともな社会科学者のなかにはいなかったのである。

権力に迎合・追従し、権力の宣伝に身をやつすのでなく、「庶民の利益を守る」ために権力の監視にあたるのが真の知識人である、とのウォルフレン氏の主張は、素朴ではあるが、決して間違ってはいない。一外国人特派員からこのような正論を聞かされるとは、残念というほかない。このような非難に値する人物をこれ以上出さないようにするには、大学内部での相互批判が何よりも重要となってくる。そのためには、まず学のありかたをいま一度真剣に問い直すことから始めなくてはならないだろう。

（きたむら　みのる　早稲田大学・哲学・社会思想）

社会主義戦略と知識人の役割

――ラクラウの民主主義論によせて――

石井　潔

大学においてもジャーナリズムにおいても左翼的な知識人の影響力が低下してきた大きな理由は、マルクス主義者たちが政治的・イデオロギー的レベルでの闘争の意義を過小評価し、広い層の国民に向かって発せられるべき魅力的な「呼びかけ（interpellation）」[1]の「言葉」を作り上げる努力を怠ってきたことにある。中沢問題が軽薄な一知識人をめぐる喜劇とは言えないのは、彼をその一員とするニュー・アカデミズムの旗手たちが少なくともある一定の市民層の「気分」をつかんでおり、それを「政治的に」利用しようとしたのが他ならぬ体制派知識人の側であって左翼の側ではなかったという深刻な事情があるからなのだ。彼らの大学批判が実質的にはなんら建設的内容をもっていないのは明らかだが、それに対して学の実証性の軽視とか低文教政策の免罪とかいった反批判を投げ返すだけで、今日、知識人たちの言葉が多くの国民にとって聞き取りやすい「呼びかけ」とはなっていないという事実に目をつぶるならば今度の問題がもつ真の意味を見失うことになるであろう。

いわゆるネオ・マルクス主義をめぐる左翼陣営内部の論争のある種の論じ方にはこのような政治的・イデオロギー的レベルの独自の役割に対する軽視が反映しているように思われ

る。本稿では、きわめて図式的にではあるが、ネオ・マルクス主義者たちがどのような仕方で左翼の側に欠けているこのレベルの闘争の意義を強調しているのか、またそれがより広い社会主義戦略のなかでどのような政治的位置を占めているのかを、主にイギリスにおける論争を紹介しつつ論じていくことにしたい。

（1）アルチュセールは、ある特定のイデオロギーの諸個人への「呼びかけ（interpellation）」がそれら諸個人を「主体（sujet）」として構成すると主張する。例えばキリスト教的イデオロギーが「我が忠実なる僕よ！」と呼びかけることによってキリスト教的主体を絶えず作り出しているように。cf., L. Althusser, Idéologie et appareils idéologiques d'État, 1970, dans Positions, Éditions sociales, 1976, pp. 122-133.（訳書『国家とイデオロギー』福村出版、一九七五年、七〇―八四頁。）

一　「経済主義」批判――アルチュセールとレーニン――

本題に入る前に、このようなネオ・マルクス主義のいわば源流であるアルチュセールの問題意識がいったいどこにあったのかを確認しておこう。彼がその初期の著作から一貫して反歴史主義、反人間主義の立場をとり続けてきたことはよく知られている。彼が逆の意味での一面性に陥る危険を重々承知の上であえてこのような立場をとったのは（曲がった棒を元に戻すためには逆の方向に強く曲げねばならないというレーニンの言葉を彼は引いている[1]）、マルクス主義内部の「経済主義」の潮流と闘うためであった。ここで言う「経済主義」とは、最も抽象的には「経済」の領域をヘーゲルの「絶対精神」のように他のすべての次元を一義的に規定する本質とみなす立場であり、その具体的な表れは生産技術の発展と社会の発展を単純に対応させる生産力主義、資本主義的生産関係の根本的転換を実現したことをもって現存する社会主義国の現状を無批判に容認しようとする追随主義、狭い意味での資本・賃労働関係とそれに関わる政治課題における階級的利益のみを追求する労働者主義等であった。そして、このように歴史と社会をなんらかの本質の現象とみなす時、我々は必然的に生産力の発展は「常に」善であり、社会主義国は「常に」正しく、労働者は「常に」進歩的であるという情勢分析抜きのア・プリオリな認識に基づいて行動することになってしまう。

歴史をなんらかの本質（それが経済であれ人間本性であれ）が現象する場であるとみなしてはならぬというアルチュセールの反歴史主義、反人間主義の立場は、このような文脈のな

かで理解されるべきであり、彼が「経済」の次元になお決定的な役割を認めながらも情勢によっては他の諸次元（政治、イデオロギー等）が支配的で重要な役割を果たす場合もありうることを強調したのは、[2] 本質主義的で固定的な情勢認識にしばりつけられるべきではなく「具体的状況の具体的分析」からこそ出発すべきであるということが言いたかったのである。

「真のマルクス主義の伝統ではなく、〈経済主義〉（機械論）こそ、最終的に階層的な諸次元の位置をさだめ、それぞれの次元にその本質と役割を固定させ、次元相互の関連が持つ包括的な意味を限定するのである。しかも、過程の必然性というものが〈情勢に応じた〉役割の交換に存在していることを把握せず、役割と役割を演ずるものを永久に同一視するのがこの〈経済主義〉である。さらにまた、最終次元で決定的な役割をはたす矛盾を、支配的な矛盾の役割と、前もってしかも永久に同一視し、ある特定の〈側面〉（生産力、経済、実践…）を主要な役割と、ある別の〈側面〉（生産関係、政治、イデオロギー、理論…）を副次的な役割と、永久に同一にあつかうのがこの経済主義である。[3]」

このようなアルチュセールに対して、その構造主義的方法は非弁証法的であるとか非科学的であるとか決めつけるだけでは、少なくともその問題意識を誠実に受けとめた建設的批判とは言えないであろう。また政治的・イデオロギー的次元の重要性の強調は、マルクス主義の伝統からしても決して例外的なものではない。例えば、アルチュセールも高く評価してやまない『なにをなすべきか』のレーニンが繰り返し強調しているのもまさに同じことである。

レーニンはそこで、労働者階級が自らの階級的利益の実現をめざす経済闘争を「常に」中心に置くべきだと主張する「経済主義者」たちに対して、「経済的利益が決定的役割を演ずるからといって、したがって経済闘争（イコール職業的闘争）が第一義的な意義をもつという結論には決してならない」[4] と言い切り、「すべての階級の相互関係についての完全に明瞭な理解」[5] に基づく政治的意識は経済闘争の外部からしかもたらすことができず、[6] その際マルクス主義者は狭い階級的利害にとらわれることなく「全人民に対して一般民主主義的任務を説き、これを強調する義務がある」[7] と指摘している。そして、このような自らの立場に対して「イデオロギーの過大評価」とか「意識的役割の過大視」[8] とか「階級的見地をはずれ、階級矛盾をぼやかし」[9] ているとか言う人々に対して、

彼らこそ自然発生性への拝跪（はいき）（アルチュセールの用語で言えば、これこそが歴史主義である）を自ら証言しているにすぎないと主張している。このような政治的・イデオロギー的レベルの重要性の認識の上に立ってこそ、彼はためらうことなく理論闘争と知識人の独自の役割を指摘し、「革命的理論なくして革命的運動もありえない」[10]と言うことができたのである。

もっともマルクス主義者なら誰でも政治やイデオロギーが重要だということぐらい知っているのではないか、アルチュセールが言うような「経済主義者」などどこにもいないのではないか、彼はマルクス主義を戯画化し、自ら作りだしたかかしと闘っているだけなのではないか、彼が言っているのは要するにあたりまえのことにすぎないのではないかという感想をもつ人もあるかもしれない。それが果してあたりまえかどうかに結論を下すのは、アルチュセールの問題意識を極限にまで展開したイギリスのネオ・マルクス主義者ラクラウの見解とそれをめぐる論争がどのような政治的・理論的文脈でなされているかを見てからにしてほしい。

（1）L. Althusser, Soutenance d'Amiens, 1975, dans Positions, p. 147.（訳書『自己批判』福村出版、一九七八年、一二六頁。）

（2）最近の研究で、エリオットは、初期の論考において主にアルチュセールの念頭にあったのがスターリン批判以後のソ連での平和共存路線の採用と資本主義復活の傾向であったことを明らかにしている。すなわち彼が当時最も強調したかったことは、社会主義国といえども「常に」進歩的な役割をはたすとは限らず、その否定的な側面との政治的・イデオロギー的レベルでの闘争が不可欠であるということだったのである。

『マルクスのために』（一九六五）に収められた諸論文のなかで毛沢東の『矛盾論』が高く評価されているのは、中ソ論争における中国の立場をアルチュセールが基本的には支持していたことを示しており、ソ連追随路線をとっていたフランス共産党中央が彼をしばしば批判の対象とした主要な理由はそこにあったとエリオットは指摘している。cf., G. Elliott, Athusser: The Detour of Theory, Verso, 1987.

（3）L. Althusser, Pour Marx, Maspero, 1965, p. 219.（訳書『甦るマルクス』人文書院、一九六八年、Ⅱ、一二四頁。）

（4）N・レーニン、マルクス＝レーニン主義研究所訳「なにをなすべきか」『レーニン全集』第五巻、大月書店、一九七〇年、四一五頁。

（5）同書、四四〇頁。

（6）同書、四五一頁。

（7）同書、四五五頁。

（8）同書、四〇四頁。

（9）同書、四六五頁。

(10) 同書、三八九頁。

二　ラクラウの「ラディカルな民主主義」

ラクラウについては、彼の初期の主著である『マルクス主義理論における政治とイデオロギー』(一九七七)[1]が邦訳されており、またすでにいくつかの日本語による紹介もあるので詳しい説明は不要であろう。[2]彼の出発点がアルチュセールときわめて近いものであることは、訳書に収められている諸論文とりわけ「ファシズムとイデオロギー」から明らかに読みとれる。そこで彼は経済のレベルでの矛盾をイデオロギーのレベルで表現する「階級的呼びかけ」によって構成された労働者階級が担う狭い意味での階級闘争の限界を主にファシズム期を念頭に置きながら指摘し、そのような闘争は政治的・イデオロギー的レベル総体における矛盾を表現する「人民・民主主義的呼びかけ」によって構成される「人民」が権力ブロックとの間で闘う民主主義的な闘争と「接合」されることによって初めて勝利しうると述べている。[3]「経済」のレベルでの矛盾を体現する労働者階級に一定の指導的役割を認めながらも、この「経験的に観察できる社会集団」[4]のみにア・プリオリに進歩的な役割を固定化することを拒否することが彼の出発点だったのであり、この点では彼とアルチュセールそしてレーニンとの間に大きな相違はない。

しかし、彼は前著の出版後すぐに理論的立場を重要な点でかなり変えている。それを集約的に示しているのが『ヘゲモニーと社会主義戦略』(一九八五)と題されたムーフェとの共著である。[5]主な変更点は次の二点である。

(一)政治的・イデオロギー的レベルよりも「経済」のレベルの方が存在論的に優位に立つという考え方を否定し、社会はまったく同等の諸々の「言説(discourse)」(階級的言説、フェミニズム的言説、エコロジー的言説等)の「接合(articulation)」によって構成されるとしたこと。[6]これによって労働者階級は社会変革の運動における特権的な位置を完全に失うことになる。

(二)「人民」対「権力ブロック」といったそれぞれが一枚岩的に統一された二つの陣営の対立という形をとる「人民的闘争(popular struggles)」は特殊な局面においてしか成立せず、闘争の主要な形態は多様な政治的空間における部分的対立を主要な争点とする「民主主義的闘争(democratic struggles)」となると主張したこと。[7]これによって反ファシズム統一戦線

に範をとった「人民・民主主義的呼びかけ」によって構成された「人民」を闘争主体とするという構想は放棄され、それに代わる新しい政治的方向性は「ラディカルな民主主義(radical democracy)」という用語で表されることになる。[8]

後者のような主張は前者のような形で特権的な言説を否定したことの当然の論理的帰結である。なぜならそれは労働者階級の特権を否定するのみならず、なんらかの中核的言説によって他の諸々の言説が統一される「閉じた」システムすなわち「ジャコバン的」社会の存立そのものの否定を含んでいるからである。従って社会は多様な言説の非固定的なヘゲモニー的「接合」によって成り立つ「開かれた」システムであるという観点が強調される。[9] つまり、「接合」や「統一」が必要であるのは、例えば労働者的な言説が移民的言説の権利を犠牲にすることによって自らの権利を貫き通そうとするような場合(「失業をもたらす移民は自分たちの国へ帰れ!」といったスローガンが思い浮かぶであろう)に、両者の「均衡(equivalence)」をはかることが、各言説の自律性と共に新たな形での平等の実現と抑圧の排除をめざす「ラディカルな民主主義」のための闘争の不可欠な条件となるからであって、なんらかの特定の言説によって「基礎づけられた」固定的な「接合」が求められているからではないと彼は主張するのである。[10]

逆に言えば、それぞれの政治的局面において諸々の言説の間でどのような「接合」形態を確立することによってヘゲモニーを握るべきかはア・プリオリには決定されえず、よりすぐれた「接合」のあり方(エコロジスト的接合、左翼的接合、サッチャー主義的接合等)をめぐって諸勢力が絶えずしのぎを削ることになる。確かに「ラディカルな民主主義」という言説には一定の特権的な地位が与えられており、この言説の下でのみ我々は「進歩的(progressive)」な立場に立ちうるとされてはいるが、その内容は諸言説の自律性の最大限の尊重とあらゆる抑圧の排除というきわめて抽象的ないわばメタレベルに属するものであり、それ自体としてはなんら固定的な「接合」形態をさし示すものでありえないと彼は考えているのである。

しかし、一切の特権的言説を否定するはずの彼が、なお自らの政治戦略を単に民主主義戦略と呼ぶのに満足せず「社会主義戦略」と呼ぶのはなぜか。それは彼が依然として反資本主義的言説を「ラディカルな民主主義」の不可欠の一部とみなしているからである。ただしそれは資本主義的生産関係が終わりをつげることとラディカルな民主主義の実現とが同じ

であるということを意味するものではない。社会を開かれた抑圧のないシステムとして機能させるためには資本主義的生産関係に手を加えるだけでは不十分であり、その他の諸言説レベル（本稿の論点に引きつけて言えば政治的・イデオロギー的レベル）においてラディカルな民主主義が貫かれていなければならないと彼は主張する。

「もちろん、ラディカルな民主主義をめざすあらゆる企ては社会主義的次元を含んでいる。なぜなら多くの従属関係の根底にある資本主義的生産関係を廃棄することが必要だからである。しかし社会主義はラディカルな民主主義の構成要素の〈一部〉なのであってその逆ではない。」(11)

すなわち彼にとって社会主義的言説は他の言説をその下に従える特権的な地位を占めるものではもはやありえないのであり、それはラディカルな民主主義をめざす社会運動のなかで労働運動に特権的な地位を与えることが拒否されたことと完全に対応しているのである。

（1）E・ラクラウ、横越英一他訳『資本主義・ファシズム・ポピュリズム』、柘植書房、一九八五年。（E. Laclau, Politics and Ideologie in Marxist Theory, NLB, 1977.）

（2）B・ジェソップ、田口富久治他訳『資本主義国家』、御茶の水書房、一九八三年、二三三―二四八頁。（B. Jessop, Capitalist State, Martin Robertson, 1982.）北村実「ラクラウの政治戦略」『科学と思想』No.70、一九八八年一〇月、所収など参照。

（3）ラクラウ、前掲訳書、一〇一―一一〇頁。

（4）同書、一六一頁。

（5）E. Laclau/C. Mouffe, Hegemony and Socialist Strategy, Verso, 1985.

なお、以下の論述では便宜上、両者の共著についてもラクラウの名のみを記し、ムーフェの名は省略する。

（6）ibid., p.65.

（7）ibid., p.137.

（8）ibid., p.167.

より正確に言えば「ラディカルで複数主義的な（plural）民主主義」という用語が使われている。

（9）ibid., p.2, P.95.

（10）ibid., pp.181-193.

（11）ibid., p.178.

三　ポスト・マルクス主義か脱マルクス主義か

『ヘゲモニーと社会主義戦略』におけるラクラウの主張が、アルチュセールやレーニンにも見られた政治的・イデオロギー的次元の重視という観点を極限にまで拡大することによっ

て、労働者階級を中核とする社会主義革命というマルクス主義の基本図式そのものを根本的に転換することをめざしているのは明かである。それが、マルクス主義を新たな時代に適応する方向に発展させた「ポスト・マルクス主義」であるのか、あるいはマルクス主義とは縁もゆかりもない「脱マルクス主義」にすぎないのかをめぐって活発な論争が繰り広げられるのは当然である。

イギリス国内においてもラクラウに対して多くの批判がよせられた。そのなかでもウッドによる批判はこのような論争の理論的・政治的文脈をきわめて明確に示しているという点で重要である。彼女の著書が一九八四年から五年にかけて炭鉱労組委員長スカーギルによって指導された炭鉱ストライキに対する全面的な支持に始まりそれで終わっていることは象徴的である。彼女は、政治的・イデオロギー的次元の重視は結局経済の次元での資本主義的搾取を軽視し階級闘争の意義を否定することにつながり、議会における無原則な多数派獲得をめざすブルジョア民主主義や知識人中心主義を生み出すことにしかならないと主張する。そしてラクラウ、ムーフェ、ハースト、ヒンデスらに代表されるこのような潮流と、それに紙面を提供しているイギリス共産党の理論誌『マルクシズム・ツデイ』は、マルクスが「真正」社会主義と呼んだ階級的対立の存在を否定し真理一般、人間一般の要求の実現こそが社会主義であるとみなす哲学者たちの社会主義の現代版すなわち「新しい真正社会主義（new true socialism ＝ NTS）」に他ならないとする。[1] ラクラウは先進資本主義国における自由民主主義的な政治体制が反資本主義的な潮流の存在をも許容することをもってそれが階級闘争を超越するものであると誤認しているからこそ「ラディカルな民主主義」に展望を見出しているのであり、そのような潮流が存在しえているのはまさに日々階級闘争が闘われているからであるということを見ていないというわけである。[2]

従って彼女は、労働者階級はエコロジストが提起しているような自らの狭い階級的利益を越えた価値にも注意を払うべきであるという主張をある程度は受け入れながらも、平和運動や環境保護運動は現存の社会秩序から切り離された平和一般、自然一般をしか念頭に置いていないという本質的限界をもっており、それらは労働運動と結びつくことがなければマージナルな役割しかはたすことはできないと主張する。様々な新しい社会運動に労働運動と同等の地位を与えようとするラクラウ的な試みは明確に否定される。[3] そして彼女は、炭鉱

ストライキに代表される組織された労働者の闘いが常に社会主義戦略の中心に置かれるべきであることを強調し、スカーギルの指導に対する階級的利害を越えた国民的「呼びかけ」[4]の言葉を欠く孤立主義というＮＴＳの理論家の批判を断固として拒絶する。むしろ現実はＮＴＳの理論家たちが思い描いているイメージとはまったく逆であり、労働党の政治的敗北は、社会主義や階級利害にこだわったことによるのではなく、より広い層に訴える戦略をとって従来の支持層である労働者[5]階級を裏切ったことによるのだと彼女は言うのである。

ウッドとラクラウの立場の違いが最も集約的に表れるのは、サッチャー主義的な新右翼の潮流をどう見るかという点においてである。ラクラウは、サッチャー主義が大きな国家による官僚的支配からの自由というイデオロギーを最大限に利用して国民的な支持をとりつけようとしているという側面をきわめて重視し、伝統的な左翼が社会主義的平等というイデオロギーに固執し、高度な資本主義の下での自律化、差異化の欲求の発達という事態に鈍感であったという認識に立つ。[6]彼が「ジャコバン的」政治の限界と各言説の自律性を強調するのは、合理的な社会設計という社会工学的発想に対するハイエクやノジックらの新右翼の理論家の自由主義的批判を抑圧への抵抗という論点を介して社会主義的平等の理念と結びつけることが、左翼の側からの説得的な国民的呼びかけを作り出す上での不可欠の前提だと考えているからなのである。[7]

これに対してウッドは、サッチャー主義のイデオロギー攻勢を重視するこのような見解を一笑に付す。「社会主義者が、労働者に対して仕掛けられている階級戦という現実的な実践よりも、いわゆる〈権威主義的ポピュリズム〉なるサッチャー主義のイデオロギー的装いの方に頭を奪われなければならない理由がどこにあるのか。[8]」支配階級が真に恐れているのは、イデオロギー戦などではなく現実的な労働運動なのであり、だからこそサッチャーは国家の力を総動員して炭鉱ストライキを挫折させようとしているのだと彼女は言い切る。[9]

以上のようなウッドの批判は、ラクラウの主張を「ポスト・マルクス主義」と見るか「脱マルクス主義」と見るかという論争が、あくまで経済のレベルに特権的な地位を認め組織された労働運動を中核とする社会運動に展望を見出すのか、あるいは政治的・イデオロギー的レベルでの統合と組織化という契機を重視し広い層の国民への説得的な呼びかけの「言葉」を作り出すことに決定的な意義を認めるのかという対立を反映していることを示している。

(1) E. M. Wood. The Retreat from Class, Verso, 1986, pp.1-4. 同様の立場からのハーストに対する批判としては G. Elliott, The Odyssey of Paul Hirst, in New Left Review (NLR), 159, Sep./Oct., 1986. がある。
(2) ibid., p.153.
(3) ibid., pp.167-179.
(4) ibid., p.181.
(5) ibid, p.192.
(6) Laclau/Mouffe, op.cit., p.164.
(7) ibid.,pp. 171-5.
(8) Wood, op.cit., p.9.
S・ホールは、ラクラウのポピュリズムという用語を借りてサッチャー主義のイデオロギーを「権威主義的ポピュリズム」と呼んでいる。加藤哲郎『国家論のルネサンス』、青木書店、一九八六年、一二七―一三八頁参照。
(9) ibid., p.182.

四　政治・イデオロギー・経済

このような見方に対しては次のような反論が予想される。すなわち経済のレベルと政治・イデオロギーのレベルを機械的に切り離すこと自体が誤りであり、両者を不可分のものと考えるところにこそマルクス主義の核心があるのではないかという反論である。事実マルクス主義者が政治組織としての社会主義政党を通じて労働運動と政治的・イデオロギー的レベルの闘争を「結びつける」ことに心を砕いてきたことはまちがいない。先に触れたレーニンのテキストもまたまさにこの経済と政治・イデオロギーの「結合」という政治組織独自の機能の重要性を指摘したものであった。最近『ニュー・レフト・レビュー』誌上で繰り広げられたジェラスとラクラウ＝ムーフェの論争の理論的焦点もここにある。

ジェラスは経済のレベルないし労働者階級に特権的な地位を認めるのかそれとも経済と政治・イデオロギーないし労働運動と新しい社会運動はすべて同等の価値をもつ諸言説であることをみとめるのかという二者択一そのものを拒絶する。経済のレベルにおける階級対立が決定的な役割を果たすことを認めることと、政治・イデオロギーのレベルでの多様な対立をすべてそこに還元することとはまったく別のことであり、前者を肯定しながら後者における多様性を承認することは完全に可能であると彼は言う。逆に政治的・イデオロギー的レベルでの対立の多様性のみを強調し、階級対立のような決定的要因を一切認めないなら、そもそもラクラウが好んで使う

「進歩的」という言葉は意味をなさないはずであり、ありとあらゆる政治的立場が無差別に肯定されるしかないというわけである。[1]

このような批判に対してラクラウ＝ムーフェは次のように答える。自分たちはなんらかの特権的な言説が存在していることを否定しているだけであり、どのような政治的立場でも肯定しうると言っているわけではない。経済のレベルでの諸矛盾が政治的選択を制限する場合も当然ある。しかし、ジェラスが考えているような意味である特定の政治的立場の正しさが絶対的な確実性をもって「基礎づけられる」ということはありえない。ただ、それぞれの政治的局面における立場の相対的な進歩性を示すことができるだけである。経済のレベルに特権的な地位を与えることと政治・イデオロギーのレベルにおける多様な対立を認めることとは両立するというジェラスの主張は言葉だけのものになっている。例えばジェラスは「社会主義が民主主義的なものでなければならないのは自明のこと」であり、マルクス、トロツキー、ルクセンブルグ、レーニンらは常にこのことを強調してきたと言うが、階級還元主義（ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義）に陥ることなく階級理論と政治的民主主義を結合することはいかにして可能なのかを彼は理論的に示しえていないし、プラハやブタペスト、ポーランドやソ連や中国における現実は両者の関係が決して自明ではないことを証明している。従って、政治的・イデオロギー的レベルにおける闘争の意義を正しく認識するためには、経済のレベルに特権的な地位を認めることなく諸次元を「接合」することから出発するしかない。[2]

以上のような両者の論争は、問題が政治・イデオロギーと経済を切り離して考えるべきか否かというところにあるのではないということを明らかにしている。重要なことは、経済のレベルに特権的な地位を与えたままで両者を結合しようとすれば、必然的に政治的・イデオロギー的なレベルでの闘争を軽視することにならざるをえないという事実をマルクス主義者としてどう受けとめるかということなのである。ウッドもまた政治を経済から切り離して形式的に取り扱う傾向を厳しく批判しているが、[3]その彼女がイデオロギー闘争の極端な軽視に陥っているのは決して偶然とは言えない。サッチャー主義とのイデオロギー闘争の重要性を確信するラクラウが諸言説の「接合」理論を主張せざるをえない客観的な根拠は十分あるのだ。[4]

ラクラウの立論の欠陥は、経済のレベルから特権的な地位

を奪った点にあるのではなく、むしろ政治・イデオロギーのレベルの重要性を強調するあまり、経済それ自体のレベルには敵対的な矛盾は存在せず、そのような矛盾は政治・イデオロギーのレベルにおいてのみ見出されるという逆の意味での特定の言説の特権化に陥っている点にある。[5] 彼がゴルツ批判を通じて新しい社会運動の労働運動に対する優位を主張するつもりはないと明確に言明しているにもかかわらず、[6] 彼に対して経済的レベルでの分析や資本主義との闘争という側面を不当に軽視しているのではないかという疑問がよせられるのもまた当然と言えよう。[7]

今まさに求められているのは、政治・イデオロギー・経済の各々のレベルにおける諸矛盾とそれに対する闘争を一切のア・プリオリな特権化を排して「接合」し、社会変革の大きな流れを作り出していくことであり、そのためにはラクラウのさし示す道をそこに潜む一定の限界を乗り越えつつ進むしかないのである。

(1) N. Geras, Post-Marxism?, in NLR, 163, May/Jun., 1987.

(2) E. Laclau/C. Mouffe, Post-Marxism without Apologies, in NLR, 166, Nov./Dec., 1987.

なお、その後ジェラスはさらに反批判を同誌上に書いているが、特に新しい論点はない。cf., N. Geras, Ex-Marxism without Substance, in NLR, 169, May/Jun., 1988.

(3) Wood, op.cit., pp.150-1.

(4) ジェラス・ラクラウ論争に基本的にはラクラウに対して批判的な立場から介入しているムッェーリスも、マルクス主義が政治を経済に還元する傾向が強いという点については彼に同意している。cf., N. Mouzelis, Marxism or Post-Marxism?, in NLR, 167, Jan./Feb., 1988, pp.117-121.

(5) Laclau/Mouffe, Hegemony and Socialist Strategy, pp.75-85. この点ではウッドの批判が正しい。cf., Wood, op. cit., pp.47-75.

(6) ibid., p.169

(7) J. J. Bloomfield, Identity Crisis/R. Blackburn, Class of 87, in Marxism Today (MT), Jul., 1987.

なお、これらは直接的には次の論文に対する反論である。E. Laclau, Class War and After, in MT, Apr., 1987. またラクラウの立論の限界をよくふまえた『ヘゲモニーと社会主義戦略』に対する書評としてはD. Forgacs, Dethroning the Working Class?, in MT, May, 1985. がある。

五　社会主義戦略の課題

ラクラウが考えているような意味での社会主義戦略は、あ

る意味ではすでに採用されつつあるとも言える。七〇年代に明確な潮流となったユーロ・コミュニズム路線は、現実にはラクラウの構想と一致する点がきわめて多い。この路線の主要な特徴であるプロレタリア独裁概念の放棄ないし相対化とそれに伴う多数者革命論は、社会変革の過程における労働者階級の特権的役割を事実上否定し、より広い層の国民が変革主体となりうることを前提としており、また社会主義の特定のモデルを否定する自主独立路線は社会主義諸国が世界革命において「常に」指導的な役割を果たすという幻想と完全に手を切るものであった。ここには明かに、経済のレベルに限定されないより広い政治的・イデオロギー的レベルにおける闘争を重視していこうという志向を見て取ることができる。ラクラウが、国際シンポジウムの場で多数者革命論に関する報告に対して熱烈な賛意を示したり、[1]最近ますますはっきりとしたユーロ・コミュニズム的立場をとりつつあるイギリス共産党の一九九〇年代の政治戦略を示す文書を積極的に評価したりしているのは、[2]彼の立場からすればごく自然なことなのである。

しかし、ユーロ・コミュニズムの現実の担い手たちが、このような「ポスト・マルクス主義」的志向を自覚的に受けとめてきたとは必ずしも言えない。依然として経済のレベルを歴史の「本質」とみなす経済主義が、例えば科学技術の進歩それ自体は「常に」善であるとする生産力主義あるいは新しい社会運動の担い手たちの内に広範に存在する「市民主義」イデオロギーに対する消極的評価という形をとって、マルクス主義者たちの間に深く根をはっていることを指摘しないわけにはいかない。[3]とりわけ後者について言えば、狭い意味での労働者中心主義から脱するためには、どのような層の国民に対してどのような「言葉」で「呼びかける」べきかを真剣に考える必要があり、そこでは「市民主義」イデオロギーを社会主義的言説といかに「接合」するかが最も重要な課題となるはずである。社会主義戦略のなかで、「市民主義」イデオロギーが、それ自体は本質的には社会主義的ではないという理由で従属的な地位に貶められるとすれば、そのような戦略は悪しき階級還元主義に基づく孤立主義に陥る他ないであろう。

後藤道夫は、最近の注目すべき論考のなかで、戦後の「市民主義」イデオロギーの展開を詳細に分析し、それが高度経済成長の下で、欲望の肥大化と能力主義的競争主義を無批判に容認する松下圭一らの「市民主義リベラル」の流れと、主

体的に自らの「生活の質」を問い、少数者や弱者との「連帯」を重視する日高六郎らの「市民主義ラジカル」の流れに分化していく過程を説得的に論証している。[4] そしてラクラウ風の表現を借りれば、後藤は後者の「市民主義ラジカル」と社会主義的言説の「接合」に社会変革の展望を見出そうとしている。社会主義戦略を構築していく上で求められているのは、まさにこのような試みなのである。

ラクラウの「ラディカルな民主主義」は、後藤ならおそらく「市民主義リベラル」に分類するであろうハイエクやノジックらの新自由主義的な主張に一面では共鳴する社会層を主な「呼びかけ」の対象としている点では、やや異なった展望の上に立っている。具体的にはヤッピーズ(young urban professionals)すなわち都市で知的職業(銀行員、弁護士、技術者等)についている若い世代のなかの良心的部分に代表されるような社会層を彼は思い描いているのである。[5] 日本に置き換えてみれば、浅田彰のスキゾ、中沢新一のフラクタル、山崎正和の柔らかい個人主義といったなんらかの一元的価値や原理からの自由を説く言説に一面では共鳴するような社会層に対して、資本主義的抑圧を含む多様な抑圧との闘いに立ち上がるように「呼びかける」ためにはどのような「言葉」が必要なのかという問題に対する一つの回答が「ラディカルな民主主義」なのである。

もちろんラクラウの回答もまた完全なものではありえない。しかし天皇制イデオロギーをめぐる論争が巻き起こっている今、「市民主義」イデオロギーのなかにある微妙な差異(例えば浅田と中沢・山崎との間の差異)に敏感に反応し、説得的な「呼びかけ」の「言葉」を作り上げていくことが、左翼的な知識人の義務であることだけはまちがいない。そしてこの義務を果たすためには、力のない紋切り型の「言葉」を繰り返すのをやめ、誤りを恐れることなくイデオロギー闘争の渦中に乗り出して行かなければならない。ラクラウは、『方法序説』に書きしるされた若きデカルトのあのさわやかな決断を自らの著書の初めに掲げている。それに耳を傾けながら、本稿を閉じることにしよう。

「森のなかで道に迷った旅人は、一ヶ所に立ち止まってはならないのはもちろん、あちこちさまよいあるいてもならない。たえず同じ方向へとまっすぐに歩くべきである。たとえ最初に彼らがそちらの方向を選ぶように仕向けたのがもしかしたら偶然であったとしても、つまらぬ理由で行き先を変えてはいけない。このようにすれば、彼はたとえ望んだ通りの

場所にはうまく行き着けないとしても、少なくともどこかにはたどりつくであろうし、それは森のなかにたたずむよりはましなのであるから。[6]」（傍点筆者）

（1）北村、前掲論文、八二頁。

（2）E. Laclau, Rejuvenating Politics, in MT, Oct., 1988.

（3）この点については、山本剛の筆名による以下の拙稿参照。「イデオロギー闘争における二つの潮流とエコロジズム」『唯物論』第五八号、東京唯研、一九八四年、所収。「技術とイデオロギー」『思想と現代』五号、白石書店、一九八六年、所収。

（4）後藤道夫「階級と市民の現在」『モダニズムとポストモダニズム』、青木書店、一九八八年、所収。

（5）現在、急速に発行部数を伸ばしつつある『マルクシズム・ツデイ』の読者層の重要な部分をヤッピーズが占めているという指摘もある。伊藤光彦「海外 Review」『エコノミスト』、毎日新聞社、一九八八年七月二六日号、所収、参照。

（6）Laclau/Mouffe, op.cit., p.2.

脱稿後、次のような興味深い座談会を目にした。本稿と共通する点も多いので、あわせて参照していただければ幸いである。C・D・ラミス他「ラディカル・デモクラシーの可能性」『世界』、岩波書店、一九八九年二月号、所収。

（いしい　きよし　静岡大学・倫理学）

〈次号予告〉1989年6月下旬刊　予価1200円

季刊 **思想と現代** 第18号

特集　現代社会とマルクス主義（仮題）

先進資本主義国日本で、マルクス主義が今日いかに対処するか、社会的・文化的・思想的に再考察する。
座談会—佐藤和夫、島田豊、吉田傑俊　**執筆予定者**—福山隆夫「物象化概念と現代社会」／松田博「市民社会と国家」／上利博規「自然と欲望」／向井俊彦「国家イデオロギー論」／中西新太郎「労働者文化」／庄司信「現代社会とハーバーマス」（タイトルは仮題）。
好評シリーズ—文化時評／もう一つの思想家像「花田清輝」／ぶっく・えんど／海外論文　他。
ご期待下さい。

唯物論研究協会編集
発売元　白石書店　千代田区神田神保町1－28 ☎03(291)－7601

＊シリーズ　現代科学からの人間像

自然科学の人間像

――霊長類生態学の立場から――

水原　洋城

〝なしくずしの進化観〟としての社会進化論

私が関わっている霊長類の生態や行動の研究分野では、霊長類という目が、その中にわれわれ人類を含んでいることもあって、他の動物学諸分野よりも一そう、研究上の論議の中で、動物と人間とのつながりについて言及する機会が多いようです。

京都大学に霊長類研究グループが誕生して以来の、四〇年に及ぶニホンザル研究史をふり返ってみても、そもそもの始まりから、当初の指導者であった今西錦司さんの発想の中に、動物―人間の連続性を強調する〝社会進化〟論がありました。今西さんの〝社会進化〟についてのアイデアは、サルの群れという集団を〝群れ社会〟と呼びそれ自体を文化的営為と考える、いわゆるカルチュア説を理論的枠組みとした社会人類学的接近態度に発しています。したがって、今西さんがそこから「動物の社会と人間の社会をつなぐ純一理論」の成立を展望していたというのも、その立場からいって、格別ふしぎではありません。

この、動物の社会と人間の社会がじかにつながっている、とごく素朴に考える、いわば〝なしくずしの進化観〟は、一九世紀後半以降近代化した生物学が、動物と人間とのフィジ

カルな連続性を確認して以来、それから派生して世界中の迂闊な生物学者の頭の中になんとなく蟠ってきた一種の観念です。だから、今西さんの「汎社会論」の立場から出たカルチュア説では、「アイデンティフィケーション説」によって特殊化されているものの、その〝社会進化〟的考え方自体は、近代生物学における機械論の侵潤にともなう動物―人間連続観の延長として至極一般的な思考パタンの中に包摂されるものと見てよいでしょう。

フィジカルな連続性を動物と人間との間に認めることの正当性は、ダーウィン以来、生物の種の進化の事実を認める者にとって、議論の余地のないことです。しかし、いわゆる〝社会進化〟論でいうような、社会構造における連続性を動物と人間との間に認める、ということになると話は別です。かりに、動物の集団の生活実体を社会と呼ぶとして、その社会の形態や機能が、独自の法則をもって進化するということは、事実をもって立証されることがないからです。

私は、かつて「〝社会進化〟とは何か」（一九七六・『別冊サイエンス・動物社会学サルからヒトへ』日本経済新聞社）の中で「もちろん霊長類のそれぞれの種が示す社会構造の中に、その種の各生活環境に対する生態学的適応形態の諸特徴を見出すとき、種の進化の過程で、社会生活というものが見過し得ぬ大きな役割を果してきたという事実を認めないわけにはいかないし、私もその事実に重大な関心を寄せるひとりである。ただしかし、社会あるいは社会構造というものを単に形態としてとらえ、それをパターン化したもののみを対象として取り扱って、その似寄りやへだたり、また部分的差異をめぐって、その系譜的遠近を臆断したりする傾向を是認する気はない。」と述べ、〝社会進化〟なる概念が霊長類の進化や人類の進化を考えるのに有効なものではない、ときめつけたことがあります。とくに、動物と人間との連続性に関する議論では、人間社会の制度上の諸関係や言語文化などの〝萌芽〟を、動物における相似の個体間諸関係や諸行動の中に、無媒介無限定に求めようとする傾向が生じやすいだけに、安易な〝社会進化〟概念の濫用は禁物だといえましょう。

自然史過程の必然と見る

動物と人間との間の連続性を考えるとき、ふつう、われわれは、それを進化史上の必然という了解のもとに考えます。生物の進化も人間社会の生成と発展も、物質の世界における

一連の自然史過程の必然として見る、という意味です。先に述べた動物と人間とのフィジカルな連続性の肯定も、事実によると同時に、この流れにのった考え方に支えられて得られた帰結です。したがって、人間と動物とは、フィジカルにも、またひいては――身体と精神とを二元論的に分けないという意味では――メンタルにもその連続性を否定できない、ということになります。ところが、ひと口に自然史的過程といっても、そこにはさまざまな節目というものがあって、変化の起り方、つまり、その規模や速度や多様さなどの程度はさまざまです。生物の出現後に、生物との相互関係によって生じた、非生物的諸環境の構成要素の変化の蓄積過程ひとつをとりあげてみても、生物の出現というその節目のもつ意味の重大さはよくわかります。

人類進化の過程における、人間社会の形成という事柄にしても、それを一連の大自然史過程の中の、かなり大きな節目のひとつ、と考えるか考えないかで、人間―動物連続観の結ぶ像は、のっぺらぼうのなしくずし的移行を示すか、それとも質的な差異を含む移行過程として現出するか、二つに分かれるでしょう。

〝なしくずし〟論者は、節目論者のことを、人間と動物との連続性そのものを否定し、その間に越えられない断絶を見る反進化論者だ、と見がちです。その主な理由は、〝なしくずし〟派の多くが、量的変化と質的変化の関係性に気づかず、弁証法的唯物論の思考に不慣れであったためと思われます。

素朴な連続観と擬人主義

ニホンザルの野外研究が始まってしばらくしたころ、『自然』（一九五六・十一月号）に掲載された伊谷純一郎さんの「人間以前の言語」と川村俊蔵さんの「人間以前のカルチュア」という二つの論文が、それぞれ今西さんのカルチュア説をふまえた、音声伝達と採食行動伝播過程に関する研究成果として話題を呼んだことがありました。それらへの研究者の反応は、賛否交々でしたが、社会科学、人文科学の分野にも波紋は及び、掲載号の次の十二月号にのった七つのコメントの著者たちのうち五人は心理学、文化人類学、社会学、文学の研究者でした。コメントの内容として、二論文の著者たちに好意的なものの多くは、動物学あるいは生態学の新分野を拓きつつある功績に対する支持でしたが、批判的なものは、すべて方法論に対する疑義でした。疑義を生ぜしめた原因は、

社会科学の基本的諸概念が、必要な吟味を経ることなく、無媒介に動物の集団のしくみに適用され説明が行なわれているところ、及び動物と人間との類同にとらわれすぎて次元を異にするような差異が把握されていない、というところにあったようです。コメントを寄せた人々の中に、桑原武夫さんの名もありました。桑原さんは、疑義ではなくむしろ賛意を示していましたが、その内容は次のとおりです。

「西洋の学者は一般に、キリスト教的思想の残映として、人間と動物とを峻別したがるが、日本人のマルクス主義者も、その傾向を脱していない。もちろん動物をしらべれば人間が解るなどとは誰もいわぬが、もし、このグループのような実証的研究のデータを取りこむことを怠り、また拒否するようなら、それは間違いであろう。マルクス主義はそんなに狭いものではなかろう。」

「もちろん」から「間違いであろう」までの部分は、いわでものことでしょうが、人間と動物を〝峻別したがる〟傾向の動機を、キリスト教的思想とマルクス主義に求めている点と、〝人間と動物とを峻別〟すると〝狭い〟、と評するところは、少々気になります。キリスト教云々はさておくとしても、マルクス主義の自然観、自然史観の哲学が、ニホンザルの芋洗い行動や優劣関係や音声伝達が少々わかったぐらいで、今まで狭かった了簡まで俄かに広くなり、その結果、味噌も糞も一視同仁になられては困ります。マルクス主義はそんなに浅いものではなかろう、と言いたくなります。考えてみると、この桑原さんのコメントにあるような、厳密と偏狭とのとり違え、方法論への批判と事実の否認との混同など、概念の規定のあいまいさがそのまま哲学の貧困につながるような気分的な論評は、その後も跡を絶たず、結果的には、論理的な批判や論争をスポイルし続けたように思います。

さて、論議の元となった伊谷さんと川村さんとの論文に戻って言えば、やはり、今西さんのカルチュア説にリードされた、当時の霊長類研究グループの〝なしくずし論者〟的考え方が、そのまま出ているといえます。人間の社会の家族形態も、地域の文化も、言語でさえも、〝カルチュア〟として、前述の、その〝萌芽〟をサルの集団の中に求め、しかも発見までしてしまっているのです。これを逆にいえば、サルにある〝カルチュア〟的な要素が、人間の社会にも、本質的に共通なものとして連続的に存在することになってしまいます。後年、デズモンド・モリスなどの動物観・人間観に現われるようになった俗流哲学と軌を一にする発想が、すでにここに

顔を出しています。

このことは、そのまま擬人主義あるいはその裏返しの擬動物主義的発想とも関わって来ます。今西さんが、意識して擬人主義を採用したとは考えられませんが、その汎社会論とカルチュア説とが、社会人類学的偏向をニホンザルの生態と行動の研究の針路にもたらした結果、擬人・擬動物主義を呼び込んだことはたしかです。その意味では、むしろ擬人類学主義というべきかも知れませんし、その本質が擬人主義と背中合わせになっている、という事実は消えません。

行動研究の欠除は観念論につながる

次に、指摘しておくべき問題点は、今西さんの汎社会論が、ニホンザルの群れを、〝群れ社会〟と呼び、集団生活の生活実体を〝社会〟と規定したことで、研究対象の焦点が、社会構造もしくは社会の諸制度やシステムに向けられ、諸行動や個体間の諸関係の具体的把握と理解が、二次的に等閑に付されるに至ったという経過です。

今西さんは、べつに行動観察を軽視しようとしたわけではありません。むしろ奨励したといってもいいでしょう。しかし、その汎社会論やカルチュア説、社会進化論に基く社会人類学的接近態度は、サルの集団の個体間関係を見るのに、社会制度や言語の崩芽や、社会的役割や分業や地位などの用語や概念を持ちこむことで、結果的には行動の研究の進展を阻んでしまったといえます。

行動観察を通じてサル類の集団の個体間関係をしらべ、その結果を、種ごとに、あるいは系統ごとに比較する、ということの窮極の目的は、生態学的にとらえた生活実体と進化の過程の関連性を考え、吟味するところにあるのですが、対象が人間とフィジカルな連続性をもつサルや類人猿であるだけに、その個体間の交渉を通じてやりとりされる行動や、相互間に生じるコミュニケイションの内容や、個体間関係の形成維持過程も、かれらの知的能力の高さと結びつけて考察されるのは、無理からぬことでしょう。ただ、大脳皮質の発達にともなう知的能力の増大といっても、それがかれらの生活実体にどのように反映しているか、何をもって進化の過程と結びつくものと考えられるか、の吟味がおろそかになっては、議論の結果は豊かになりません。一般に、知的能力の高さは、生活の内容や社会的諸関係を複雑化し、多様化すると考えられるのがふつうですが、何がどう複雑化し多様化するかの着

眼点と問題意識とが肝腎です。

いわゆる〝なしくずしの進化観〟では、そこから、直ちに〝社会構造〟の複雑化へ話が飛んでしまっていました。社会構造すなわち組織が分化発達する、社会的分業が生じる、役割りが細分化する、階級ができる、統率と服従の関係が定まる、〝意味のある〟音声や身ぶりが分化する、禁忌が発生する等々の発想は、みんなその類いでした。もちろん、これらの発想は、すべて、根拠のないたとえ話の域を出ないものです。にも関らず、他のまっとうな発想が提示されないままに、この〝なしくずし〟論は、今もあいまいな形で研究者の脳裡に〝保菌〟されているようです。

では、まっとうな発想は、どのような形で提示されるべきものでしょうか。大脳皮質の発達に根ざし、知的能力の増大にともなって複雑化し、多様化するものは何であり、どこに、どのような形で現われるのでしょうか。

まず、複雑化し多様化するものは当然、諸関係です。諸関係の形成と維持の過程が、複雑で多様な社会的場及び文脈の中で生じる個体間の諸交渉を通じて、こみ入った形で現われるのです。個々の個体の行動自体が、予め複雑な形式をもっているのではありません。行動の制御と決定の過程が、諸交渉の場と文脈に応じて多様複雑に変化するのです。知的能力の高さは、挙げてこれらの常に流動的でこみ入った諸関係、交渉の場と文脈、交渉相手、それらを認知し読みとり、識別した上で、自己の行動を制御し決定することに用いられるのだ、といって過言ではありません。そういう意味では、かれらのいわゆる〝頭のよさ〟は、相互の関り合い、すなわちコミュニケーションの内容を豊かにするのに役立っているのだ、といえますし、それは個々の行動を観察し、その意味を正しく理解することを通じて明らかにすることができるのだ、といえましょう。

残念なことに、従来の霊長類の生態や行動の研究は、そっちの方へ向かわずに、抽象的で観念的な〝社会〟や〝文化〟の解釈に終始し、行動の観察と理解とをなおざりにして来ました。その結果が、動物像とともに人間像をも、あいまいにしてしまったのです。

行動の精確な理解をなおざりにする傾向は、生物学の中での行動研究の諸分野にも、当然ながらあります。現在行なわれている生態学の分野や、エソロジーの分野でも、生理主義的リダクショニズムの立場からする研究は、神経生理学的方法や、個体群生態学と集団遺伝学との癒着的方法に収斂して行くのみで、すでに行動そのものを捨象してしまっています。

これではたとえ擬人類学的偏向などなくても、生物学の方で勝手に動物像の健全な把握の方途を失って、認識の自壊をひき起しているのだ、としかいえません。

個体性の認識の重要性

行動の理解をなおざりにしたことの他にもう一つ、霊長類の進化史的過程での知的能力の増大に並行する現象の認識上、〝なしくずし進化観〟が見落していることがあります。それは、個体性の発達という認識です。

個体性は、単なる個体差（インディヴィデュアル・ヴァリエイション）でもなければ個性（パースナリティ）でもない、その個体がそれ自身であって他の何者でもない、という主体同士の間の関係性に基くもので、しかもその明瞭度は、個々の主体間の、能力としての相互認知の確かさにしたがって変化するものでもあります。またこれは、とくに霊長類においては、いわゆる頭の良し悪しの程度にしたがっていますから、先に述べたコミュニケイションの内容の複雑多様化の程度を一次的に規定するものともいえましょう。ですから、このことを無視して〝社会構造の進化〟のみをあげつらう、〝なしくずし〟の〝社会進化〟論は不毛だ、といえるのです。

個体性の発達の問題は、またこどもの身体的発達にともなう、行動の社会的発達の問題とも関連しており、両者の統一的理解が必要だ、という意味でも重要です。個体性の発達が系統発生の過程に根拠をもつものであるのに対し、後者の方は個体発生過程の問題であって、自己同一性（アイデンティティ）確立過程に根拠をもつものであるからです。このことは同時に、系統発生的に獲得された社会性と個体発生過程に沿って展開する社会化との関係に重ね合わせることが可能です。

人間以外の霊長類の生態や行動を対象とする研究分野で、動物をしらべればしらべるほど、サルと人間両者の相対的特殊性が明らかになって来るのが本当だ、と私は考えます。もし逆に、あいまいになって行くようなら、その学問の方法論は、おそらく間違っているのです。両者を比較する場合でも、比較されるべき二者相互間の関連性を〝なしくずし〟の連続性のように心得ていては、特殊性と一般性とを統一的に把握することはできないでしょう。「自然科学の人間像」を描くにあたって、最も心すべきは、このことです。

（みずはら　ひろき　東京農工大学・動物生態学）

ドン・キホーテ症候群

太田直道

一

一人の青年がベンチに腰をかけ、大声で笑いながら夢中で本を読んでいる姿に気がついた国王が、彼は『ドン・キホーテ』を読んでいるにちがいない、といったという話がある。おそらく今日、一般の読者にとっては、『ドン・キホーテ』を読んで笑いが止まらなくなるという域に達するには予備知識があまりにも欠けすぎていよう。笑うことができるためには知っていなければならないのだ。作品のあらゆる個所、ドン・キホーテが出会うおびただしい「事件」、ドン・キホーテとサンチョが交す言葉の数々のどれもがモデルを有し、少なくとも当時は周知の事柄だったのだ。セルバンテスはそれらのことごとくをひっくり返し、あるいは尾ひれをつけて茶化し、ナンセンスなものに切り換えるという徹底したパロディ精神を貫いた。『ドン・キホーテ』そのものが騎士道物語のパロディであることはよく知られている。

しかし四百年近くもたとうという今日、この書物も苔むして、往時の燦然（さんぜん）と極彩色に輝いた物語もいささか荘重味

を帯び、一般読者のわれわれには奥ゆかしいものとなった。だからといってリアリティが薄らいだとはいうまい。むしろ古典はかえって深められた、より醗酵した芳香でもってリアリティの重力をましたのだといいたい。これまでどれほど多くの賛美がこの書物に捧げられてきたことか。『ドン・キホーテ』は異色の文学的至宝であり、夢想の尽きせぬ泉であり、格別の精神高揚剤でありつづけている。ドン・キホーテその人は、騎士道物語を「ろくに眠りもせず、無性に読みふけったばかりに、頭脳がすっかりひからびてしまい、はては正気を失うようなことになった」のであるが、われわれもドン・キホーテのとんでもない冒険の数々を頭脳がひからびてしまうまで読みふけりたいものだと願う。

ところが最近『ドン・キホーテ』が読まれているらしい。書店にも大部の文庫本セットがつみ重ねられていたりする。四年後のバルセロナ・オリンピックにむけての「スペイン・ブーム」の影響もあるのであろうか。あるいは現代の文化的砂漠の状況こそドン・キホーテ効果を必要とするということがようやく自覚されたからであろうか。昨年はわが国ではじめて、セルバンテスと『ドン・キホーテ』をテーマとする国際シンポジウムも開かれたそうだ（牛島信明「バラエティーに富む『ドン・キホーテ』論」、朝日新聞、一九八八年七月七日付）。

われわれは今日の文化の一つの不可欠の要素として、あるいは再生の可能性として「ドン・キホーテ的精神」、あるいは「キホーティズム」を模索してみたいのである。現代の文化がしらけたものにすぎなかったり、せいぜい体裁をつくろう程度のものでしかなかったとすれば、ドン・キホーテはそこには不在であり、キホーティズムは忘れられている。しかし幸いなことに――どうやらドン・キホーテの亡霊がこの書物の中からむっくりと起き出して、現代の世界をさまよい、われわれの意識の片隅に例の長い槍で摩訶不思議なインパクトを突いてまわっているらしいのである。（そういえば最長不倒のロングランを続けている「フーテンの寅さん」をドン・キホーテになぞらえた人がいる。ある外国紙がこのシリーズ映画を今日の日本文化の一つの特徴としてとりあげたそうだが、寅さんもまたわれわれの心の琴線に触れるのであろう。）

そこでわれわれも、その一突きを食うと必ず感染するというドン・キホーテ症候群がどのようなものか、得業士サンソン・カラスコよろしくドン・キホーテの跡を追いかけ

て冒険の旅に出たいのである。

二

ドン・キホーテは一体何者だろう。どうしてこのようなとんでもない狂人が人類史上の不滅の肖像となりえたのであろうか。

ドン・キホーテはどこまでもスペイン的である。彼が「生まれ育った」のはラ・マンチャ地方である。マドリードの南方に広がる広大な乾燥地帯、アラビア語で「乾いた土地」を意味し、「茄子とニンニクとタマネギの国」、ワインの里である。ラ・マンチャのワインにはドン・キホーテ印のラベルが貼られている。ドン・キホーテはこの砂漠性の風土と一体であるという（ラ・マンチャの様子は荻内勝之『ドン・キホーテの食卓』にくわしい）。

オルテガはドン・キホーテの中にスペイン文化の秘密を見た。「広大なラ・マンチャの平原の真中にただひとり、はるか遠くに、ドン・キホーテのひょろ長い姿がまるで疑問符のように背をかがめる。彼はちょうどスペインの秘密、そしてスペイン文化の曖昧さの看視人なのだ」（オルテガ・イ・ガセット『ドン・キホーテをめぐる思索』、一二七頁）。彼は、スペインとは「ヨーロッパの精神的岬」、「ヨーロッパ大陸の魂の舳先」であるという（一二八頁）。ヨーロッパ文化の先端であり辺境なのだ。

スペイン精神とは何だろうか。大航海時代を頂点にいただき、黄昏のとばりの中を滞留するスペイン文化の中に、われわれは人間精神の一つの忘れられた縮図を見出す。それは抜きん出て高い理想主義と醜悪なまでにリアルさを求める現実主義との混淆（こんこう）と一致である。スペインは「意志」の国、情熱と冒険心に富み、人間におけるトゥモス（気力）を見出した民族であるともいう。オルテガによれば、ニーチェは「スペイン人！　スペイン人！　彼らこそ過度を求めた人間たちである！」と語ったそうである（二五八頁）。

「なんとさまざまな夢がスペインの大地から立ちのぼり、天にまでかけあがったことであろう！」（ポール・アザール『ドン・キホーテ頌』、一二九頁）というポール・アザールの感慨はドン・キホーテの数々の「愚行」を指したことばであるが、同時にスペインの歴史そのものにむかって投げかけられたことばであるようにも思える。ドン・キホーテはどこまでもスペインの大地の「申し子」なのである。

セルバンテス（一五四七―一六一六）の時代はルネサンスの最後の巨輪が咲きほこっていた時代であった。エル・グレコ（一五四一―一六一四）やベラスケス（一五九九―一六六〇）もまたスペイン・ヒューマニズムを描きあげた巨匠たちである。天上をみつめる大きなひとみの長身の聖女を、ロシナンテにまたがって風車をみつめる骨ぎすの騎士の姿に重ねるのは少し無理かも知れないが、ドン・キホーテが出会った多くの美女たち（それにしても女性を美しく描きあげることではセルバンテスはエル・グレコにひけをとらない）とはぴったり重なるであろう。またベラスケスの誇りにみちた武者たちは、ドン・キホーテがたえず夢見ていた勝利者としての自分の姿そのものではなかったか。さらにいえば、画壇におけるセルバンテスともいうべきゴヤ（一七四六―一八二八）の描く庶民たちは、小ぶとりのサンチョの欲と律義さとの混ざりあった表情を表わしてはいないだろうか。こうして画家たちは「スペインの精神性」、「スペインの誇り」、「スペイン人のしぶとくて根づよい無規律性」を描くことによって、セルバンテスと同じ世界を共有している。

生身の人間の賛歌こそスペイン・ヒューマニズムのすべてであった。『ドン・キホーテ』には数多くの好ましい、個性的で情熱的な人物が登場するが（六百人にも及ぶそうである）、彼らは互に重なりあって、どのような壮大な交響曲でも表わしきれないほど多彩で華麗な人間模様を響きあげるのである。それは現実の生活を追い求め、各々の欲望と夢とを交錯させる人間の生の最大の絵巻でさえある。

『ハムレット』と『ドン・キホーテ』はほとんど同じ時期に書かれたが、両者はまさしく人間表現の二つの極をなしている。怜悧と情熱、思慮と行動、不信と盲信、「あれかこれか」と「あれもこれも」――両者はいずれも極限にまでゆきつくがゆえに狂気に触れざるをえない。人間の真実という問題は常軌にとどまることができず、狂気の問題にまでいたるということは、対照的な二つの天才の共通項なのである。

セルバンテスは「狂気」を中心に据え、その周りにさまざまな人間精神の諸形態を描き加えてゆくことによって、それを試練にさらす。それは、さまざまな試薬を加えることによって生ずる化学反応を好奇心をもって調べようとする少年の作業にも似ている。人間精神は徹底して分析器にかけられる。分析（物語）によってさまざまな色彩が分離

する。セルバンテスはそれぞれの色彩が固有の輝きを帯び、しかも味わうに足る好ましいものだということを主張するのである。人びとの個性にみちた思惑、喜怒哀楽、かけひき、はてはとっつかみあいとどたばた（何と数かぎりなくどたばた騒動が繰り返されることか）そのものが文化である。『ドン・キホーテ』の作中市民たちは生活と別の所に価値を見出したり、趣味を求めたりはしない。各人の生活が各人の文化であり、理想は欲望の中でのみ息づく。

三

百二十六章、二千頁（文庫本）に及ぶこの物語は、奇想天外の冒険、ちょっとした小さな出来事、生死をかけた闘い、あってもなくてもよい寄り道、急転回の連続、はてしなく続く饒舌な会話のるいるいと重なるモレーンである。さまざまな冒険描写の絵画的な華やかさ、気のきいたおしゃべりの乱舞、次々と登場する好もしい人物たちの共演は『ドン・キホーテ』の三大特色と呼ぶに値する。

ポール・アザールが指摘するように、『ドン・キホーテ』は豊潤と大盤振舞いの世界であって、乏しさや物惜しみとは無縁である。情景や人物たちが生き生きと色彩的に描き出される。「まずわれわれの眼がとりこになる。眼のための祝祭の始まりだ。まもなくわれわれの眼は眩惑されるだろう。なんと生彩に富みかつ鮮明な多くのヴィジョンが出現し、ただちにそして永久に、心に刻み込まれることだろう！」（五二頁）。セルバンテスの表現力は作品の器からあふれ出す。木が三本あればうっそうたる森になり、ラ・マンチャの羊や山羊に食い荒された平原は、朝露の真珠を葉の先にきらめかせる水々しい草地と流れ出した水のざわめきがのどの渇きを覚えさせるせせらぎに化ける。楽しさこそがセルバンテスのかかげた唯一の方針であった。彼自身がいうように、この物語は最高の「憂鬱症の治療薬」なのだ。

しかし何といっても全編を貫く大黒柱はドン・キホーテとサンチョとの膝栗毛的対位法である。この主人と従士はあらゆる点で対照的である。長身で骨はがっしりしているがやせこけたドン・キホーテと、チビでまるまると太った色つやのよい赤ら顔のサンチョとの身体的対比からはじまって、やせ馬ロシナンテとろば、早起きと朝寝坊、猪突盲進と臆病、やせがまんと食吝坊――その対照的なちがいは

微に入り細にわたる。しかしこれらの正反対も主題にとっては細かい装飾にすぎない。すべては一つの根本的対位法――「狂気」と「欲望」との対照から発生している。

ドン・キホーテの「すっかりひからびた頭脳」は騎士道物語の無数の幻想で占領されている。彼は見るもの聞くもののすべてが騎士道物語の世界に合致しなければ気がすまない。彼はまさしくファンタジーの中を生きる。その頭脳は現実世界で生じるものを感覚どおりに受けとることができない。むしろ彼にとっては感覚は想像力のためのヒントであり、一個の導火線、増幅器にすぎない。野原に立ち並ぶ風車を見れば、彼は長い腕をふりまわす巨人たちととりちがえる。「サンチョ・パンサよ、かなたを見るがよい。あそこに三十かそこらの不埒なる巨人どもが姿を現わしているではないか」。否、彼はとりちがえたのではなく、その瞬間から巨人が「見えている」のだ。彼は最初の一撃でものの見事に打倒される運命にあるが、それでも「闘うドン・キホーテ」にとってはそれが巨人であったという「事実」にはかわりない。「あの賢人フレストンめが、拙者からきゃつらを征服する名誉を未然に取り上げようという魂胆で、あの巨人どもを風車に変えおったのじゃ」。はるか行く手を通る羊の群のまきあげた二つのもうもうたるものすごい砂塵を認めるや、ドン・キホーテには二つの軍勢の合戦が今にも始まるのだと思われた。それどころか彼には鎧兜に身を固め手綱をさばく騎士たちの姿がはっきりと認められた。「自分の空想のおもむくままに双方の軍勢の騎士たちの名を挙げていって、……それぞれの甲冑、色どり、紋章、銘をでたらめにくっつけた」。彼の耳には馬のはげしいいなきや、らっぱのひびきや、太鼓の音が鳴りひびいていたのである。かくて彼は無勢の助太刀にとびこまなければならない。

他方サンチョはといえば、そもそもドン・キホーテに同行するのも彼から与えられる約束の島を夢見てのことである。従士サンチョはもし彼がいなければ『ドン・キホーテ』の魅力が半減したであろうという位なものではない。サンチョなしで『ドン・キホーテ』が可能となるはずがない。両人は黒なくして白が成りたたないほど一体なのである。欲望なくして狂気なし。食客坊で実直なサンチョは徹底して身の安全と胃袋の幸福を願う。二人は互に反対を夢見ながら一つ旅をする。道中の会話は砂糖と塩が料理の味をつくるように楽しい調理の数々となる。そしてひとたび「冒

険」がはじまるとドン・キホーテは勇しくいどみ、サンチョは臆病に逃げかくれる。

しかしセルバンテスの技術はこのような対位法にとどまらない。物語の進行とともに二人はますます混然一体となり、水と油は一に溶けあう。ドン・キホーテはいつしか世間の体面、「騎士」としての立場に気を配る（これこそ正気）ようになり、サンチョは自分の欲望を夢にまでまつりあげ空想の境界をさまようようになる。とりわけ後編におけるサンチョの獅子奮迅ぶりはめざましいものがある。弁舌は時としてドン・キホーテを上まわり、臆病は候爵夫人のスカートに逃げこむという「大冒険」となる。理想は現実の憂き目に染まり、欲望はさまざまな妄想を描きはじめる。対照（対立物）とその入れかわり、ごちゃまぜ（対立物の相互浸透）は『ドン・キホーテ』の全編を貫く。悪が善に転じ、勇気が臆病になりかわる。高橋康也はこの手法を「価値の転換ゲーム」とよび、「鏡像の戯れ」とみなす。この書物の全体が「虚像と現実との無限反射」であり、著者は読者を「鏡の迷宮に誘いこんで、実体と映像、実像と虚像の区別を宙吊りにしてしまう」（高橋康也『道化の文学』、二〇六頁）。

二人の対位法がしかしもっとも見事に結実するのは、実に二人の共通項――饒舌と会話好きにおいてであることはまちがいない。二人は同床異夢のおしゃべりをいたるところで楽しむ。いかに多くの「楽しい問答」、「思慮深き対話」、「分別にとんだ言葉」が交されたことであろう。ドン・キホーテの口吻はつねに礼節と道理を旨としている。大言壮語は礼節を失ってはならないのである。彼の話はすべて本質的に演説である。狂気なき理性が弁舌をふるうのではない。狂気が理性を養うところに彼の話の本質がある。他方でおせっかいなサンチョの「口はさみ」も無類の雄弁ぶりを発揮する。人生を語ることでは主人にひけをとらない。経験は最大の教師なり、である。サンチョの頭を養ったのは庶民の知恵である無数の「格言」である。諺は彼の口から「押し合いへし合いして」数珠つなぎとなって飛び出てくる。諺こそは彼の「狂気」であって、主人の「騎士道物語」に対応している。無数の人生訓と一瞬たりとも離れることのない欲望との妙なる混然一体がサンチョの世界である。

対位法はどんでん返しとなって終結する。ドン・キホーテは一騎打に敗れ、理想は崩れてしまい、狂気は「正気」

に立ち返る。しかし理性が空想を葬り去るとき、彼の魂もまた葬られるしかない。楽しい物語はもう二度と起こらないだろう。ドン・キホーテならずとも、「語るべき何事もおこらぬままに」日々を送ることは死に等しい。

四

ドン・キホーテの狂気は、われわれの精神文化の考察にとって一つの原点の位置を占める。われわれが彼に認める「狂気」とは現実と想像とのとりちがえであって、M・フーコーのいうところの「空想的な同一化による狂気」の典型である。この「狂気」にあっては意識は現実から想像の世界（ファンタジー）へバネ仕掛のようにはじき返される。想像力過多症、虚実錯誤症が彼のカルテである。

ドン・キホーテはファンタジーの中を生きる。われわれはそこからリアリティーとファンタジーとの限りない弁証法をくみとるのである。ファンタジーにとってリアリティーはたんなる素材にすぎない。ファンタジーはリアリティーを変様する。その変換作業を司るのは「美化」と「壮大化」である。そのときリアリティーはものの見事に誇張と誇大、針小棒大の途方もない幻想の国となり変る。

ファンタジーは「たんなる現実」からみれば錯誤と幻にすぎないが、「精神の現実」からみれば意味と価値にあふれた真実界である。心の内なるファンタジーなしでの家庭や友情、あるいは仕事のことを少しでも考えてみればよい。そこには物件と諸関係はあるが、味わいは何もないであろう。ファンタジーとはまさに意味を味わうことに他ならないから。

ファンタジーにおいては恐怖は軽減され、苦痛は麻痺する。感覚的なものがその直接の定在を失うことがファンタジーであったから、感覚はそこでは支配権をもたないのである。ファンタジーには一種の人間精神の浮上作用というべきものがある。それは映像を蜃気楼のごとく、現実の水平線の上方に漂わさせる。現実は昇華され、主観的にのりこえられる。直接性は滅却され粉飾されてきらめく夢幻となる。

しかし他方で現実をスリップさせさえすれば何でもファンタジーになるというわけではない。ドン・キホーテの狂気が「人間的」でなければ、それはけっして「語るに値するもの」とはならないであろう。ファンタジーとはまさし

く共感できる狂気であり、われわれを浮き浮きさせる狂気である。ファンタジーの主人公はモンスターたちであるが、彼らは恐しさの外套をまといつつも、魅力的なところがあり、過去の恐怖の遺物のようなところをもっている。そこでわれわれも、ドン・キホーテのファンタジーにかられた行動を見て、「それいけ」、「そうこなくっちゃ」という気分になる。ファンタジーにはどこか「子供じみたもの」、「幼稚なもの」が本質的に付着している。スリップは退行だったのであり、人間精神史の古代的なものへのアナムネーシス（回想）である。

ファンタジーはことごとく崩壊の運命をもつ。否定はふたたび否定されなければならない。ドン・キホーテのファンタジーにとっては、サンチョが否定の否定の役割を担った。「覚醒」的役割の存在はファンタジーにとって、実は不可欠なのである。しかしファンタジーは外敵には不死身である。逆にいつしかサンチョもドン・キホーテに染まってゆく。否定の否定が否定される。ファンタジーを否定するものはどこか外にあるのではない。幻想は自らが幻であることを内在的にもっているのでなければ幻想とはなりえない。夢はどこかで弊えるのである。——夢敗れて山河あり、映画館出て都会の雑踏の中。

こうしてセルバンテスは人生が現実世界と幻想世界との交換劇であることを教える。「ドン・キホーテ的文化」なるものがあってよい。むしろ現代文化の不可欠の要素である。子供たちにとってはディズニーランドがまさしくドン・キホーテの国であった。各人は自らの「ドン・キホーテの国」をもっている。自らを「名誉ある騎士」の高みに置き、幻の世界を楽しむのである。どこにでもいるではないか。アニメの主人公になりきって台の上から風呂敷マントをはためかせて飛び下りる子供や、戦国物を見すぎて今が何世紀なのかあやふやになりそうな停年族、ドラマのヒロインを自らのかなえられぬ夢とみてうっとりとなっている倦怠期たち。みんなドン・キホーテの仲間であり、ドン・キホーテ症候群の感染者たちである。

セルバンテスはこのようなわれわれの「狂気」の開拓者であった。彼は問う。われわれの中の「宮本武蔵」はどこへ行ってしまったか、「仮面ライダー」は子供時代のアルバムにたたみこまれてしまったのか、もはや木片が剣豪のもつ名刀に化けることはないのか。数々の魔法の杖、宝石箱、秘密の部屋はいつ消えてしまったのか。

われわれもまた問う。われわれにとって現実とは一体何であったのだろうか。目や耳でとらえられたものだけが現実なのだろうか。それとも何か或る別の感受力でもってとらえられた現実――「もう一つの世界」もまたあるのではないか。われわれは「見る」ということの意味を問い直しているのである。想像力とは見る働きである。他方、理想化にむかわない想像力はない。理想こそは想像力の眼によってみられたところの、精神における最高のリアリティである。このような理想なしでとらえられた現実なるものが、はたして「現実」に値するものか否かを問うてみるがよい。理想化を欠いたとき文化はその内的生命を解体させる。対象に美を感じるのも、われわれがそこに理想化を投入する場合のみである。一本の風格ある樹を見るとき、われわれは同時に想像力の眼でもって見ているのである。

しかし理想化は想像力による主観的で一方的な改ざんである。画家にとっては樹は美的均衡と見えるが、木材業者にとっては貨幣価値と映る。どのように「見える」かということが各人の文化なのであり、「理想」であるのだ。しかもその極は一つの「狂気」である。どこまでも樹の美を追いつづける画家は、ついには樹の中に自らの狂気を描きこむであろう。

オルテガは想像力の役割についての美しい思想をドン・キホーテに捧げている。われわれが見ているのは樹々であって、「森」ではない。「森」はそれ自身としては隠れたものである。樹々の背後に「森」を感じとるのは想像力である。「森」は精神の眼にその姿を現わす。――同じことは「街」についてもいえるであろう。たんなる受動的な見聞は、すべてを単一の平面上に無差別に並存させるだけである。われわれがそこに「眼以外の何か」を開き、背後の世界に耳を傾けるとき、世界は生命のきらめきとざわめきを現わす。「必要なことは、どんなところにもヒロイズムの可能性が隠されていること、そしてすべての人間が自分の両足が踏みしめている土地を打つなら、そこから泉が湧き出ることを望むことである」(六六頁)。われわれは「観念のバネ」を巻かなければならない。各人は自ら世界に色をぬらなければならない。「物」の背後に無数の「観念」を輝かせること、世界をも自分自身をもこえて「壮大な鷲の施回」をやってのけること(一二五頁)――これらが『ドン・キホーテ』の教えである。

ウナムーノはここからもっと激しいものを読みとってい

う。われわれは「ドン・キホーテの墓」を求めて進軍すべきである。「たえず熱情の目まいの中に生きるように努めよ。情熱につき動かされた人間のみが、真に持続的で実り豊かな事業を遂行するのだ。……もっとも愚かな人間とは一生のあいだ愚かなことをやりもしなければ言いもしない者のことである」（二二頁）。

彼らとともにわれわれもドン・キホーテの次のことばを共有したいものである。「わしはわしの運命の作者だったが、必要な慎重さが欠けていたのじゃ」、「実をいえば、わしが精魂かたむけて達成したものがなんであるか、わしは知らない」。

参照文献

『ドン・キホーテ』からの引用は会田由訳、ちくま文庫版に拠った。
オルテガ・イ・ガセット『ドン・キホーテをめぐる思索』、一九一四年、佐々木孝訳、未来社
ミゲル・デ・ウナムーノ『ドン・キホーテとサンチョの生涯』、一九〇五年、A・マタイス／佐々木孝訳、ウナムーノ著作集、法政大学出版局
ポール・アザール『ドン・キホーテ頌』、一九三一年、円子千代訳、法政大学出版局
荻内勝之『ドン・キホーテの食卓』、一九八七年、新潮選書
高橋康也『道化の文学――ルネサンスの栄光』、一九七七年、中公新書
G・ルカーチ「ドン・キホーテ」、一九五二年、高本研一訳、ルカーチ著作集2、白水社
『セルバンテス短篇集』、牛島信明編訳、岩波文庫

（おおた　なおみち　宮城教育大学・哲学）

もう一つの思想家像

寺田寅彦の科学思想

藤井陽一郎

はじめに

思想というものはなかなか複雑で、唯物論と銘打っているからその人の思想が唯物論かというと、そうでもない場合があり、また逆に別に正面きって自分は唯物論だと名乗らなくてもその思想が立派に唯物論に通ずる人もいる。つまり思想の展開は非常に多様なのである。したがって思想をその内容に立ち入って深く分析して、もしその中に唯物論が含まれていればそれを掘りおこして、唯物論を豊かにする課題が思想の研究に生ずるのである。

本稿で取り上げる寺田寅彦は、一九一七年「ラウエ映画の実験方法及其説明に関する研究」で学士院恩賜賞を受けた著名な科学者であったが、日常身辺の現象の物理学研究に興味をもつ奇妙な物理学者として知られていた面もある、非正統派の、誤解されてきた科学者である。その科学思想を誤解してきた人々の中には昭和初期の唯物論者も含まれる。寺田寅彦は、その頃のプロレタリヤ文化運動に強い関心を持ちながらも当時のプロレタリヤ文化運動に一部みられていた時代的な制約である狭い視野に生理的に嫌悪の感情をもっていたし、

また結局は唯物論を体系的に研究したわけでもなかった。しかし寺田寅彦は日本人には珍しく広い視野でしかも科学的に事実にそくして物事を分析することの出来た人で、その思想には唯物論の精神が含まれていた。本稿ではこの事について論じてみようとおもう。

一　寺田寅彦の生涯

その随筆では常にひかえめの表現をとり、けっして他人を批判したりはしない寺田寅彦であったが、親しい友や弟子には自慢話をすることもあったとみえて、小宮豊隆や中谷宇吉郎には自分の科学研究について「こうと見当をつけたことで外れたことはない。」と語ったという。これはたんなる自慢話しではなくて、寅彦の場合には裏付けのある事であった。即ち、その物理学研究では、破壊現象の実験や椿の花の落ちかたと地震の群の発生の類似性を論じた研究は今日のフラクタルの物理学のはしりをなしているし、ウエゲナーの大陸移動説を適用した日本海形成論はプレートテクトニクスの端初であるし、生命と割れ目の研究も物好きで始めたのではなく、生物物理学の形成をもくろんだものであった。これらはいずれも極めて先駆的な研究であった。

本稿ではこのような自然科学研究の背景をなす寺田寅彦の科学思想の特質を論じようというのであるが、彼はまことに時流に屈しない独創的な思想家であった。その思想にはいつも安定した現象よりも不安定の現象に関心を持ち、その取り扱いの方法を開拓しようという傾向があった。その物理学思想の形成の背景を彼の生活体験に求めるのは慎重でなくてはならないが、それにしてもわたくしには、彼の思想の特質はその生涯の体験と無関係ではないとおもわれてならないのである。これは一つの仮説であるとして許していただくとして、話をさきにすすめよう。彼は生涯に三回結婚している。最初の妻夏子とは学生時代の結婚であった。そして夏子は五年の結婚生活で亡くなった。その思いでを後に折々随筆に書いている。「団栗」「からすうりの花と蛾」などがそれである。二番目の妻は寛子（ゆたこ）、三番目の妻は紳子（しんこ）で、寺田寅彦はその三人の妻に囲まれて高知市の墓地に眠っている。こういう特殊な体験が寺田寅彦の思想に運命論者の面影をあたえたことはありうるのではないか。また彼の父寺田利正は幕末の高知で起こったある刃傷事件に関連して自分の弟である喜久馬の首をはねた人なのである。寺田寅彦の研究家山田一郎がその著

『寺田寅彦覚書』（一九八一）で述べたように寺田寅彦はこのことについて多くは語っていない。わずか「ある刃傷事件」があるくらいである。

夏目漱石との遭遇は双方にとって重要な巡り合わせで寺田寅彦の思想形成にも重要な影響があった。一九〇九年―一九一〇年にわたる欧米留学は彼の学問形成に大きな影響があったとおもわれ、そのことは当時の欧米の物理学と寺田寅彦の学問とを比較すれば歴然としている。一九一九年には彼は研究室で吐血し、一年半大学を休んだ。このころ大学勤めが厭になり大学を止めたいとおもうようになり、このことを小宮豊隆への手紙に書き、また日記にも書いている。彼がこのように思うようになった理由は色々なことが考えられるが、一つには官僚的な大学の運営が何とも厭になったことによる。

一九二三年の関東地震以後は元気になり、地球物理学の研究にも力がはいり、随筆の執筆も旺盛になる。そして彼の科学思想も十分に展開されていくのである。

二　初期での科学論への関心

寺田寅彦は一九一五年頃より認識論に関心をもちはじめ、マッハ、ポアンカレなどを読んでいる。このことは一九一六年一月一二日付けの桑木惑雄（あやお）への手紙に「小弟事、昨年ポアンカレーやマッハを読んでからだいぶ根本問題に興味を感じ始め、余暇にこの方面の本など読みおり候。御令兄様の御著書なども拝見いたしおり候。何とぞ将来御指導を願いたくと存じおり候。」と書いている事からあきらかである。寺田寅彦は桑木惑雄にこの方面の文献について問い合わせもしている。桑木は日本の科学論の開拓者であり、そのころヨーロッパで盛んとなってきた自然科学の認識論上の議論をひろく日本に紹介していたのである。また一九一五年一月二日の日記には長岡半太郎を訪れ「物理学生に認識論を課す事」を相談している。彼がどんな課程を考えたのかくわしいことは分からないが、そういうことを考え長岡半郎と相談したということは極めて興味ぶかい。一九二〇年頃にはそのころ出版され始めた岩波書店の哲学講座を片っ端から読んでいる。当時科学論の研究は日本で始まったばかりであったが、寺田寅彦は自然科学研究に哲学の研究が必要であることを認めた開拓的科学者であった。

ではその理解はどのようであったか。彼は科学論のエッセイもいくつか書いている。そのうち初期の代表的な二つの随

筆をあげよう。一九一七年の「物理学と感覚」はその標題からも察せられるようにマッハの影響の下に書かれたもので、「自分はマッハの説により多く共鳴する者である。すなわち吾人に直接に与えられる実在はすなわち吾人の感覚である、いわゆる外界と自身の身体と精神との間に起こる現象である。」といっている。この文章だけを読むと寺田寅彦は感覚がすなわち実在であると考えていたようにみえるが、必ずしもそうではない。同じ文章の別のところでは「哲学者の中にはわれわれが普通外界の事物と称するものの客観的の実在を疑う者が多数あるようであるが、われわれ科学者としてはそこまでは疑わない事にする。世界の人間が全滅しても天然の事象はそのままに存在すると仮定する。これがすべての物理的科学の基礎となる第一の出発点であるからである。この意味ですべての科学者は幼稚な実在派である。」とも述べている。後、一九三〇年代に寺田寅彦は唯物論者からマッハ主義だといって批判されるが、最もマッハに傾倒していたときでも素朴実在論でもあったのである。彼が必ずしもマッハ主義ではなかったことは「言語と道具」という文章にも現れている。この文章では自然科学的認識に果たす言語と道具の重要な役割について論じている。この文章の書かれたのは一九二三年で先の文章よりだいぶ後である。ここでは「言語と道具という二つのものを、人間の始原と結びつけると同様に、これを科学というものあるいは一般に『学』と名付けるものの始原と結びつけて考えてみるのも一種の興味があると思う。」といい、歴史的に造られた言語があるということはすなわち知識が存在するということであるとし、また科学の発達は道具の発達の歴史でもあるということに注意している。

このころの寺田寅彦の科学論の関心の内容を示す著書に『物理学序説』がある。実はこの著書は未完におわったもので、未完のこの本が一九四七年岩波書店から刊行になったときの中谷宇吉郎の後書きによれば、岩波書店で昔『科学叢書』というものが計画された時にそのうちの一冊として書きはじめられたもので、一九二〇年十一月十二日に稿をおこし、予定の三分の一余りのところで中止されて、未完結のまま残されていたものである。中谷宇吉郎がいうように、この本は未完におわったとはいえ専門科学者の手になる本格的科学論の著作として日本の科学論の歴史の上で注目されてよいものである。この本にはうえに述べたような認識論の議論もあるのであるが、後に寺田寅彦の物理学思想の中核ともなった思想も展開されている。たとえば、この本の第二編第八章で偶然

を論じている。「理論的物理学の理想として物質界を簡単なる確定的な方則に纏めてしまはうとして急ぐ時には此等の偶然的現象は甚だ工合の悪いものである。しかしそういふ現象が実在ししかも吾人に没交渉でない以上此れを度外視する事は出来ない。此れを征服しない限り、物理学は一部の人の信ずる如き絶対な意味で決定的なものではない、整然たる幾何学体系骨格の間にはまだ雲のやうな泥のやうな不定形或物がつまって居るかの観がある。さういふ意味で著者は偶然に関する物理的現象に学者の注意を促がし度いと思ふのである。」といって偶然現象の本格的物理解明の必要性に注意を喚起している。次節で述べる寺田寅彦の科学思想はこの偶然的現象の解明へ志向を通じて展開されたともいえるものであり、今日ではカオスの物理学としてようやく本格的研究が始められている分野なのである。寺田寅彦が偶然の物理学研究を志向したのには、その背景に科学論的考察の過程があるのである。

三　唯物論への接近

寺田寅彦は昭和の始め唯物論研究会に加入した。もっとも岡　邦雄によると唯物論研究会が弾圧されるとすぐに退会したということなのでそれほどしっかりした唯物論者ではなかったといえる。寺田寅彦を唯物論研究会にさそったのは誰であるのか、あるいは岡　邦雄であるのか筆者はかつてこのことを彼に質したことがある。岡　邦雄は笑ってはっきりしたことは言わなかった。しかし、寺田寅彦の唯物論への関心にはなみなみならぬものがあり、「ロプノールその他」なる一編の随筆を『唯物論研究』に寄せたのに止どまらないものがあるのである。

一九二九年には「ルクレチウスと科学」という随筆を岩波講座『世界思潮』に寄せた。寺田寅彦がルクレチウスの「物の本性について」を読んだのは一九二八年の事であったが、彼は読めば読むほどにおもしろい本であると思ったのである。勿論ローマ時代の唯物論者であるルクレチウスに、たとえ彼がエピキュリアンの学説を大成したとはいえ、現代的な意味での自然科学の知識が盛られている訳ではないが、寺田寅彦はルクレチウスが語る自然観にうたれたわけである。ルクレチウスは物質と空間とがそれ自身に存在するただ二つのもので、それ以外に第三のものはないという立場から原子論を引っ提げて宇宙の諸現象を説明したのであるが、このようなルクレチウスの思想が寺田寅彦には「おそらく永遠に未完成で

あるべき物理的科学の殿堂の基礎はだれが置いたか。これはもちろん一人や二人の業績ではない。しかしその最初のプランを置き最初の大黒柱を立てたものは、おそらくルクレチウスの書物の内容を寄与したエピキュリアンの哲学者でなければならない。人はアリストテレスやピタゴラスをあげるかもしれない。前者は多くの科学的素材と問題を供し後者は自然の研究に数の観念を導入したというような点で彼らもまた科学者の祖先でないとは言われない。しかし彼らの立っていた地盤は今の自然科学のそれとはむしろ対蹠的に反対なものであったように見える。形而上学的な骨格に自然科学の肉を着けたものという批評を免れることはむつかしい。しかしそういう目的論的形而上学的のにおいをきれいに脱却して、ほとんど現在の意味における物理的科学の根本方針を定めたものはおそらくエピクロス派の人々でなければならない。」というように見えて、唯物論のエピクロスを大いに賞揚している。唯物論の立場からすれば人間精神も物質活動に由来するということになり、ルクレチウスは人間精神も物質的な原子よりなることを論じているが、寺田寅彦はこの論を批評して「心の衝動によって精神が刺激され、これが肉体を動かす。物質的肉体を動かすものはまた、物質でなければならない。ゆえに精神、従って心もまた、物質的なものでなければならないと論ずる。これは彼の唯物観の当然の帰結であり、またおそらく現代の多くの物理的生理学者の暗黙のうちに仮定しつつある事でなければならない。」と論じている。ルクレチウスを紹介した文章の最後に寺田寅彦は、いままで論じたことをまとめて「ルクレチウスの書によってわれわれの学ぶべきものは、その中の具体的事象の知識でもなくまたその論理でもなく、ただその中に貫流する科学的精神である。この意味でこの書は一部の貴重なる経典である。もし時代に応じて適当に注釈を加えさえすれば、これは永久に適用さるべき科学方法論の解説書である。」といっている。当時の日本で唯物論者も含めてルクレチウスの科学論上の意義を論じたものは皆無であったと思われるが、寺田寅彦の直感はよくルクレチウスの唯物論の精神を捉らえていたと言わなくてはならない。

一九三三年、岩波書店を出た小林　勇の主宰する『鉄塔』に寄せた「北氷洋の氷の割れる音」は寺田寅彦が偏見にとらわれることなく物事を事実にもとずいて観察していたことを示す好随筆である。この随筆は一九三二年のインターナショナル・ポーラー・イヤー（国際極年）に関連して一隻の舟が日本に入港し、ソ連の科学者たちと日本の科学者たちとが接

触することになった時の印象を物語ったものである。寺田寅彦がイデオロギー的な理由でソ連に好意を寄せていたとは思えず、また当時の帝国大学教授が安易に政治上の理由でソ連に好意を持つということもあまり考えられないが、寺田寅彦は新興国家ソ連の若々しい科学研究活動について強い印象をうけ、この印象について語り、ひるがえって当時の日本は満州事変や五・一五事件などに禍いされて科学の尊重ということがなおざりにされていて、この意味で国家の未来に暗雲の垂れ込めていることを論じている。

一九三四年の「変わった話」中の「電車で老子に会った話」では、ルクレチウスを通じヨーロッパの唯物論的自然思想を論じたのと対象的に、東洋の自然思想を論じている。「中学で孔子や孟子のことは飽きるほど教わったが、老子のことはちっとも教わらなかった。」が、なんとなく孔子の教えより老子の教えの方が上等ではないかとおもっていた、そしてドイツ訳の老子を読む機会があり、その自然思想に強く打たれたのである。ここにも、ルクレチウスに感心したのと同じように、自然を法則的に理解しようという老子の思想に関心を持ったのであろう。

一九三五年の「西鶴と科学」は、その発表当時にも文学評論家の間でも評判の高かった随筆であるが、寺田寅彦は西鶴がその人間世界を見る目は実験科学者が自然を見る目と同じであるとして西鶴の実証主義・写実主義を評している。この文章中には「実証的な西鶴のマテリアリズム」という表現や「唯物論的な西鶴の立場」というような用語も見え、西鶴の文学の批評というかたちで寺田寅彦自身の思想が唯物論に接近した事を示している。

四　晩年の科学思想

寺田寅彦といえば、キリンの縞模様を論じたり墨流しの物理学を取り上げたりして、奇妙な研究を行っていたということで理解されている面もある。晩年はとくにこの傾向がつよく、『寺田寅彦』（一九四九）の著者矢島祐利は「此の著者の研究題目の選びかたは始めから奔放といっていいほど自由なことはこれまでに述べて来たことからも大体分かると思うが、此の頃から更に輪をかけて奔放になっているように見える。割れ目の研究なども其の一つであり、これはついに割れ目と生命とか割れ目と電子とかいう処まで発展した。また墨の膠質学的研究はコロイドと地震学という論文を生むに到った。

其他に地球物理学の極く地味な仕事も数多くあるけれども、右のような、俗な言葉で言えば大向うをあっと言わせるような題目が何の怖れるところなく研究のテーマとして採り上げられている。落椿の力学でもそうだし、地震と漁獲にしても同様の傾向に属する。」といっている。これらの研究は、確かにその材料からいえば奇異なものであろうが、その内容からいえば、多くのお弟子さんたちが強調するように決して奇妙なものではなく、今までの物理学が研究の対象とはしなかったテーマを新しく取り上げることで物理学の新展開を図ったものであった。

ではその新しい物理学思想とはどんなものであったか。それを幾つかの例で見てみよう。「割れ目の物理学」は、一九三〇年六月ごろ石膏版を破る実験を助手に試みさせる辺りから始まっている。一九三一年五月二八日の理化学研究所の講演会では「固体の破壊に関する二三の研究」を発表している。同じ年六月十六日の地震研究所談話会では「ワレメに就いて」を講演している。このような破壊の物理学は工学方面では機械力学や材料力学に広範な応用面があり、地球科学では地震学や地質学などに応用面があることはすぐわかることであるが、当時はそのような現象が物理学の研究対象になるとは日本ではだれも思わなかったのである。それはまだ欧米でも本格的な研究の対象になっていないというだけのことで、後進国の悲しさ、寺田寅彦の割れ目の物理学は正統派の物理学ではないと考えられていたのである。

中谷宇吉郎の『寺田寅彦の追想』（一九四七）では、寺田寅彦の構想した新物理学として「生命の現象の物理的研究」「粉体の力学、砂の崩れ方の研究」「形の物理学」「綜合の物理学」の四つが挙げられている。このうち形の物理学について、中谷宇吉郎は寺田寅彦が「形の同じものならば、必ず現象としても同じ法則が支配しているものだ。形の類似を単に形式上の一致として見逃すのは、形式という言葉の本当の意味を知らない人のすることだ。」と語ったことを伝えている。この意味での形の物理学の一つの例は「群発地震について」（一九三一、原文は英文）にも見られる。この論文で、寺田寅彦は、当時伊東沖で発生した群発地震の一―二年間の時間別頻度のパターンが関東地方の過去数年間の時間別頻度のパターンとおなじであることを論じた。これは今日、自己相似の思想を中心とするフラクタルの物理学として注目されはじめた新しい物理学の萌芽として評価できる。類似のパターンは椿の花の落ちかたの時間的頻度にも見られ、このような観点

から一九三一年には椿の花の落ちかたの観察が始められた。その翌年の五月二五日には理研講演会で研究の結果を発表している。

これらの研究を行いながら寺田寅彦があきらかにしようとしたものはどういう思想であったろうか。一九三二年の「物理学圏外の物理的現象」では「その当代の流行問題とはなんの関係もなくて、物理学の圏外にあるように見える事がらの研究でも、将来意外に重要な第一線の問題への最初の歩みとなり得ないとは限らない。それでそういう意味で、現在の物理学ではあまり問題にならないような物理的現象にどんなものがあるかを物色してみるのも、あながち無用のわざではないかもしれない。」という事に注意した上で、「そういう種類の現象で自分が多年心にかけていたものがいろいろあるが、それらの多数はいずれも事がらが偶然的偏差に支配されるために、結果が決定的再起的でないような種類にぞくするものである。」といっている。このような決定的再起的ではないような現象には従来の物理学は無能なのであって、この限りでは一般の学者が閑却してきたのもまた自然の成り行きであったのである。「ところが、最近に至って物理学の理論の基礎に著しい革命の起こった結果として、物理現象の決定性といったような基礎観念にもまた若干の改革が行なわれるようになった。その結果としておもしろいことには、われわれが従来捨てて顧みなかった上記の種類の不決定な事がらに対して、もはやいつまでもそうそう無関心ではいられなくなって来たと私には思われる。なぜかというと、上記の種類の現象の根本に横たわる形式的要素が、新物理学の基礎に存するそれらとどこか共通なものを備えているからである。」という事情が生じてきたのである。このような文章から我々は寺田寅彦が企図したことは、新物理学すなわち量子力学の確率論的な思想を、他の領域すなわち従来事柄が決定的でないために研究の対象とされなかった破壊現象とか、生物現象に応用しようとしたものであることが分かる。この試みは今日なお十分には成功していないが、寺田寅彦の昭和初期の試み自体はまことに時代に先駆していたといわなくてはならない。

五　非正統派の物理学者としての寺田寅彦

以上論じたごとく、割れ目の物理学や形の物理学にせよ、寺田寅彦の科学研究と科学思想は時流に先んじたものであった。しかしながら当時の物理学の主流は量子物理学の研究に

あり、寺田寅彦の研究はこれとは離れているように見えたから、彼は正統派の物理学者とは見られない面もあった。すなわち、余りにも先駆的なその研究は奇妙な研究と見られたのである。

しかしながら、寺田寅彦にしてみれば、あくまで自然科学者として自然そのものを見ようとしたのに過ぎないのである。寺田寅彦は時としてドイツあたりの論文によく見られる、体型的に数式もふんだんにつかって書かれてはいるがどこにも自然の香りがしないような科学論文は大嫌いなのであった。彼はあくまで自然そのものをみつめることが科学の仕事であると考えていたのである。一九三二年の「からすうりの花と蛾」では、からすうりの花が夕方になると一斉に咲きはじめるのを詳しく観察し、またからすうりの花がひらきき る頃たくさんの蛾が飛んでくることについても観察し、自然の仕組みの巧みさに驚嘆したのち、人間の知恵はとても自然の仕組みにはおよばないとしるしている。そして一転して絵画にしても科学にしても最近の日本ではそれらがむしろ自然から離れてしまったことを嘆き「科学者は落ち着いて自然を見もしないで長たらしい数式を並べ、画家はろくに自然を見もしないでいたずらにきたならしい絵の具を塗り、思想家は周囲の人間すらよく見ないでひとりぎめのイデオロギーを展開し、そうして大衆は自分の皮膚の色も見ないでこれに雷同し、そうして横文字のお題目を唱えている。しかしもう一歩科学が進めば事情はおそらく一変するであろう。その時にはわれわれはもう少し謙遜な心もちで自然と人間を熟視し、そうして本気でまじめに落ち着いて自然と人間から物を教わる気になるであろう。」と書いている。

また寺田寅彦は自然をよく見詰めることによって日本独自の物理学をつくろうとしたのである。一九三一年の「時事雑感」中の「煙突男」では、一九三〇年の富士紡川崎工場の争議に関連し、若い労働者が高い煙突によじ登り赤旗を翻し演説をし、長時間にわたり頂上にいすわったが、これが評判となり見物人がわんさと押し掛けたことを紹介し、それが評判となったのはその所業が独創的であったのとその独創的計画をやりぬく彼の耐久力にあったことを論じて、そこで「これが紡績工場の労働者でなくて、自分の研究室の一員であったとしたら」と科学研究の独創性に思いを寄せている。そして「日本人には独創性がないという。また耐久力がないという。これはいかなる程度までの統計的事実であるかがわかりかねる。しかし少なくとも学術研究の方面で従来この二つのもの

があまり尊重されなかったことだけは疑いもない事実である。従来だれもあまり問題にしなかったような題目をつかまえ、あるいは従来行なわれなかった毛色の変わった研究方法を遂行しようとするものは、たいていだれからも相手にされないか、陰ではあるいはまともにばかにされるか、あるいは正面の壇上からしかられるにきまっている。」と言っている。さらに独創的な研究にはきずだらけの玉といったものが多いがそういう場合でも「ほんとうの学問のために冷静な判断を下し、泥土によごれた玉を認めることができたら、世界の、あるいはわが国の学問ももう少しどうにかなるかもしれない。」と強調している。また同じ年の「日常身辺の物理的諸問題」では、摩擦に関した物理学の重要性を雨の日の靴の滑り易さを例に説明したあと「だれか日本人でこの方面に先鞭をつけてくれる人があればいいと思うのであるが、日本ではたいてい西洋の学者がまずやり始めて、そうして相当流行問題になって来ないと手を着ける人が少ないようであるから、まず当分はこれらも例の『ばからしい問題』として、わたくしの洗面台とそうして東京の街路の上に残されることであろう。」と述べている。引用した文章では日本の科学が模倣的で創造性に欠けることがするどく指摘されるとともに、新しい試みが日本では必ずしも歓迎されないことについても指摘されているのである。

日本では、新しい試みは寺田寅彦のような著名な科学者の場合でも抵抗にあうものなのであった。寺田寅彦自身もそのことについて心配せざるを得なかったことは、たとえば一九三三年の「物質群として見た動物群」にも述べられている。この随筆は、駿河湾北端の漁場での鰺の漁獲高と伊豆付近の地震の頻度についての自分の研究を例に、こういう研究が「生物のことが物理学で分かるはずがない」という理由からその研究が注目されないことを指摘して、「科学の進歩を妨げるものは素人の無理解ではなくて、いつでも科学者自身の科学そのものの使命と本質とに対する認識の不足である。深くかんがみなければならない次第である。」と指摘せざるを得なかったのである。

おわりに

明治いらい輸入に努めてきた日本の自然科学が思想として自立してきたのは昭和初期あたりではないかと思われる。その傾向を代表する科学者はそれぞれの分野に存在するであろ

うが、寺田寅彦もその一人であろう。彼はそのころの科学者の常としてヨーロッパ留学を終了することによってはじめて東京帝国大学の物理学の教授となったのであるが、ヨーロッパかぶれというのでなく、比較的早い時期からなんとかして日本の科学が欧米の模倣を脱して独自の創造の段階に達することを願っていた。このような気運が生じたのは日本の資本主義も昭和初期ともなるとようやく形を整えて来た、という背景があるであろう。寺田寅彦が書き残した随筆では、関東地震以後の東京の都市生活が映画・野球・デパート・チューインガムなどによって特徴づけられていて、今日の都市生活の原型がすでに出現していたことがよくわかる。寺田寅彦の晩年には「千人針」とか「非常時」とか第二次世界大戦へといたる時代の不安の兆しもみられていて、彼はこのこともその随筆に克明に書き留めている。しかし全体としてはこの時代は日本の資本主義文化が第二次世界大戦前最高の水準に達していた時代としてよいであろう。寺田寅彦はこのような時代に、一方では新興のプロレタリヤ文化にも興味をもち、一方では日本の伝統芸術である俳句に沈潜しつつ二つの極の間を揺れうごきながら、日本における物理学の自立化独創化を試みたのである、と考えられる。その努力の過程では「ルクレチウスと科学」や「西鶴と科学」のように、当時は勿論、今日でも十分に啓発的な唯物論の科学論・芸術論を書き残したのであった。またその物理学では今日のフラクタルの物理学・カオスの物理学に通ずる業績を残したのである。時代に先駆したその研究は多くは大成しなかったが、寺田寅彦のお弟子さんたちにひきつがれて発展していったのである。彼の業績は、独創的な研究というものの日本的形態を時代に刻み付けたものとして、今日の我々にとって十分に示唆的なのである。

（ふじい　よういちろう　茨城大学・地球物理学）

◆ぶっく・えんど

いまどきのフェミニズム

――上野千鶴子の大冒険――

細谷　真

イントロ

一九七〇年代末から今日にいたるまでのフェミニズムの領野における上野千鶴子の多彩なる大冒険を、批評子は遠方から眺めておりました。本誌読者の皆さんにも、前人未到の探険をくりひろげる上野千鶴子さんとその舞台であるフェミニズム理論というワンダーランドに、これをきっかけに、少しでもお近付きになって欲しいと思います。以下は彼女がこれまでに書きとめてきたワンダーランドの探険記のリストです（単行本のみ、上野による対談・監訳・監修・編集などを含む）。

八二年『セクスィギャルの大研究』　光文社
『主婦論争を読む・全資料Ⅰ・Ⅱ』
（編集・解説）　勁草書房
八四年『マルクス主義フェミニズムの挑戦』
（共訳・解説）　同右
八五年『資本制と家事労働』　海鳴社
『構造主義の冒険』　勁草書房
『フェミニズムはどこへゆく』松香堂
『多型倒錯』　創元社
八六年『女は世界を救えるか』　勁草書房
『マザコン少年の末路』
河合文化教育研究所
『フェミニズムの現在と未来』松香堂
『女という快楽』　勁草書房
八七年『《私》探しゲーム』　同右
『美津と千鶴子の
こんとんとんからり』　木犀社
八八年『女の子に贈る
生き方ハンドブック』学陽書房
『女遊び』　同右
『接近遭遇』　勁草書房
『「女縁」が世の中を変える』日経新聞社

上野以前における諸論争

敗戦後に日本で行われた三次にわたる主婦論争（五五～五九年、六〇～六一年、七二～七六年）の主要論文を上野が編集し、序・解説二本を付加したのが、『主婦論争を読む』である。上野によれば、第一次主婦論争は、主婦の「職場進出」論と伝統的家庭論との間での論争であり、六〇年代の高度成長による職場への主婦の引っぱり出しと主婦への二重役割（家事負担者と労働者）の押し付けというその後の現実の展開の先触れ的意味を持つものであった。

第二次主婦論争は主婦の家事労働にも賃金

を支払うべきだという論点をめぐって行われた。この論点は、女性を「最後の植民地」としている資本制の全体枠組みを揺るがすものにもなりうるものであった。例えば、イタリアのフェミニストのダラ・コスタは『資本主義・家族・個人生活』（亜紀書房）や『家事労働に賃金を』（インパクト出版会）などにおいてそのような実践提起を行った。（また、資本主義経済システム内における家事育児労働の重要な意義を分析した本にヴェールホーフ『家事労働と資本主義』岩波書店がある）。しかし日本における論争は、交換価値を生まない家事労働は賃労働とは見なせないという社会主義女性解放論からの常識的反論の地平、すなわち経済学批判ではなく経済学の地平を超えることができないで終わった。

第一次も第二次も性別労働分業（内／外という分業ではない。と言うのも、例え家事育児が外部化されてもそうしたサービス産業の労働者は常に女だという事態もここで言う性別労働分業に当たるから。）に対する疑いが不在であったのに対し、第三次論争はその問題性を問い直すものであった。論争は「主婦こそ解放された人間像」という挑発的なタイトルの論文から開始された。上野によれば、性別労働分業の否定には四つのパターンが考えられる（Ⅱの二五〇ページの表）。そして上野自身は、⑴私的自由の拠点としての家庭を擁護し、⑵同時にその内でも外でも性別分業を否定する「両性自立論」の立場を採ることを明確にしている。これは後に、産業／生活（言い換えると、生産／再生産）の相互乗り入れによる性差（むしろ性別労働分業）極小化戦略と上野によって呼ばれることになる主張である。

戦後の三次にわたる主婦論争は、戦前の諸論争の反復の論点も含みつつ、女性解放の理論的可能性のパターンを基本枠でほとんど提出したものと上野は評価している。上野登場以前、もちろん主婦論争の他にもフェミニズム史において注目すべき出来事はいくつもある。とりわけ七〇年代のリブ運動のインパクトはエポック・メーキングなものであった。しかし主婦論争が女・男・生活・産業の四項間の関係の問題を問い、その四項間の関係如何は上野のその後の展開の中でも基本的問題構成を成すものであるので、上野へのアプローチを主婦論争の確認から始めることは適切なことであろう。

マルクス主義フェミニズムの旗手

『マルクス主義フェミニズムの挑戦』は、七〇年代の半ばから主に英米で盛んになったマル・フェミ（こう略称される）の論文集の翻訳に、上野が訳者解説を付したものである。

上野によれば、女性抑圧のメカニズムを解明する女性解放理論としては、⑴階級支配に根拠を見る社会主義女性解放理論、⑵性間支配に根拠を見るラジカル・フェミニズム理論、⑶階級支配と性間支配との二重要因の間での矛盾と調停との弁証法をとらえようとするマルクス主義フェミニズム、以上の三者がある。（敢えて注意しておきたいが、「社会主義女性解放論」と「マルクス主義フェミニズム」とは、呼び名についても内容についても厳密に区別されるものである）。

マル・フェミの理論的系譜は、フランスの哲学者ルイ・アルチュセールの「構造的因果律、重層的決定」という考えかたを英米のフェミニストたちが読み換えつつ取り入れたことに始まる。従来の社会主義女性解放理論はある一つの考え方に呪縛されていた。それは、性差別と階級支配との関係を、現象とその本質との関係としてとらえる考え方であった

（それは神学的あるいはヘーゲル主義的思考様式と言える）。フェミニストたちがそうした思考様式を克服するために武器として、アルチェセールの哲学が用いられたのである。そのことによって初めてフェミニストたちは、ラジカル・フェミニズムが発見した性間支配およびマルクスが分析した階級支配、これら二つの原理からの重層的な決定項として性差別が存在すると考えることが出来たのであった。

マル・フェミの主要文献としては、本論集の他に、ナタリー・ソコロフ『お金と愛情の間』（勁草書房）がある。大部の本であるが精読に値する内容を持っている。また、上野の『資本制と家事労働』は上野自身の論点も付加しつつ行ったマル・フェミについての講義の記録であり、読みやすくスッキリとマル・フェミのアウト・ラインが頭に入る。

『女という快楽』は、女と男の関係に関するいろいろな問題を、マル・フェミの基本視座から八〇年代前半に縦横無尽に論じた諸論文を収録している。中でも《産むことの問題》を論じた六～八章は、上野の他著にあまり論じられていない問題であるとともに、上野が批判してやまない、マザコン男性と横暴家長とのブキミな同一性および母性原理と天皇主義ファシズムとの親和性という、日本社会における万邦無比のユニークな事態（それは日本のフェミニズム理論にとっての重要な分析課題であろう）の解明に関連したものであるので、とりわけ注目される。

上野は上記の三冊に収録されている八〇年代前半の理論活動によってマル・フェミの旗手と目されるようになった。

エコロジカル・フェミニズムとの対決

イリッチ『シャドウ・ワーク』八二年　岩波
青木やよひ編『フェミニズムの宇宙』八三年　新評論
イリッチ『ジェンダー』八四年　岩波

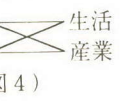
これら三冊の本の出版は、女の男並み化または「人間」化による解放が「味気ない社会を作ることになりはしないか」と内心で危惧していた日本のフェミニストの少なからぬ部分をエコロジカル・フェミニズムへと水路づけた。そうした動きに対して上野は早速批判を開始した。八三～八五年の諸論考を収めたのが、『女は世界を救えるか』である。

エコ・フェミ（こう略称される）は、原理として次のような二項対置を設定する。

女　生活　自然　感性　和解　非近代
↔　↔　↔　↔　↔　↔
男　産業　文化　理性　支配　近代

そして以下のように主張する。近代社会において左側系列（男性原理）が右側系列（女性原理）に対し優位に置かれ、右側系列を抑圧している。そこでフェミニズムはかかる優劣関係を逆転（すくなくとも対等化）するために、右側系列を復権させなくてはならない。そしてその課題において、エコロジスムの課題と通底しあうものとなる。かくしてフェミニズムはエコ・フェミになる。

提起されている問題を、次の図1～4を用いて、上野に沿って考えたい。



（図1）

（図2）

（図3）

（図4）

公的権利における女の男並み化を求めるブルジョワ女性解放論は、図2のように、女が生活（この言葉で家事・育児・教育・団らん・

レジャー・近所付き合い・などを意味している）へのコミットは当然のこととした上で産業にもコミットすることで解放を指向するが、実際は二重の負担を背負い込むことにしかならない。したがって、スーパー・ウーマンしかそれに耐えられず、平均的な女性達は自発的に（結婚退職・出産退職、「選択の自由論」!?）産業から足を洗うことになる。

ブルジョワ女性解放論のこうした欠陥を見抜き、同時に生活の公営化を主張したのが社会主義フェミニズム（図3）である。ところが現存社会主義国において生活の社会化は実現しておらず結局女性のみが二重負担に苦しんでいるという事実がある（ソヴェートの女たちの現状についての最新の情報は『フェミニズム・入門』JICC出版局の中の片岡論文に詳しい。ちなみにこの本は、新鮮な力作がギッシリと詰まっていて、たったの九八〇円である）。しかし現状の欠陥のことはさておくこととして、理論的に考えて、生活がすべて公営化され家庭が不要になると（家庭の死滅？）剥き出しのバラバラな個人（女あるいは男）が公的なもの（国家や産業社会）に直面することになるので、公的なものが諸個人を一元的に統制支配を行うとする場合、孤立して存在している個人はそれに抵抗するための何の保証も拠点も持てなくなってしまう、という欠点が存在している。この論点において、上野は、私的生活（家庭）の擁護を主張することになる。

では、上野自身の積極的な構想について。ここで少し迂回して上野の別の議論を参照してみたい。上野は、権力とは状況を定義する力だというミッシェル・フーコーの考え方を承けて、男達が社会の意味的空間を以下の諸原理で定義していることに問題があるとする。

(1) 公／私の分離
(2) 公／私への、男／女の排他的振り当て
(3) 私に対する公の優位

この図式で言うと、上野は(1)を私的権利の擁護のために追認する。そして(2)に攻撃を集中させ解体することで、(3)をも無化しようとする。以上が上野が採用している解放のための基本戦略である。ちなみに言うと、青木は、(1)(2)を共に追認した上で、(3)の内部の力関係を逆転させようとして女性原理を高唱しているのである。

上記の上野のフェミニズムの戦略は、生活／産業という先ほどの図式と対応させて考えることができる。上野の戦略は図4のように、産業への女の乗り入れ・生活への男の乗り入れという相互乗り入れの戦略となる。これまでのフェミニズム（ブルジョワ女性解放論と社会主義女性解放論）の理論と運動により、相互乗り入れのうち産業への女の乗り入れ方は問題を抱えつつも現在進行形である。そこで現時点での中心的戦術としては、生活への男の乗り入れの推進という話になる（それなしには、産業への女の乗り入れの方も、一方的な二重負担の困難の前に伸び悩まざるをえない）。五時前になったら男達も夕食の準備のことを考えて会社でそわそわし始めること、子供の病気のために男達も遅刻・早退・欠勤すること、「おれは他ならぬ家族のために稼いでいるのだ」と自己正当化することなく家族のためには家族の領域で男達もサービスを提供すること、近所での買い物や子供の世話や地域での対等な人間関係を日常的にこなしていくことで男達が男の沽券と威厳とを洗い落とすこと、これらのことで生活と産業の双方の中身も今までとは異なったものになるはずである。

「上野千鶴子VS.青木やよひ、大激突」という前評判のあった八五年の女性学研究会のシンポジウム（『フェミニズムはどこへゆく』）

においては、両者とも相互の共通点についての言及を行って、大方の予測（大激突）を裏切ることとなった。一方で青木が上野からの批判点を受け入れてしまっており（ただし、原理的に批判に応えうる理論装置は未提出と思われる）、他方で上野の解放戦略の方も、生活（とりわけ産むこと）への男の巻き込み・生活の再評価という課題を内発的に有しており、その点で、女同士で戦略をめぐりおいに論争するが共闘の可能性をあくまで大切にしていくという姿勢を示したものであろう。実践的フェミニストである上野のこの姿勢は、その頃から現在まで続く多様な女たちとの「女遊び」の中にも見て取れる。

青木の主張は『エコロジーとフェミニズム』（新評論）にまとめられている。なお性差と自然／文化との関係の問題については、英米仏のフェミニスト文化人類学者たち六人によるスリリングな論文集『男が文化で、女は自然か？』（晶文社）がある。

さらに、エコ・フェミの主張とも重なりを持つ主張として、八五～八六年に加納実紀代はいわゆる「（産業社会から女の）総撤退論」を主張した（『挑戦するフェミニズム』社会評論社におさめられた加納論文など）。それに対しては江原由美子が周到な批判を展開している（江原『フェミニズムと権力作用』勁草書房）。青木VS.上野のエコ・フェミ論争が八〇年代における第一次論争だとすると、加納VS.江原の総撤退論争は八〇年代の第二次論争と呼べる。

ついでに言うと、八〇年代の第三次論争は、アグネス・チャンVS.中野翠・林真理子の子連れ出勤論争である。この論争は、子連れ出勤賛成という戦術的介入を上野も行っており、広範囲の論者によって現在も進行中である。『アグネス論争を読む』（ＪＩＣＣ出版局）は関連文献を寄せ集めたものである。

女遊び　またはシスターフッドを求めて

「少女時代はトムボーイ、大きくなってからは男遊びに夢中で男友だちさえいれば、女なんてうっとおしい生き物とつきあわなくていい、とまで思っていた。」（上野）と語るフェミニストというのも奇妙なものである。ともかく女嫌いのままフェミニストになって、その後に彼女は女遊びの魅力に目覚めていくのである。

『多型倒錯』は、宮迫千鶴とのうまくいった相互セラピーと呼ばれる。多型倒錯とは、異性愛（ヘテロセクシュアリティ）以外の様々な愛着の型を指示する心理学用語である。しかし二人ともレズビアンではない。宮迫はこれまでたまたま同性の恋人が現れなかったということだし、上野は自分が極めて近代主義的に一対異性愛的に社会化されてしまっていることを告白している。

しかしそれにもかかわらず両人は現存の異性愛のゲームの諸ルールからまったく逸脱してしまっているのである。例えば、結婚という形式、主婦という座、産む性としての母性、男をヨイショするコケットリィ、見られる性としての受動性、などから。この逸脱が両人にそれなりの心的外傷（トウマ）を負わせていた。だから相互にセラピーしあってしまったのである。

現在人々に自覚もなく強制されている異性愛のルールとロール、ソフトな男根支配的（ファロクラティック）カルチャーが二人の異人たちの目から逆照射されて見えてくる。

本書との関連で。「実感への安易な横すべりと女性理解の度しがたい通俗性」（上野による書評）を伴いつつ、異性愛への懐疑を観念的に突き詰めて多性愛（ポリセクシュアリティ）の可能性にまで話を進めたのが、吉本・芹沢『対幻想―n個の性をめぐって』（春秋社）である。また非対称的な異性愛が女性差別の体制中に巧妙に

組み込まれている（女にとっての）ワナである事を看破した胸のすくような本が、小倉千加子『セックス神話解体新書』（学陽書房）である。

七〇年代の日本のリブ運動のバイブルと言われた『命の女たちへ―とり乱しウーマン・リブ論』（田畑書店、現在品切）の著者である田中美津と上野との対談が、『美津と千鶴子のこんとんとんからり』である。七〇年代のリブ運動は、男たち中心のマスコミで一過性の茶番としてこれまで処理されてきた。しかしその運動は、実際には上野の冒険をその中の一つとする七〇年代末以後のフェミニズムの多彩な展開に対する共通のインパクトとなっていたことが理解される。

なお日本のリブ運動の理論的総括を試みたものに、江原由美子『女性解放という思想』（勁草書房）がある。

『女の子に贈る生き方ハンドブック』は、中野区婦人会館が一〇代の女の子向けの女性学のテキストとして上野の監修によって作った本である。社会にも女性学にも初心者である女の子たちが楽しみながら自己発見（自分自身による自分の状況の定義）をできるように工夫されている（批評子もこれを短大でのテキストにして授業をしようと思っている）。

『女遊び』は、上野が様々な新聞・雑誌などに書きためたショート・エッセイのコレクション（何と一一三編も！）である。どのエッセイでも、基本的には上野がフェミニズムの理論として考察してきた内容しか語っていないのであるが、多様なメディアの先にいるであろう多様な女たちに向かって日常の言葉で語りかけたものであり、全編に印刷されている画家ジュディ・シカゴによるオマンコのイラストとともにシスターフッド（女どうしの付き合い・女たちの連帯）の雰囲気で紫に染め上げられた本である。

『「女縁」が世の中を変える』は、現在主に主婦たちが作っている様々なサークル・グループについて上野が電通ネットワーク研究会とともに社会学的に多面的な分析を行った本である。

学生達もおじさん達もみんな元気のない中で、主婦たちが元気にアチコチ出歩きアレコレ（カルチャーから反原発まで）やっている。こういう主婦たちについての意見はフェミニストたちの間でも分かれるところである。長い間の解放理念であった女の経済的自立論・働くべき論からすると、亭主（ワリと高給取りが多いらしい）に生計を依存した上でチャラチャラ出歩く無自覚な主婦として、一昔前のボランティア夫人たちと同類視されるかもしれない。感情的な反発はともかくも、主婦たちの出歩き現象が女の本当の解放であるか、または本当の解放につながるか、については大いに議論の余地もあるだろう。

しかし上野は、出歩き主婦たちに声援を送るスタンスをはっきりと選択している。一つには、もしもそうした主婦たちが出歩かなかったら夫の出世と子供の進学にのみ自己実現の代償を求める（『マザコン少年の末路』を参照のこと）絵に書いたような専業主婦になってしまうからそれよりまだマシ、という理由が考えられる。

二つには、社会的活動すなわち生産労働、という等置は企業社会による状況の定義に他ならない。その定義を受け入れた男たちは、地域活動・市民運動・文化活動・政治運動などから手を引いてしまった。しかし、社会参加による人間（女も男も）の解放という理念には、もともと生産活動の他にも上記のように多様な参加の形態がすべて含意されていたはずだ。だから、生計依存の問題から独立して見るなら（主婦の普通選挙権実現なども同

様に見た時に評価しうるもの）、金にもならない社会参加（生産活動以外の社会的活動）には独自の意義が認められるから。

三つには、上野の理論に内在している理由がある。上野の言うタコツボ型解放論（排他的ニュー・ファミリー主義？）と両性自立論（生産者かつ生活者としての男女の自立と協同）とを原理的に区分けする重要な位置に次の論点があるはずだ。すなわち、諸家族の私的空間が相互に閉鎖的なタコツボ（窓のないモナド）になるか、それとも生活の領域において相互に交通しあう窓をもったモナドになるか、という論点である。そして主婦たちの（いや主婦に限らずいかなる生活者でも相互の間での）ネット・ワーキングは、上野の解放戦略の中におけるこの論点にとって基本的な意義を持つものと考えられる。と言うのも、産業社会での男達の社会性（共謀）が孤立した女たちに対する権力となりうるのも、私的家族が相互に孤立無援のタコツボになってしまっているからこそである。また、同じ理由によって、国家・産業社会は孤立した私的家族に対して圧倒的な権力を発揮できるのである。以上の議論は、上野理論の一つの重要な環として存在しているはずであるが、「近代家族の解体と再編」という論文（『女という快楽』に収録）以外には未だ主題化されて展開されていない部分なので憶測して三つめの理由とした。

以上の三つの理由から主婦たちの出歩きに積極的な声援を送るというのが、実践的フェミニスト上野の政治的選択であろう。

専業主婦であろうと主婦労働者であろうと独身女性労働者であろうと、どんな立場を選ぼうとも女にとって生きにくいのが現在の世の中である。生きにくい者同士が（戦略的にと同時に、共感に基づいても）連帯し合うことの大切さを、上野は多様な女たちとの関わりあいの中で示している。例えば、『多型倒錯』は異人どうしのシスターフッド、『こんとんとんからり』は上のリブ世代との、『生き方ハンドブック』は下の世代との、『世の中を変える』は同世代の立場の異なる女たちとのシスターフッド。

このように解放のためのシスターフッドをたくさんの女たちと取り結びながら、上野千鶴子の大冒険は今日もなお続けられていく。一瞬たりとも目が離せない！

（ほそや　まこと　東京唯物論研究会）

「質問と対話のコーナー」設定のお知らせ

編集部では今回、従来の「こだま」を発展的に解消し、「質問と対話のコーナー」を設け、原稿を募集することにしました。掲載内容は本誌の論文などの内容に対する質問・意見・感想です。字数は一二〇〇字以内で、質問に対してはなるべく解答を寄せてもらう予定です（原稿を縮小させていただくこともあります）。編集部は、このコーナーを契機に読者相互の対話とコミュニケーションが活発になることを期待していますので、ふるって御応募下さい。

あて先　〒101千代田区神田神保町一の二八　白石書店気付　唯物論研究協会

■書評

池谷壽夫・後藤道夫・竹内章郎・中西新太郎・吉崎祥司・吉田千秋著

『競争の教育から共同の教育へ』

山科　三郎

本書は、戦後の、とくに、六〇年代の「高度成長」時代以降の日本の教育全体をとおしてつらぬいている差別・選別の「能力」主義原理を根底から批判しそれに対抗する原理を探求する視座をさだめようとするラジカルな試みの書である。序章で簡潔にまとめられているように、これまでの支配層の教育政策・理念と対決し日本国憲法＝教育基本法の志向する民主主義教育運動をつうじて獲得し深化させてきた発達（能力）論・子ども論・教師論・教育内容（知識）論・国民の教育論などを八〇年代という歴史的時点にたって批判的に洗い直し、同時に臨教審の教育「改革」構想に対決し、さらにのりこえる理念を求めている。だから、その切り込みはきわめて鋭い。

たしかに、七〇年代前半以降、「能力」主義教育の破綻は顕著になりそれがもたらした荒廃はだれの眼にも明白になっており人間疎外は数世代のスケールで深刻化している。他方、産業構造の変動・多国籍企業化・「軍事大国」化の加速化など日本資本主義の反動的再編は質的な変化を帯びてきている。支配層の教育への要請は「国際化」・「個別化」などの名のもとに民主主義的教育理念の空洞化をすすめている。こうした歴史的状況の質的変化は、それに対抗するわれわれ自身にこれまでの武器の批判を求めているといわなければならない。それは、われわれの武器をより一層・鋭利にするだろう。もし、この現実からの要請を感じないとするなら、それはわれわれの生活感覚が鈍化し問題意識が枯渇したからであろう。とすれば、そのような状況は、われわれ自身の主体的な危機ではないだろうか。筆者たちは本書全体をつうじてそう語っているようにきこえる。それゆえに、筆者一人ひとりの議論の展開もきわめてポレーミッシュである。本書の魅力はここにある。

本書のテーマは、「能力」主義競争の原理を克服し民主主義教育より高い次元で再生させるために、人間の原理を教育に確立すること、である。この問題意識は、全面的な検討を要求する。本書は、その視座を確定するための理論的陣地を固める端緒となるものであるといってよい。すなわち、「能力」主義は、〝何かに役立つ〟という狭隘な「功利性」に基づき差別・選別・優勝劣敗を容認する。そこでは、事実上、人間存在の価値の平等性が事実上、否定される。では、なにゆえに人間存在は価値があるのか。何かのために役立つからか。もしそうならば「能力」主義の悪鬼が跋扈する余地を与えるだろう。人間が存在すること自体が人間の価値である。これが人間の尊厳の原理である。このことが、いま問われている。人間の「能力」の如何にかかわらず、この原理にもとづく教育が創造されないかぎり、民主主義教育とはいえない。現代という歴史的境位はこれを要請している。しかし、議論を一歩すすめなければならない。もし、教育的価値が発達にのみあるとするならば、発達しえない子どもは教育する価値がないのか、それはすべての人間存在そのものが等しく人間にとって最高の価値を具有しているという原理と矛盾するのではないか、という問いをつきつけずにはおかない。その問いは必然的に、発達の概念そのものの批判的

検討へといきつかざるを得ない。こうして、人格・能力・競争・共同、などの基本的概念の洗い直しから、その系の現実的な展開としての「学校知」とそれを価値の秤量のモノサシにして子ども・青年にかざす教師の権威そのものにたいする本質的批判へと日常レヴェルまですすまざるをえない。本書の問題意識は、この意味で、首尾一貫している。

そこから、これまでの発達観・子ども観の問題点がえぐりだされる。子どもを、共同関係—もちろんその共同関係にもいくつかの位相がある—において、しかも、それぞれの発達過程のふし（たとえば、思春期）の固有の価値をみとめるとともに誕生から死までのライフ・サイクルにおいて、とらえることを主張している。これは、子ども把握、というよりは人間把握にとってきわめて重要な意味をもっている。人間の生はこれらの固有の価値（不連続性）の否定的継承のプロセス（連続性）であるからである。それは子どもの人権尊重のありかたを具体的に示唆するだろう。しかも共同というとき男と女の共同をふくめて—とくに性の平等原理にもとづく人間としての発達をみすえて—とらえることを強調している。これらは、いま、実践的にも理論的にも、解明をもとめられている課題であるといってよい。時宜にかなった問題提起である。それはそこには、従来の民主主義教育の発達論のもっとも弱い部分であったとおもわれるからである。

さらに、敷衍しつけくわえておきたいのは、民主主義教育運動にたいする本書の警告についてである。これまでの民主主義教育運動の側には「教育主義的ユートピア」的な思想がひそんでおり「学校信仰」となって事実上、「能力」競争に巻きこまれはしなかったか、という反省である。このような反省は本書のモチーフともなっている。たとえば、国家主義と選抜体制が予定する労働者階級像、国民像を想定していない弱点が国民の教育権論にみられるように、教育さえしていれば世の中は変わる式のユートピア的色彩が生じたのは教育を労働運動をふくむ全社会的な事象との内的連関においてとらえる観点が弱い、と指摘している。これらの指摘は、これまでの民主主義教育の理論の自己検討をせまり問題意識を活性化させてくれるだろう。

だが、同時に、疑問もなくはない。本書が掲げる共同の教育は、「能力」競争だけではなくともに働きかけあい自己発揮しあう競いあいをも拒否していることである。紙数がないので立ち入ることができないが、一言だけ誤解をおそれずにいえば、競いあいは共同の一契機ではないか、ということである。筆者たちがいう共同の教育とは、どのような子どものあいだの関係を創りだすために、どのような学校（制度として、学校生活のシステムとして）をイメージしているのか、という疑問である。さいごに一つ。全面的発達はユートピアにつながる現実的媒介を呈示しえてはじめて正しいと説明しているが果してそうなのだろうか。それは、個人のあらゆる可能性を、社会=共同関係のなかで、主体的な生活活動をつうじてたえずあたらしい質の力を獲得していくプロセスを意味する概念ではないだろうか。全面的発達にとっての必要条件はユートピアなのではなく、個々人の自己実現の活動を制約するくびきから個々人をより自由に解放する方向に共同体が発展していくことではなかろうか。

本書の意義は、現実の要請にこたえる民主主義教育理論の創造をめざして、あえて武器の批判にチャレンジし解明すべき課題をしめしたことにあるといえよう。

（青木書店　二〇〇〇円）

（やましな　さぶろう　労働者教育協会・哲学）

■書評

島崎　隆著『対話の哲学——議論・レトリック・弁証法——』

横田　栄一

権威主義なり専制主義といったものは、先ずは社会の制度的枠組の存在形態に他ならない。著者は権威主義や専制主義の対局にあるものこそ民主主義に他ならないと言う。ハーバーマスによれば、社会の制度的枠組の権力的・抑圧的性格はコミュニケーションの体系的歪曲という形態を取る。ともあれ、こうした事態の中でこそ、著者が言うような「階級的抑圧を始め、あらゆる抑圧のない自由で民主的な社会、人間的豊かさに満ちた社会を形成する」（五九頁）ということが実践的課題となるのであろう。権力的地平の拡大の現実と同様、これを乗り越えようとする運動もまた人間存在の本質に根差している（橋本剛「社会主義と民主主義」）。勿論こうした課題の現実的設定は社会の制度的枠組、更には近代そのものに潜む野蛮性・権力性から目を反らすことを意味してはいないし、いわんや人類の美しくもない人間性を民主主義という美しい理念の衣で包み隠そうとするものという「理論」が語るところとも無縁である。著者が対話やレトリックを扱うのはこうした実践的課題のパースペクティヴからであると思われる。こう言われている。「対話法的スタイルをとるということは、相手を自分と同等の人間とみなすこと、つまり同様に理性的に思考し責任を担える主体とみなすということを意味しており、この意味でそれは民主主義の基礎である。」（七〇頁）

このように、対話や説得に関わるレトリックは民主的人格の形成にとって重大な意義を有する。が、著者は対話やレトリックを強調するあまり、対話を通して獲得される合意の真理性、客観性を考慮しないのは誤りであると言う。知の流動化・人間化は確かに現代の一つの特徴ではあるが、それは一方で絶対的真理の仮象を破壊しながら、他方ではともすると単なる相対主義・主観主義・知識の遊戯化を帰結してしまう。このことは先ずレトリックに言える。大量生産と大量消費の原理の下で使用価値消費が一定の限界点に達する時、商品は使用価値を喪失することはないにせよ、それとは区別される過剰な意味を担い、差異的流動化を開始する。そこでは消費者の欲求を喚起するために様々なレトリックが使用され、のみならずレトリックは政治の道具、更にはデマゴギーの道具とも化す。だからレトリックはだめだというのではない。著者はそうしたレトリックに対して、真のレトリックを、即ち他者を説得したり、自分の経験を表現したりする時に自と湧き上る「客観的真理性と主体的真実性との統一」としてのレトリックを対置する。対話でも同様であり、対話とは単に合意が達成されればよいというものではなく、そこでは理論や主張の真理性がいつも問題になる。それ故に著者は対話・レトリックの論理と「弁証法的反映論」とを統合しようとするのである。こうして、この統合という著者独自の課題を扱う第Ⅳ章「真理反映説か真理合意説か」と第Ⅴ章「二つの弁証法の統合」が本書の中心部分をなしているように思われる。このような著者の態度は貴重でもあり重要でもある。というのは、真理性への問いは例えばデマゴーグにとって不倶戴天の敵であるからだ。しかし他方反映論は唯

一の主体が客観的実在を反映するとされることで真理の唯一の担い手であると僭称する手段にもなり得る。これに対して著者が対置するのは論拠をもって行われる主張に関する相互批判的対話を介する共同的な真理探求である。かくて著者の試みは我々の現在の知のあり方に深く関わるものと言えよう。

個々の論点に立ち入ることができないのは残念だが、私はここで本書の趣旨に沿い、対話・レトリックに関する対話的な共同の研究を目指して一つの問題提起を行ってみたい。

「私は……弁証法的反映論の立場から〔話手／聞き手がそれについて相互に了解しあう対象のレベルを〕対話参加者が対象の本質や構造を客観的に反映する過程として、さらにその認識に基いて、何らかの実践的方策を案出する過程として理解したい」（八二頁）と言われている。私はここで理論の二つの形態を区別したい。社会の批判理論は社会の再生産構造を規定する構造的諸特性・物象化的存立メカニズムを認識しようとするにしても、この理論が目指すのは物象化的法則性の実践的適用ではなく、その実践的止揚である。それ故、この理論は法則性を認識してその実践的適用を目指す理論形態とは区別されなければならない。私はかつて「如何なる人間的解放の理論も社会の諸主体の意志と意識によって媒介され、彼らの相互的討議の次元において己れの真理性を実証しなければならない」と述べたことがあるが、理論が現実性を持つためには、それは社会の諸主体がこの理論のうちに己れの受苦の根源を、自己の姿を再認できるようでなくてはならない。この時、実践は、たとえそれが相互対話的な共同の真理探求の結果に基くにせよ、認識された法則性の実践的適用の論理では捉え切れないのであって、むしろそれは人間が自己の社会的なあり方を、従って自分自身を変革するという「革命的実践」になる。以上の区別からすれば、先に見た著者の発言は二つの仕方で読み得るということになろう。ということは、逆に言えば、上の区別が十分に意識されていないように私には見うけられたが、どうであろうか。（もしこの区別が念頭に置かれるならば、更なる探求が誘発されよう。例えば「実践において人間は彼の思惟の真理性、すなわち現実性と力、此岸性を証明しなければならない」と言われる場合の実践と実践によって理論や言明・主張の真理性を検証すると言われる場合の実践とはその位置価が異なっている。）

ともあれ、個の人格を集団に回収してしまうような、権力を内化したような集団性に対していわば下から新たな連帯を造りあげていこうとする課題にとって民主的人格に関わる対話・レトリックの問題は大きな実践的意義を有するものであり（またマルクスは物象化の止揚に関して「社会的生活過程の、すなわち物質的再生産過程の姿は、それが自由に社会化された人間の所産として人間の意識的計画的な制御のもとにおかれたとき、始めてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てるのである」と述べたが、この命題も対話・レトリックの面から新たな照明が与えられよう。勿論、この際問題なのはマルクスのこの命題の単なる確認や繰り返しではなく、一つには現代社会の中でその可能性を追求することであり、また一つには「自由に社会化された人間」がどのような質的形態を取ってこの世界で生まれてくるのかを探求することである。対話やレトリックはこの際不可欠の意義を有することになろう。）本書が機縁となってこの領域での研究が一層進展することを期待する。

（みずち書房　三〇〇〇円）

（よこた　えいいち　札幌大学・哲学）

■書評

加茂利男著『都市の政治学』

古城　利明

都市―国家―「世界システム」のトリアーデをどのように解き明かすかは、現代社会科学の主要関心事の一つである。本書はこうした関心を共有しながらも、このうちの前二者の関連に焦点をおいて、同時代の知的・実践的要請に応えようとしたものである。著者が、その「序にかえて」において、西側の福祉国家・東側のソ連型社会主義のゆきづまり（その背景にある工業化→人口膨張の論理のゆきづまり）を改革するために、「現代の市民生活と国家をつなぐ市民社会のしくみを考えなおし」、「大工業と福祉国家をつなぐ社会生活の場であった都市」を改革するのが「最大の焦点だ」（一五ページ）と主張しているのは、この意味であろう。

さて、こうした狙いを達成するために、本書は二つの部分から構成されている（目次とは必ずしも一致しない）。その一つは、理論的部分である。「ゆきづまり」を改革する視点の模索である。すなわち、「Ⅰ都市と政治の歴史理論」では、都市は本質的に政治や自治と切り離せない空間であることがM・ウェーバーまでの理論を素材にスケッチされ、これをうけて「Ⅱ『都市型政治』の時代」では、まず、二〇世紀の「都市型政治」が多かれ少なかれ福祉国家の確立と結びついていることが示され（この部分は次の現実分析部分の伏線となっている）、次いで、この「都市型政治」理論の典型としての松下圭一・宮本憲一両教授の「胸をかりて」、著者の「都市政治の理論」がデッサンされる。この理論的部分は、自治体労働者や住民運動家を主対象とした本書では、あまりつっこんだ検討はなされておらず、それは「別の機会」に待つ以外にないが、本誌の読者も考慮し、あえて二つだけ問題点を指摘しておきたい。その第一は、「自治共同団体」としての都市、「都市型政治」、都市政治の関連はどうなのか、ということである。いいかえれば、ヨーロッパの歴史のなかで育まれてきた「自治共同団体」としての都市は、「都市型政治」や都市政治にうけつがれているのか否か、うけつがれているとすればどのようにか、また「都市型政治」と都市政治を使い分ける根拠は何か、ということである。このこととともかかわって、その第二は、都市政治という概念をどのように規定するのか、ということである。いうまでもなく、この概念はUrban politicsであってPolitics of Cityではないはずである。とすれば、この概念を独自の方法で用いたM・カステルの構造主義的都市理論との異同が示されねばなるまい。著者が基本的にはカステルに批判的であることは、本書でもふれられている（しかし、都市社会運動といった概念は借用されている）。だが、それにかわる著者の理論（それは階級的政治過程論ともいうべきではないかと思う）が充分示されていないのである。次著に期待したいと思う。

すでにふれたように、本書のもう一つの部分は、現実分析的部分である。先にふれたようにⅡの一部はすでにこうした内容をもっており、それをうけたⅢ以下がこの主要部分である。この部分は、おおまかにいって、福祉国家型都市政治からポスト福祉国家型都市政治への転換を基軸とし、これにアメリカ・イ

ギリスと日本との対比をクロスさせる、という分析方法がとられている。すなわち、「Ⅲ現代都市の政治過程―福祉国家とその変貌」では、Ⅱの最後に示された著者の理論的枠組に沿うかたちで、福祉国家型都市政治の変貌・解体（後退）、新保守主義の台頭がアメリカと日本について分析される。このなかで「おくればせながら、福祉国家型都市政治に到達し、すぐにそこから後退していった日本の大都市」（一五六ページ）という指摘がなされているが、その種差性の解明は都市政治の展望にとって重要な意味をもつように思う。つづく「Ⅳ新しい都市政治をめざして」では、「福祉国家型都市の後退につづく新しい変化」として「世界都市」＝国際的な中枢管理機能都市の政治がニューヨークと東京を中心に分析される。ここでの狙いはリストラクチュアリングもさることながら、この「新しい変化」のなかでの都市デモクラシーの可能性である。その探索は「生活圏の民主主義」のケース・スタディーにまで及ぶが、そこから「体制」の改革への筋道は、率直にいってつかみきれてはいない。「Ⅴ世紀のはざまで―結びにかえて―」でも、この点が、ポスト福祉国家時代における高度の中枢管理化に対する「地域の分節化・ヨコ型・ネットワーク型組織化」（二三九ページ）として提起されているが、これとてもまだ「可能性の可能性」の範域の問題である。要するに、都市デモクラシーの可能性を引き出すパラダイムは模索中のままなのである。いうまでもなく、このことは著者の責に帰する問題ではない。現代のマルクス主義社会科学が死活を問われている問題なのである。このこととかかわって、本書の問題点を一つだけあげておくならば、それはポスト福祉国家の内容がまだ不充分だということである。本書ではⅢ→Ⅳ→Ⅴと展開するにつれて、その内容がはっきりしてくる（その意味では不統一である）のだが、それでもなおデッサンにとどまっている。先のパラダイムを創り出すためにも、またこれもすでにふれた日本的種差性をつめていくためにも、この問題点を解明していくことは急務であろう。

以上、本書を再構成しつつ、いくつかの問題点を指摘してきたが、総じていえば、本書は冒頭に述べた「狙い」をかなりの水準で達成しているといえるであろう。ほめ言葉が少ない書評であったかもしれないが、評者はいつもながら著者の問題へのめくばりのよさに感嘆したし、またアメリカの都市政治の造詣の深さに多くのことを教えられた。読者も恐らく本書のいたるところで蒙を啓かれるおもいがするであろう。

最後にないものねだりを一つ。それは「周辺部」の「都市の政治学」が欲しいということである。冒頭のトリアーデでいえば、本書は「世界システム」の「中心部」を対象にした「都市の政治学」である。しかし、国際化はこれとはかなり異質な「周辺部」のそれを要請している。ここに残された大きな課題がある。

（自治体研究社　一六〇〇円）
（ふるき　としあき　中央大学・政治社会学）

■書評

佐藤和夫／伊坂青司／竹内章郎 著

『生命の倫理を問う』

島田 豊

いま、私たちの日常生活のなかで提出されている「生命の倫理」を主題にしたこの本は、まず、その問い方そのものにおいて新鮮である。三人の哲学者たちは、それぞれに「私」から出発し、そこから「私たち」のところまでねばりづよく思想をにつめてゆこうとする。その「私たち」はあくまでもこの時代を生きている生活者であり、哲学者であることはその一人として考えぬくことを意味している。

これは、かつて「私たちにとって」という言葉を「哲学者にとって」という意味でつかったヘーゲルとは、正反対の道をとる哲学者のあり方だろう。私は、哲学のこの探究の方向に賛成である。唯物論の立場をとるといっても、「哲学者にとって」と「生活者にとって」とを二重につかいわける思考をのりこえることに、それこそ世界史的にみてまだなにほども成功していないのが哲学の現状である。この本は、まず、その現状を打開しようとする知的営みの勇気と誠実によって私をはげましてくれる。

三人の哲学者たちは、それぞれに、生活者である私自身の生活経験から出発して、近代市民社会の人間観・生命観の限界を超えようとする思想の格闘のドキュメントを報告する。第一話「いのちを決める」（佐藤和夫）、第二話「いのちを育む」（伊坂青司）、第三話「いのちを守る」（竹内章郎）。第一話では、妊娠中絶と女性の権利の問題が、第二話では、結婚と家族と子育ての現状と課題が、第三話では「重度障害児」と「安楽死」をめぐる現状が、それぞれに思想の展開の軸にすえられている。それは同時に、それぞれの思想の検証基盤ともなっている。そこには、歴史の現実をはなれて抽象的普遍を語ることばだけは見られない。

だから、報告は、つとめて引用をさけ、生活のことばと思想のことばとのかみあいをたしかめながら、つとめて話しことばで語ろうと努める。報告のあとで、討論がおこなわれる。第一話ののちに「生命倫理を語るための条件とは」、第二話ののちに「だれもが子どもをほしいか」、第三話ののちに「庶民と優生思想、そして天下国家」が討論の主題となっている。

討論は、三人の哲学者たちの見解の相違を浮び上らせることに力点を置いた「遠慮会釈」のないものである。要約は困難である。しかし、その見解の相違を語る三人の哲学者たちの語調はさわやかであり、そこに提出されている問題は、それにふさわしい重みをもって探究の持続を求めている。

最後に、「脳死—臓器移植の背景にあるもの」を主題として、生命倫理、バイオエシックスの現状にたいする批判的な「討論」によって、このシンポジュウム風に構成された本はむすばれている。一致した結論はない。だが、三人の哲学者たちのあいだに一致はないだろうか。それはある。

近代市民（ブルジョア）社会の生活に根ざした能力主義・管理主義が人間観・生命観に滲透している現状を批判し、現実に有効な対決の道を求め、人間の自然性と社会性の接点を見つめ、自由な人間社会のあり方を準備しようとする探究の意志には、太い一致が見出

される。むしろ、その一致は、それぞれの見解の相違を押しだすことをつうじて展開されているとさえいえる。しかし、だいじなことは、その一致した方向が実現されてゆくためには、私たちの一人ひとりが「自分の生き死に、結婚、愛、そんなことぐらいは少なくとも自分が十分な見解をもって決定」（あとがき）できる必要があるということだろう。この本は、それこそが、いま、私たち、日本の生活者にとって必要事であることを、相互の見解の相違のあり方をつうじて語りかけようとした本だといえよう。

それだから、私にはこの本の「書評」を書くのはむずかしかった。障害度一級という障害児（者）の父親として生きてきた私には、竹内さんの「少数派」の主張の重みは身につまされる思いがするし、それを実現しようとすると、同時に、今日の家族崩壊の現状をふまえて、保守主義に足をとられない家庭のあり方の国民的合意点を探ろうとする伊坂さんの「良識」をだいじに思う。それに、この本を「はじめのモノローグ」から出発させた佐藤さんのきわめてまじめなフェミニストぶりには、私は共感以上のものを感じる。私の見解を述べるには、私自身から出発して「私たち」までたどりつく独自の営みをさけられない。それは、討論に、第四の発言をつけくわえるにとどまるにちがいない。それでも、今日のライフ（生命・生存・生活・生涯・人生）のあり方には、生活者にとっても、哲学者にとっても、「私」の責任で考え、また、語らなければならない未解決の問題が満ちあふれている。日本語には、タテマエとホンネという一対の言葉があるが、私のホンネのあり方から出発してタテマエのあり方の吟味を深めるのが、生活者であることと一致する哲学者の仕事だろう。この本は、そういう哲学のあり方への有効な着手の姿をしめしている。

提出されている問題群のうち、特につぎの焦点に私は留意したい。その一つは、社会的ないしポリス的存在としての人間と、「いっしょに共に生きていく」存在＝コミュニケーション的存在＝「親密な関係を求める存在」としての人間と、その二つの人間のあり方の区別と関連を追求する課題である。佐藤さんは、その二つは、「人間に固有なふたつのあり方」で、一方が他方に還元できず、また、「後者が十全に成り立つためには、前者の関係がいつでも決定的に重要」だという。ここまでは私も同意する。表現の仕方はちがいうるが、ここに解かれなければならない問題の焦点があることは、伊坂さん、竹内さんの論旨とも矛盾しないだろう。竹内さんの疑問は、「天下国家」のあり方とはなれて「親密圏」が成立しているかのように語る考え方にむけられていて、「親密圏を成立させうる社会的文化的条件を問う方向」では一致している。ここには、たとえば、ハバーマス理論の超え方の問題があるだろう。

もう一つは、「少数派」を重視し、その尊重を主張し「代弁」しながら、国民の合意を形成し獲得しうる思想のあり方を探究する課題である。この本が、相互の見解の相違をとりわけ大切にしているのは、その模索の過程のように私には受けとれる。

最後に。この本の成立にだいじな役割をはたし、討論できらりと光る発言もしている「森田さん」の紹介がほしかった。

（大月書店　一三〇〇円）

（しまだ　ゆたか　日本福祉大学・哲学）

〈前号批評〉　特集　フランス革命二〇〇年――その光と影

現代とフランス革命
――視角の交錯――

石川光一

昨年九月以来の天皇「騒動」は本年に入って裕仁の死、新天皇の「即位」、「昭和」から「平成」への年号の改変と私たちをさらに大きく包み込んで展開されつつある。十六号で「前号批評」を担当された種村氏ばかりでなく私を含め本誌読者の多くが天皇問題は軽視できないとの感をさらに深められたのではないだろうか。実際この間のマスコミの異常報道ぶり、「朝見の儀」における「国民一同……をお誓い申し上げます」との竹下首相の発言は、現憲法に明記された国民主権の原則を一挙に飛び越し、まるで私たちが「明治憲法」のもとにいるかのような錯覚さえ起こさせるものであった。「一体このような天皇制を抱えたままで、日本に民主主義の実がある と言えるのか」、私はそんな疑問さえ抱きもした。そして同時にそれと鮮やかな対照で私の脳裏にバルザックの次の言葉が浮かんできた。「ルイ十六世の首をはねたことで、フランス革命は全家長の首をはねてしまった。今日ではもはや家族はなく、もう個人しか残っていない」。

今この言葉の意味を詮索することはおくとして、今日の私たちを包む「天皇制」と二百年前のフランス革命という対比はやはり改めて一体この「フランス革命」とは何であったのか、という恐らくはこれまでにも幾度となく繰り返されてきた問いへと私たちを導かざるをえないように思われる。今回の特集「フランス革命二〇〇年――その光と影」はどのようなフランス革命像を私たちに提供してくれているだろうか。

まず冒頭の座談会はどうであろう。そこではたとえば近代国民国家の誕生とか「人権宣言」の普遍性などが「光」として語られ、言語も文化も異なる諸地域を強権的にフランスに組み入れたことや「人間」には女性は含まれなかったことなどの「影」の部分がそれに対置される。だがそこからは、残念ながら封建的秩序を解体しブルジョア的な社会関係を創出したというきわめて一般的、抽象的なフランス革命像しか得られず、それ以上の具体的なイメージや問題は少なくとも私には汲み出すことができなかった。座談会では日本の近代化や天皇制の問題などが多く論ぜられていた。そうした問題意識から出発するからこそ、私たちは「過去の出来事としてのフランス革命」を単に過去の事件に終わらせることなく論じうるのであろう。そうした具体的な分析や接近が座談会に欠けていたことはきわめて残念と言わざるをえない。

単にイメージということで言えば、最初の渡辺氏の論文もフランス革命に関するイメージを直接あたえてくれる訳ではない。だがここでは事情は幾分異なるようである。氏はマ

ルクスのフランス革命論を「マルクスが〈民主制〉理論を廃棄し、独自の理論的境位を形成していく転換点」と位置づけている。そしてマルクスが自らの思想的立場を自己批判しながら新たな理論を創出していく過程を分析され、この過程がマルクスによる「フランス革命」への批判と理論的深化の過程ともなっていることを示されているからである。当初市民社会と国家の分裂のヘーゲル的な人倫による止揚（「人倫的国家の実現」）を目指したマルクスは、フランス革命を「人間を再興した」と評した。だがこの革命はマルクスに理論（人権思想）と実践（権利の停止）の矛盾という「謎」を提出する。この謎を解くなかでマルクスは、フランス革命が市民社会と国家の分裂を固定する政治的解放にすぎないとしてそれに「人間的解放」を対置する。しかもこの固定化は自己の特殊利害を普遍的なものとして前提することによってのみ全社会を解放しえたブルジョアジーによって果たされたのであり、その結果成立した市民社会はブルジョア社会でしかなかった。それゆえマルクスは「人間的解放」の可能性をプロレタリアートと結合するに到るのである。いささか難解ではあるがきわめて濃縮された渡辺氏の立論からは、徹底して政治的であったが故にかえって「市民社会」自体の問題性を鋭く提出した革命というフランス革命像を得ることができよう。

マルクスという後世の人物との関わりから渡辺氏が一つのフランス革命像を提出してくれたとすれば、二番目の大津論文はフランス革命前の大ベストセラー『両インド史』の著者レナール師を登場させ、啓蒙思想と大革命の関わりを照射している。革命直前レナールはルイ十六世に建白書を送り、貧しい者を救うための改革の断行を迫り、実行されない場合には民衆が君主に反抗して立ち上がることを予言する（八九年）。だがレナールには現実の革命の進展は啓蒙主義者が予想した「哲学と理性」の支配ではなく、「民衆による専制の奴隷的支配」と映ずる（九一年）。そして革命の「無秩序と混乱」を救うと称してレナールは「立憲君主制」の確立を説くに到る（九五年）。しかしルイ十六世は九三年一月に処刑され、フランスはすでに共和制に移っていた。革命の展開に伴い、啓蒙主義者レナールの革命観はそれとはまったく逆の軌跡を描いてしまう。大津氏の論考は往々にして啓蒙思想の発展線上に単純に描かれる私たちのフランス革命像を見事に訂正してくれる。ただ若干付言させていただけば、たとえばロベスピエールは氏が啓蒙思想の異端的傍流に位置づけられるルソー的な流れに与したこと、またレナール＝ディドロ的な流れは「九一年体制」を主導した大ブルジョアと自由主義的貴族の政治理念と合致したことは周知の事実であろう。とすれば啓蒙思想とフランス革命が決して単線的に結合しないのと同様、実はフランス革命自体が単一の政治過程ではなく、両者の相関はむしろ質的な差異をも含む複合的なものと思えるのだが、いかがであろう。

三番目の小林論文は、中国の章炳麟と日本の清沢満之という二人の思想家の西洋思想、とりわけその進化思想への関わりを考察している。経学や仏教の強固な伝統を背景に、章は進化論に異議を唱え、自然規則にすぎない進化は人為には適応できないとした。他方明治期において激しい圧迫や批判に曝された日本仏教の一翼を担った清沢にあっては、進化を基準とすることの是非さえ問われることなく、仏教の因縁果の論理と進化論の融合が図られる。小林氏は章炳麟の態度のうちに、近代化の障害となったその世界観がかえって進化論の見逃した自然と人間との相違を明らか

にするという「逆説」を読み取られている。「自然と人間の共生」を改めて問題とせざるをえない今日の私たちにとってこれは重要な問題であろう。ところでこうした問題設定からアジアの「近代化」が問われる時、そこからは「進歩」や「進化」といった漠とした観念と結びついたフランス革命像しか浮かび上がってこないのであろうか、小林氏の提出された問題の大きさとともにそうした疑問を私は抱かざるをえなかった。

二百年前のそれも他国の経験を問うとは、実はそれを鏡にしてわが国の有り様を問うことに他なるまい。その意味では冒頭の「座談会」から以下に述べる安藤論文に到るまで、程度の差こそあれそうした問題意識に強く貫かれていることは本特集の特徴であろう。この現実的問題意識から発して対象たるフランス革命をいかに切り取るかという点で、特に最後の安藤論文は興味深いものであった。

言うまでもなく「自由と平等（そして友愛）」はフランス革命のスローガンである。だが今日「自由」は論ぜられても、「平等」はとりわけ哲学的な問題としてはなかなかその対象とはならない。安藤氏はそこに平等論を問題とさせないほど能力主義やその系譜のイデオロギーが各人の意識の中に浸透している事態を読み取られている。氏はこの能力主義に対抗しうる現代平等論の構築という優れて実践的かつ理論的な問題意識から、ブルジョアジーの代表者シエイエス、ジロンド派のロベスピエール、そしてサン＝キュロットがバブーフの平等論の検討を通じてフランス革命期の平等論のはらむ問題性を摘出される。そこからはたとえばどのような『人権宣言』が見えてくるだろうか。シエイエスは一定額以上の納税者にのみ選挙権を認める制限選挙制を主張して、法の前の平等（第一条）を否定する。だがこの立論は能力の測定基準として財産を位置づけるものであって、「すべての市民は、〔……〕徳と才能における差異以外の何らの差別もなく、……」という『宣言』第六条の適用に他ならない。他方ロベスピエールはこの法的平等をさらに徹底して社会的平等を主張し、生存権を第一義的に掲げて『宣言』の地平を超える人権理解を示す。だがこの立論も所有権（『宣言』第十七条）を否定するものではなく、生存権の承認を基礎にした所有権の全面的否定はサン＝キュロットの流れを汲むバブーフらによって主張されたのであった。『人権宣言』を巡って実はフランス革命の過程においてもさまざまな階級的利害が衝突し、それを乗り越える議論すら展開されていたことが窺えよう。『宣言』は近代における人間解放の記念碑の一つである。しかしその抽象的文言が具体的な意味を担いうるのはただ過去との断絶を示す限りにおいてであり、『宣言』は未来に向けられていなかったとの氏の指摘を、私はフランス革命の平等論を前提するだけでは現代平等論の構築には到らないのではないかという問いかけとともに新鮮に受け取ったが、読者の皆さんはいかがであろう。

本特集には古茂田氏による原典対訳の『人権宣言』、そして今野氏による丁寧な読書案内「フランス革命を知るために」が添えられている。今回の特集には七月十四日のバスティーユの襲撃からブリュメール十八日のナポレオンのクーデタに到るフランス革命の歴史的展開を主題的に取り上げた論考がなかっただけに、このガイドが本特集に収められた諸論文を理解するうえでも読者の一助となることを期待したい。

（いしかわ　こういち
日本大学・十八世紀フランス哲学）

■編集後記

◇大学、学問の特集をやろうと企画が立てられたのは、昨年の秋のことだった。今、大学や学問にかかわっている人達は、言い知れぬ焦燥を感じているのではないか。少なくとも、大学と学問がどのような視角から問われているのか、そのことだけは明らかにしようと思い続けてきた。そうしなければ、皆が感じているもやもやは晴れないのではないか。その上で知の再建の方向を少しでも探っていこう。今、編集後記を書きながら、編集部の意図はある程度果たされたと感じている。力作を寄せて下さった諸氏に感謝する次第である。

◇もっとも、大学と学問に携わる人々は絶えず謙虚でなければなるまい。われわれが、本当の意味で国民や民衆のアカデミズムを構築することに成功しているなどとは思っていない。その課題を果たすための手掛かりを模索したつもりである。道のりは遠く険しくとも、着実な一歩を重ねられるよう皆とともに誓いを新たにしていきたい。そのためにも、新しい仲間、新しい血が求められている。本特集が新しい友との出会いの媒介となることを望んでいる。（矢澤）

◇昨年秋の唯研大会での役員改選にともない、編集委員会も新体制になり少し若返りました。これまでの編集委員会の努力によって確立されてきた基本方針を継承したいと考えていますが、新しい企画、発想なども積極的に取り入れていきたいと思います。

◇いくつかの新企画を紹介しますと、一つは、現代における女性の問題・関心を恒常的に誌面に積極的に反映していきたいと考えていることです。そのために、編集委員会のメンバーに、新たに意欲的な女性研究者に加わってもらいました。今後は毎号の特集にもこういった視点が生かされてくると思われます。さしあたり、本号では、「ふっく・えんど」としてフェミニズム論のユニークな紹介文に登場してもらいました。

◇もう一つは、今回の編集委員にはコミュニケーション論に関心をもっているメンバーの多いこともあって、「質問と対話のコーナー」を新設しました。趣旨や応募規定等に関しては、該当箇所を参照して戴きたいと思います。また、「現代科学からの人間像」という不定期のシリーズもの新たに開始しました。現代科学のいろいろな分野から登場してもらい、学際的関心を高められれば、と思っています。

◇最後に、本誌の充実のために、この雑誌にふさわしいと思われる論文を書かれた際にはぜひご投稿下さるようお願いします。（尾関）

『思想と現代』第17号©　1989年3月25日発行　（季刊）定価1200円
編　集　唯物論研究協会　東京都小平市喜平町　3-3-16-304
発行所　唯物論研究協会　発行人　秋間　実
発売元　株式会社白石書店　東京都千代田区神田神保町1-28　〒101　☎03-291-7601
印刷所　東銀座印刷出版株式会社　製本所　坂本製本

唯物論研究協会編集

唯物論研究年報 1985年版

●特集　唯物論の伝統と現代　定価2800円

「反映」の意味……北村　実
理性と感情……鯵坂　真
三木清の「実践的唯物論」……志田　昇
宗教と構想力……津田雅夫
《日本における唯物論研究の動向》
現代思想と唯物論研究の課題……碓井敏正
《哲学史研究》
ルートヴィッヒ・フォイエルバッハ著
『理性論』(一八二八年)について……半田秀男
ヨーロッパ封建期における
哲学的思惟の展開……横山れい子
ヘーゲルの市民社会論と現実的人間把握……橋本　信
《海外文献紹介》
マルクス主義的「シェリング研究」の動向…長島　隆
《研究論文》
国家主義と仏教……田平暢志
子どもの生活と発達……池谷壽夫
《研究ノート》
インド研究の動向……田中　収

岩崎　允胤　編著

現代の倫理

平和と民主主義のために

日本の歴史的な現実とその課題への着目を失うことなく、われわれにとっての現代の倫理――ニヒリズム、非合理主義に対峙し、人間の尊厳、平和と民主主義に根ざす倫理を体系的に展開する。　定価2500円

序章　現代倫理学の課題……岩崎允胤
第一部＝現代倫理の理論
Ⅰ　人間とその生活……岩佐　茂
Ⅱ　生活と倫理……岩佐　茂
Ⅲ　個人と社会……高田　純
Ⅳ　倫理的価値……高田　純
Ⅴ　倫理的自由……高田　純
Ⅵ　倫理的行為の構造……吉田正岳
Ⅶ　倫理的人格とその形成……横山れい子
Ⅷ　現代日本の倫理思想批判……牧野広義
Ⅸ　平和と民主主義の倫理……岩崎允胤
第二部　平和の倫理思想
Ⅰ　仏教における平和の倫理……岡部和雄
Ⅱ　キリスト教における平和の倫理……橋本左内
Ⅲ　近世以降のヨーロッパ
における平和思想……横山れい子

現代思想の境位〈唯物論研究年報 3〉

唯物論研究協会編　定価2800円 〒250円

産業社会の論理と非合理主義の哲学—中村雄二郎氏の所説を分析する—／**碓井敏正**　装置の学としての進化的認識論／**入江重吉**　認知心理学とピアジェの認識論／**中島英司**　歴史の転換期と女性問題／**早川紀代**　被爆者像の再検討—被爆者は「生ける屍」か／**舟橋喜恵**　西ドイツにおける「規範論争」／**高田純**　もういちど "das bewußte Sein" について—石井伸男氏の見解を駁し批判に答える — **秋間実**　形式論理の個物的区別性と矛盾について／**鶴見勉**　唯物論と現代社会の行方／**仲本章夫**

唯物論研究協会編　定価各2800円〒250円

唯物論の伝統と現代〈年報85年版〉
弁証法の現代的意義〈年報86年版〉

東京都千代田区神田神保町1-28　**白石書店**　☎03(291)—7601　振替東京2-16824

日本文化の諸相〈唯物論研究年報 4〉

唯物論研究協会編　定価2700円 〒250円

「新京都学派」と「新国家主義」／**上田　浩**　現代における「日本的なるもの」／**中村浩爾**　『菊と刀』再考／**河村　望**　柳田国男と日本文化論／**田中　収**　柳宗悦の民芸論—労働論・技術論の視点から／**仲村政文**　奄美の宗教と文化／**田平暢志**　ドイツにおける日本研究についての一考察—研究状況、問題点、提案—／**ヴォルフガング・ザイフェルト／尾関周二訳**　マルクスにおける「意識」の問題—秋間実氏の批判に答えて／**石井伸男**　創造の弁証法—主体的弁証法の問題—**立野保男**　現代日本社会の思想的位相／**吉崎祥司**

唯物論研究協会編　定価各2800円〒250円

唯物論の伝統と現代〈年報85年版〉
弁証法の現代的意義〈年報86年版〉

東京都千代田区神田神保町1-28　**白石書店**　☎03(291)—7601　振替東京2-16824

出版案内

鯵坂真著
現代思想の潮流
2500

北村実著
哲学と人間
1800

宮原将平著
科学との対話
1800

岩佐茂著
唯物論と科学的精神
1800

日隈威徳著
現代宗教論
1800

岩崎允胤著
恒久平和と人間の尊厳
1700

守屋典郎著
日本資本主義分析の巨匠たち
1700

林田茂雄著
漱石の悲劇
1900

佐木秋夫著
宗教と時代
1800

佐木秋夫著
新興宗教の系譜
1800

林田茂雄著
親鸞の思想と生涯
1500

平田哲男著
現代史における国家
2500

林田茂雄著
人間行動の弁証法
1500

平野義太郎著
平和の思想
1600

白石書店

出版案内

岩崎允胤編著
現代の倫理 2500

岩崎允胤著
学問・科学と青春 1500

伊藤セツ著
現代婦人論入門 1600

小林良正著
日本資本主義論争の回顧 1500

中濃教篤著
宗教の課題と実践 2200

佐藤伸雄著
文化財と歴史科学 1500

日本科学者会議編
科学者運動の証言 1500

永原慶二・松島栄一編
元号問題の本質 1700

磯村栄一・松浦総三編
国立国会図書館の課題 1500

大島博光著
レジスタンスと詩人たち 1600

谷山治雄著
一般消費税論 1700

川口幸宏著
生活綴方研究 1500

新藤東洋男著
在朝日本人教師 1500

内藤功著
国会からの証言 1500

白石書店

思想と現代●バックナンバー

創刊号
　特集　人間の解体？
第2号
　特集　戦後40年と知識人
第3号
　特集　問題としての理性
第4号
　特集　民衆と文化のヘゲモニー
第5号
　特集　現代科学と人間の変貌
第6号
　特集　教育の現在
第7号
　特集　やわらかい保守主義，かたい保守主義
第8号
　特集　性（セックス）——欲望と制度
第9号
　特集　いのちにふれる——バイオエシックスの周辺
第10号
　特集　揺らぎのなかのメディア

季刊 思想と現代 ●バックナンバー

創刊号●特集　人間の解体？

《創刊記念座談会》思想と現代（斎藤茂男・本多勝一・芝田進午）／人間「解体」の危機とその克服（中易一郎）／人間の見えない文化（佐藤和夫）／現在の風景（中河豊）

文化時評　映像文化の世界（島田豊）／**研究ノート**　人間・社会・生物――ウィルソン『生物社会学』をめぐって――（鈴木茂）／**ニュー・カレント**　歴史のなかの諸マルクス主義（大津真作）

理性とヒューマニズムの勝利にむけて――真下信一先生を追悼する――（吉田千秋）／戦後四十年と「日本文化」論の消長（河村望）／哲学の戦後精神――真下信一論――（鈴木正）　他

第2号●特集　戦後40年と知識人

戦後“啓蒙主義”の危機と再生の問題（吉田傑俊）／大衆社会論を越えて――知識人と大衆の弁証法――（矢澤修次郎）／社会問題の領域とコモン・センス論――戦後における古在由重氏の仕事――（小川晴久）／〈ポスト・モダン〉と唯物論（浦地実）／《座談会》戦後思想と〈ポスト・モダン〉（古茂田宏・新原道信・桃井健・村田常一・浦地実）

ぶっく・えんど　「欲望」の現在（古茂田宏）／**研究ノート**　ナショナリズム再考――福沢諭吉と大川周明――（湯川和夫）／**ニュー・カレント**　〈権威主義的ポピュリズム〉をめぐって（加藤哲郎）　他

第3号●特集　問題としての理性

デカルトと近代理性（河野勝彦）／フランス啓蒙思想における理性と感性（永冶日出雄）／カント，ヘーゲルと近代的理性（太田直道）／啓蒙的理性の可能性，もしくはコミュニケイション合理性（赤井正二）／チョムスキーの「合理主義」（下川浩）／レヴィ＝ストロースの超知性主義（渋谷治美）／近代日本における理性の態様（山田洸）／真下信一における理性（福田静夫）／《対談》理性では古いのでは？（仲本章夫・松井正樹）

ぶっく・えんど　「性」を読む（市川達人）／**文化時評**　スポーツと遊び（中村行秀）／**研究ノート**　レーニンのフィヒテ評価について（奥谷浩一）　他

唯物論研究●バックナンバー

創刊号
　特集　現代日本の反動化と思想の問題
第2号
　特集　民主主義（品切）
第3号
　特集　現代の感性と理性
第4号
　特集　世界史の現段階
第5号
　特集　人間の幸福とはなにか
第6号
　特集　現代日本の文化を考える
第7号
　特集　転換の時代
第8号
　特集　現代のマルクス像（品切）
第9号
　特集　われわれにとって国家とは何か
第10号
　特集　科学・技術と現代文明
第11号
　特集　歴史の進歩と現代生活

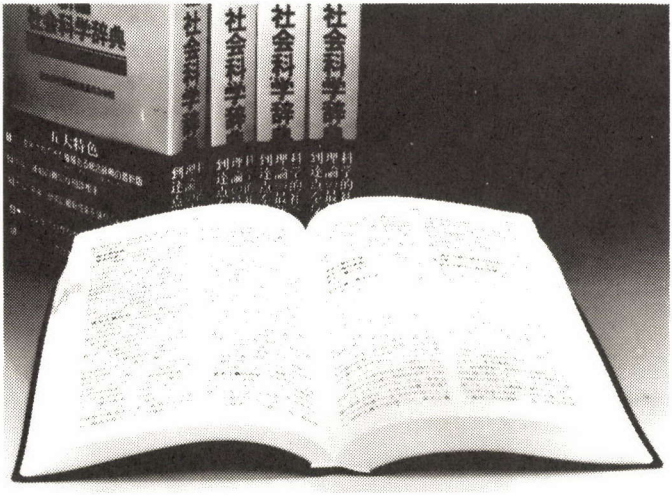
新日本出版社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-25-6
☎03(423)8402営業03(423)9323編集
振替東京3-13681

「新編」でなければ
わからない。

★科学的社会主義の理論の最新の到達点を反映

社会科学の理論的研究の成果を盛りこんで抜本的に増補・改訂した画期的な最新版。政治、経済、国際、歴史、哲学、文化、科学・技術、大衆運動など各分野にわたる基礎概念、基本用語・事項を精選して約2000項目を収録。解説は正確で簡潔、読む辞典としても興味深い。世界史の激動をとらえ、未来への展望をひらくのに必携。



政治、経済から科学・技術まで
2000項目を収録。

社会科学辞典編集委員会◉編　四六判上製箱入　2800円〒300

新編 社会科学辞典

季刊

思想と現代

定価1,200円　ISBN4-7866-1028-3 C1010 ¥1200E